原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第36集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

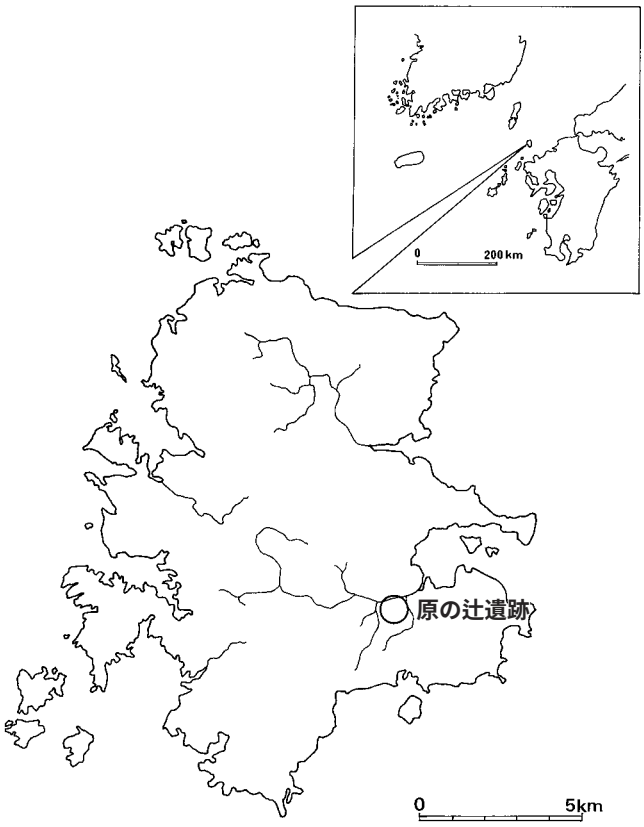
2007

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第36集

原の辻遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書



遺跡遠景（北西から印通寺方面を望む）

石田高原地区調査状況

船着き場跡11区東側調査区石組遺構（南から）

船着き場跡11区東側調査区石組遺構杭検出状況

発刊にあたって

本書は，国庫補助を受けて実施した，平成18年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は，これまでの調査で，弥生時代の人々の生活の場となった低丘陵を取り囲む多重の環濠や，日本最古の船着き場跡などが確認され，出土した数多くの中国や朝鮮半島の遺物と合わせ，わが国における弥生時代を代表する遺跡として広く知られています。これらのことから，中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の王都と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが，国の王都が特定されたのは原の辻遺跡だけで，当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡といえます。このため，平成12年11月には国特別史跡の指定を受けました。

本年度の範囲確認調査は，これまでの調査で確認されていた主要な遺構をさらに詳しく解明することを目的として，石田高原地区・石田大原地区・船着き場跡で実施しました。

その結果，石田高原地区ではこれまでに検出された複数の溝の繋がりを確認することができ，新たに道路状遺構も検出することができました。石田大原地区では，過去に検出された溝の方向と周辺の状況を確認することができました。昨年度に続き調査を行った船着き場跡では，西側の状況や南側に石組遺構が続くこと，南北約40m・東西約30mの規模であることなどが分かりました。

これらの調査成果が学術的な資料として広く活用されるとともに，地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

最後に，発掘調査の実施に当たり，御理解と御協力をいただきました地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成19年３月26日

長崎県教育委員会教育長　**横　田　修一郎**

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡調査研究事業に伴って実施した，平成18年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。

2．本事業は，遺跡範囲内の環濠や河川等の状況調査を目的として，平成14年度から実施している。

3．本書に収録した調査区の所在地は，長崎県壱岐市石田町西触字高原，字大原，芦辺町深江鶴亀触字不條である。

4．調査は長崎県教育委員会が主体となり，原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織

調査指導委員会	委員長	西谷　正（九州大学名誉教授）
	委　員	小田富士雄（福岡大学名誉教授）
	委　員	金関　恕（大阪府立弥生文化博物館館長）
	委　員	工楽善通（大阪府立狭山池博物館館長）
	委　員	沢田正昭（国士舘大学21世紀アジア学部教授）
	委　員	日野尚志（佐賀大学名誉教授）
	委　員	松井　章（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長）
	委　員	宮本長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授）

［委員記載は50音順］

原の辻遺跡調査事務所

所長	安楽　勉
係長	村川逸朗
係長	森崎伸一
文化財保護主事	川畑敏則（調査担当）
文化財保護主事	寺田正剛（調査担当）
文化財保護主事	林　隆広（調査担当）
文化財保護主事	溝上貴稔（調査担当）

5．本書で使用した遺構・遺物の実測，製図，および写真撮影は，原の辻遺跡調査事務所が行った。

6．本書に収録した遺物・図面・写真類は，原の辻遺跡調査事務所で保管している。

7．本書で用いた座標は日本測地系である。

遺跡内に設置された既存の基準点について，平成14年度４月１日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され，標高の観測を再度実施したところ，0.417mの比高差があったことが判明した。したがって，平成17年度の調査および報告書から－0.417mの修正をおこなった新しい標高値を採用するものとする。

8．本書の執筆担当者は，本文目次に（　）で示している。

9．船着き場跡の調査に際しては，文化庁記念物課に現地にて御指導いただいた。記して感謝申し上げます。

10．貿易陶磁器の分類は，「太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ＸＶ』―陶磁器分類編―2000」の名称分類に従った。

11．本書の編集は各担当者の協力を受けて，川畑が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地と環境……1（溝上）
　1．地理的環境
　2．歴史的環境

Ⅱ　調査に至る経緯……6（川畑）

Ⅲ　調査
　1．石田高原地区の調査……（川畑）
　　⑴　調査概要……9
　　⑵　土層……12
　　⑶　遺構と遺物……12
　　⑷　小結……55
　2．石田大原地区の調査……（寺田）
　　⑴　調査概要……61
　　⑵　遺構……64
　　⑶　遺物……67
　　⑷　小結……72
　3．船着き場跡（不條地区）の調査……（寺田）
　　⑴　調査概要……77
　　⑵　層序……80
　　⑶　各調査区の状況……82
　　⑷　出土遺物……85
　　⑸　ボーリング調査……87
　　⑹　小結……89

付　編　　平成18年度原の辻遺跡（石田高原地区）における自然科学分析

挿 図 目 次

第１図　壱岐島と原の辻遺跡の位置……1
第２図　印通寺港周辺古代主要遺跡分布図および国府推定地（１/25,000）……2
第３図　平成18年度調査研究事業調査区位置図（１/6,000）……8
第４図　石田高原地区調査区位置図（１/800）……10
第５図　石田高原地区過去の調査区と遺構配置図および今年度の調査区（１/800）……11
第６図　石田高原地区今年度検出した遺構と過去に検出した遺構の配置図（１/500）……13・14
第７図　石田高原地区今年度調査区における遺構配置図（１/150）……15・16
第８図　石田高原地区Ｆ区・Ａ区・Ｂ区・Ｃ区土層図（１/40）……17・18
第９図　石田高原地区Ｃ区・Ｄ区土層図（１/40）……19
第10図　石田高原地区Ｅ区・Ｃ区土層図（１/40）……20
第11図　１号溝（SD－１）平面および断面図（１/40）……21
第12図　２号溝（SD２）平面図および SD２・３号溝（SD３）断面図（１/40）……23
第13図　４号溝（SD４）・１号土坑（SK１）平面図および断面図（１/40）……24
第14図　５号溝（SD５）平面図および断面図（１/40）……26
第15図　道路状遺構（SF１）位置図（１/300）……28
第16図　Ａ区 SF１平面図（部分）および断面図（１/15）……29・30
第17図　SD１・SD２・SD３・SD４出土遺物（土器①）（１/４）……31
第18図　SD４出土遺物（土器②）（１/４）……32
第19図　SD４・SD５・SK１出土遺物（土器③）（１/４）……33
第20図　SF１出土遺物（土器①）（１/４）……34
第21図　SF１出土遺物（土器②）（１/４）……35
第22図　SF１出土遺物（土器③）（１/４）……37
第23図　SF１出土遺物（土器④）（１/４）……39
第24図　SF１出土遺物（土器⑤）（１/４）……40
第25図　出土遺物（土器⑥・土製品）（１/３）……41
第26図　出土遺物（瓦質土器・陶質土器）（１/３）……43
第27図　出土遺物（須恵器・瓦器・陶磁器）（１/３）……44
第28図　出土遺物（石器①）（１/２）……46
第29図　出土遺物（石器②）（１/４）……47
第30図　出土遺物（石器③）（１/４）……48
第31図　出土遺物（石器④（１/４）・金属器（１/２）・ガラス玉（１/１）・木製品（１/２）……49
第32図　平成18年度石田大原地区調査区位置図（１/4,000）……61

第33図　石田大原地区調査区設定図（１/1,000）……62
第34図　平成18年度石田大原地区遺構配置図（１/80）……63
第35図　溝土層図（１/40）……64
第36図　石田大原地区土層図①〔調査区北壁・西壁〕（１/60）……65・66
第37図　石田大原地区土層図②〔調査区中央部・南壁〕（１/60）……65・66
第38図　出土遺物①（１/３）……68
第39図　出土遺物②（２/３，１/２）……69
第40図　鏡復元図（１/２）〔平成15年度出土鏡と合成復元〕……69
第41図　丘陵南側環濠など検出位置図（１/5,000）……71
第42図　丘陵南側環濠など土層図（１/80）……71
第43図　船着き場跡位置図（１/10,000）……77
第44図　船着き場跡調査区位置図（１/6,000）……78
第45図　船着き場跡調査区位置図（１/500）……79
第46図　10区・11区平面図・土層図（１/100）……81
第47図　12区・13区平面図・土層図（１/100）……83
第48図　船着き場跡および周辺出土遺物（１/３，２/３，１/４）……86
第49図　平成18年度船着き場跡周辺ボーリング調査位置図（１/2,000）……88
第50図　船着き場跡推定図（１/400）……90
第51図　Ⅶ層（明灰色粘土層）堆積状況（１/400）……92
第52図　中世溝（Ⅱ層）検出状況（１/400）……92

表　目　次

第１表　古代関連遺跡発掘調査報告書一覧……2
第２表　石田高原地区出土土器観察表①……51
第３表　石田高原地区出土土器観察表②……51
第４表　石田高原地区出土土器・土製品観察表……53
第５表　石田高原地区出土瓦質土器・陶質土器観察表……53
第６表　石田高原地区出土須恵器・瓦器・陶磁器観察表……53
第７表　石田高原地区出土石器観察表……54
第８表　石田高原地区出土金属器・ガラス玉・木製品観察表……54
第９表　丘陵南側検出環濠など一覧表……71

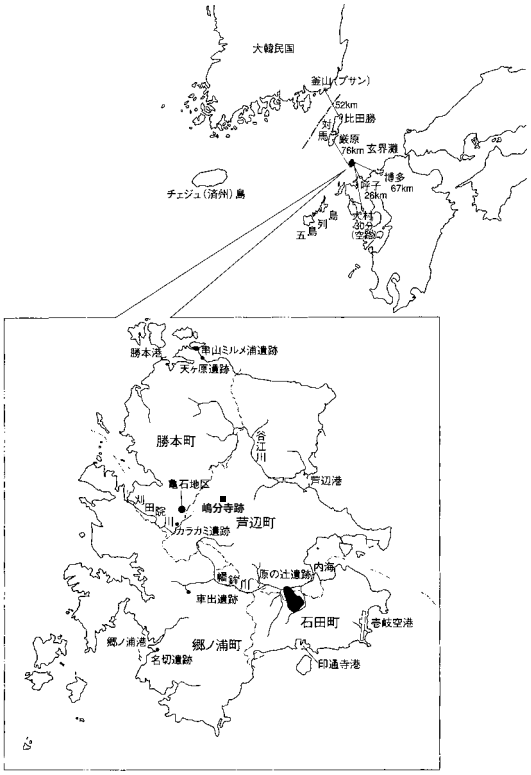
図 版 目 次

図版１　石田高原地区遺跡近景／１号溝土層堆積状況／２号溝土層堆積状況……57
図版２　３号溝土層堆積状況／４号溝土層堆積状況・道路状遺構敷石状況／５号溝土層堆積状況…58
図版３　１号土坑土層堆積状況／道路状遺構検出状況①／道路状遺構検出状況②……59
図版４　石田大原地区調査区遠景／北壁土層堆積状況①／北壁土層堆積状況②……73
図版５　遺構検出状況〔溝・柱穴など〕／不定形土坑検出状況／溝土層堆積状況……74
図版６　鏡出土状況／内行花文鏡（平成15年度出土鏡と合成）／調査風景……75
図版７　船着き場跡から丘陵を望む／10区東 完掘状況／
　　10区東 明灰色粘質土（Ⅶ層）堆積状況 ……93
図版８　10区西 完掘状況／11区東 石組検出状況／11区東 中世溝土層検出状況 ……94
図版９　11区西 完掘状況／12区東 完掘状況／12区西 完掘状況 ……95
図版10　13区東 石組検出状況／13区中 河川内礫出土状況／
　　13区西 弥生時代以前の河川跡検出状況 ……96

Ⅰ．遺跡の立地と環境

１．地理的環境

原の辻遺跡は，玄界灘に浮かぶ東西約15㎞，南北約17㎞，総面積約138㎢の壱岐島の東南部に位置する。遺跡は南から北に向けて舌状に伸びる最標高18ｍの丘陵部と，いくつかの河川が流れ込む平野部で構成され，遺跡の範囲は約100haである。遺跡の北側を流れる幡鉾川は全長約8.8㎞と島内最長で，遺跡から東へ約1.5㎞下れば内海湾に達する。幡鉾川の上流，島の西南部には，原の辻遺跡と同じ弥生時代の拠点集落として知られる車出遺跡があり，さらにその北西部にはＶ字型の環濠や豊富な漁撈具，金属製品や卜骨などが出土したカラカミ遺跡が存在する。



第１図　壱岐島と原の辻遺跡の位置

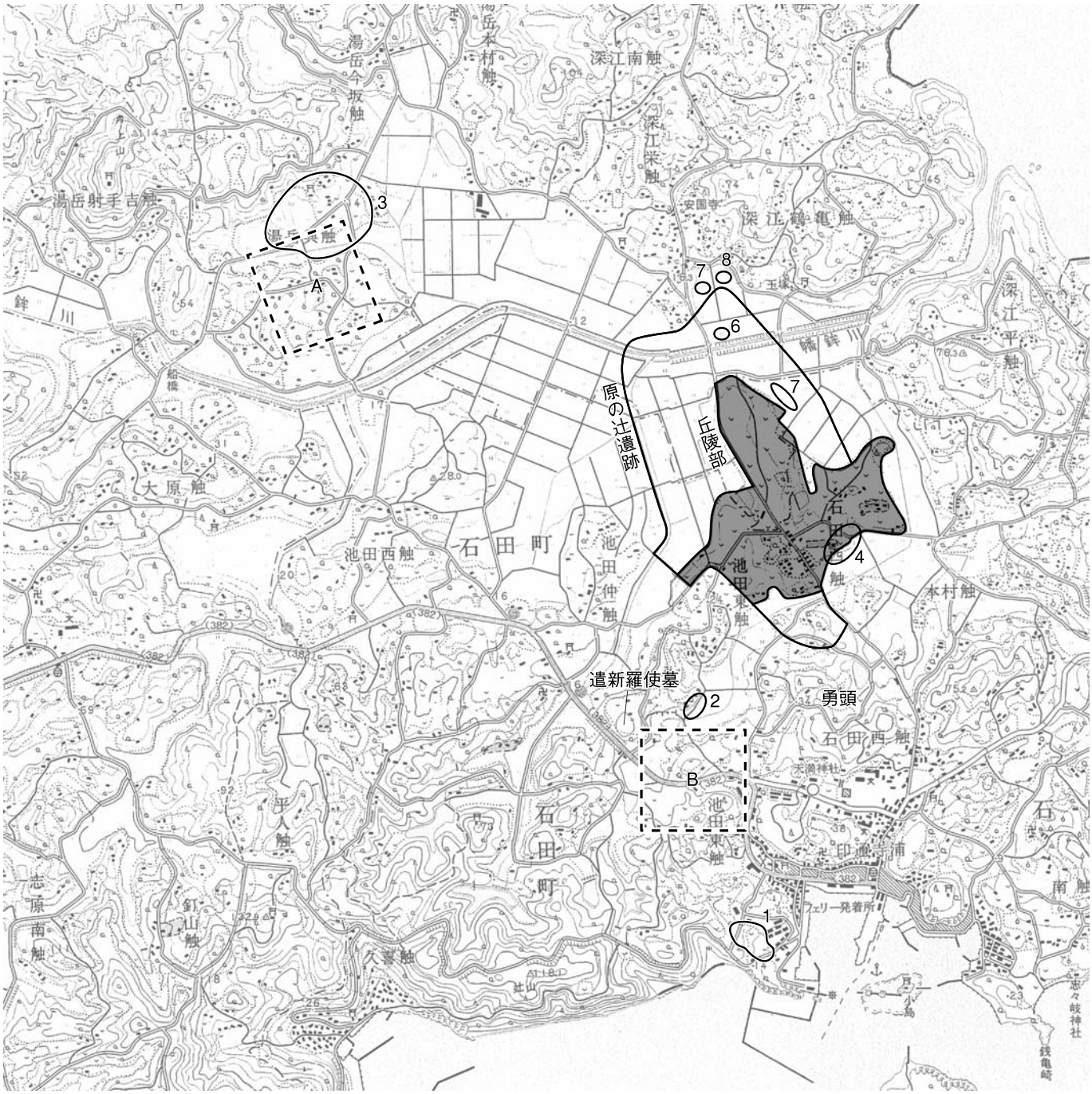
現在，原の辻遺跡が立地する幡鉾川の下流域は「深江田原」と呼ばれる県内有数の穀倉地帯である。国の特別史跡に指定され，弥生時代の復元整備が進む丘陵部一帯に対し，平成５年以降，大規模な圃場整備が行なわれた平野部では，たばこ・麦・大豆・米・牧草など様々な商品作物の栽培が年間を通して行なわれており，季節ごとの景観を演出している。また，遺跡全体を見下ろす北側の台地上には平成21年に（仮称）一支国博物館・県立埋蔵文化財センターの開館が予定されており，すでに建設工事が始まっている。

壱岐島で最も標高の高い山は南西部に位置する岳の辻で，約213ｍである。因みに五島列島福江島の最高峰は父ヶ岳で約461ｍ，対馬島の最高峰は矢立山で649ｍであり，その標高差から見ても壱岐島がなだらかで，比較的平坦な地形の島であることが想像できよう。現在，島内の至るところに溜め池が設けられており，四方を海に囲まれた立地条件の中で水産業のみならず農業が基幹産業である点は，他の離島地域に見られない壱岐島の大きな特徴の一つである。

島の基盤となる地質を見ると，古第三紀に形成された砂岩・泥岩による勝本層が最下層で，その上に壱岐層群，芦辺層群，郷ノ浦層群が順次形成されている。島全体の９割以上を覆うこの玄武岩層の割目には地下水が湛えられており，この島の豊かな自然の恵みは「麦焼酎」に姿を変え，全国に販売されている。

２．歴史的環境――古代遺跡を中心に――

壱岐島が中国の歴史書『魏志』倭人伝に登場する「一大国」（一支国の誤記と考えられる）に相当することは周知の通りであるが，正式に行政区分されたのは７世紀後半以降のことである。対馬とと



第２図　印通寺港周辺古代主要遺跡分布図（１～８）および国府推定地（Ａ～Ｂ）（1/25,000）

第１表　古代関連遺跡発掘調査報告書一覧（番号１～８は第２図に対応）

番号	遺跡名および地区	古代の主な出土遺跡・遺構	シリーズ名	タイトル／サブタイトル	発行（発行年）
1	中尾遺跡	初期貿易陶磁・鉄滓・羽口	石田町文化財調査報告書 第２集	中尾遺跡	石田町教育委員会(1998)
2	椿遺跡	石帯・瓦・須恵器・黒書土器	石田町文化財調査報告書 第１集	椿遺跡	石田町教育委員会(1996)
3	興触遺跡	貿易陶磁・土師器	原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第７集	興触遺跡／幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	長崎県教育委員会(1998)
4	大川地区	初期貿易陶磁・施釉陶器・滑石製石鍋・製塩土器	石田町文化財保護協会調査報告書 第２集	原の辻遺跡Ⅱ／町道江里線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書	石田町文化財保護協会(1995)
4	大川地区	初期貿易陶磁・施釉陶器・墨書土器	原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第１集	原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡／幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	長崎県教育委員会(1997)
4	大川地区	初期貿易陶磁・イスラム陶器	原の辻遺跡調査事務所報告書 第18集	原の辻遺跡／原の辻遺跡発掘調査事業に係わる範囲確認調査報告書	長崎県教育委員会(2000)
5	石田高原地区	木簡５点	長崎県文化財調査報告書 第124集	原の辻遺跡／幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	長崎県教育委員会(1995)
6	川原畑地区	道路状遺構	原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第１集	原の辻遺跡・安国寺前Ａ遺跡・安国寺前Ｂ遺跡／幡鉾川流域総合整備計画(圃場整備事業)に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	長崎県教育委員会(1997)
7	安国寺前Ａ遺跡	銅鈴帯・初期貿易陶磁・施釉陶器	〃	〃	〃
8	安国寺前Ｂ遺跡	初期貿易陶磁	〃	〃	〃
9	嶋分寺	版築基壇の建物跡・平城宮6248Ａ型式と同範の軒丸瓦	芦辺町文化財報告書 第５集	壱岐嶋分寺Ⅰ	芦辺町教育委員会(1991)
9	〃	瓦	芦辺町文化財報告書 第７集	壱岐嶋分寺Ⅱ	芦辺町教育委員会(1993)
9	〃	製塩遺構・瓦	芦辺町文化財報告書 第８集	壱岐嶋分寺Ⅲ	芦辺町教育委員会(1994)

もに下国として西海道11国の１つに数えられることになった壱岐国には石田郡と壱岐郡の２郡が設置された。壱岐島には島中央部の亀石地区から嶋分寺が存在する国分地区にかけて，長崎県全体の60%以上の古墳が存在する。それらは築造年代が６世紀後半以降に偏ることや，石室の規模と構造，及び副葬品の内容などから，大和政権と当時の壱岐の首長間との間に強い結びつきができていたことを示しており，また，白村江の戦いの翌年（664年）には防人と烽がおかれたことから推察すると，国防上の要地であったことが一国に遇せられた主な理由であろう。

古代の壱岐を考える上で，原の辻遺跡およびその周辺部は重要な位置を占める（第２図参照）。まず注目されるのが，原の辻遺跡内の南東部にあたる大川地区で出土した初期貿易陶磁と国産施釉陶器である（表1-4）。その内訳を見ると，初期貿易陶磁が越州窯系青磁Ⅰ類49点・Ⅱ類６点，白磁Ⅰ類12点，華南産白磁11点，長沙窯系水注７点，朝鮮系陶器３点，イスラム陶器１点，計89点（小破片を含めるとさらに数十点増える）であり，国産施釉陶器が緑釉陶器25点，灰釉陶器38点，計63点である。これらの品々は当時，需要層が限られた奢侈品であり，特に初期貿易陶磁は県内でこれほどまとまった量が出土する例は無かった（宮崎1998）。その意義を要約すると，①初期貿易陶磁と国産施釉陶器のまとまった出土量は所持者の富裕さと権力の高さを示しており，大川地区周辺に国府または郡家があった可能性が高い　②鴻臚館やその他官衙施設に共通する初期貿易陶磁の基本セット（越州窯系青磁Ⅰ類・白磁Ⅰ類・長沙窯系水注）以外に，それらの地域で見られない華南産白磁が出土しており，壱岐島がその地理的特殊性から新羅や唐の商人と積極的に接触していた可能性が高い，という２点が挙げられよう（表1-4）（川口1999，2002，2005）。

①については，その他の地区の調査においても興味深い成果が見られる。原の辻遺跡の北側に幡鉾川を挟んで存在する安国寺前Ａ遺跡及び安国寺前Ｂ遺跡でも初期貿易陶磁が出土し，前者からは国司の守や官人位階７位（守や掾クラス）が帯同するとされる銅銙帯が発見された（表1-7）。また，川原畑地区の調査では，銙帯出土地区からわずか200mほど南へ下った地点で，側溝を持った道路状遺構が見つかっている（表1-6）。さらに，原の辻遺跡の東側低地部にあたる石田高原地区では，土壙に廃棄された５片の木簡が発見された。これは物品に関わる貢進・請求木簡と，記録木簡（支給帳簿とみられるもの）に大別され，通常の官衙内の活動に伴うものであるという（表1-5）。これらの調査成果を考え合わせれば，４世紀前半には廃絶したと考えられる原の辻遺跡の立地が，律令国家体制が構築・整備される過程の中で再び着目され，歴史の表舞台に躍り出ていた様子が窺える。

さて，本年度の原の辻遺跡石田高原地区の調査において，弥生時代の埋没した環濠の上に，拳大の石をぎっしりと敷き詰めた道路跡と思われる遺構が検出された（第10図・第15図・第16図・図版３）。上述の木簡出土地点もここにほぼ隣接している。これらのことから，遺跡丘陵部の東側を迂回しつつ南北へつながる道路の存在が想定できるであろう。では古代の壱岐において，道路はどのような意味を持っていたのだろうか。

古代の道路を考える上でまず想起されるものとして駅伝制がある。646（大化２）年の改新の詔ではじめて駅馬・伝馬を置いたことが『日本書紀』に記されているが，本格的に制度化されたのは大宝

令以後のことである。この制度に基づき，全国には七道の駅路が開かれ，山陽道と西海道の一部からなる大宰府道を大路として二十疋，東海道と東山道は中路として十疋，その他の諸道は小路で五疋の駅馬を各駅に置くことを原則とし，駅家は三十里（約16㎞）を基準に設置された。これを維持運営するために駅田を置いて駅稲を当て，駅戸を配して駅馬を飼養させ，駅戸から駅子が出て駅務に従事し，これを駅長が管理し全体には国司の管轄下に置かれた。駅馬は緊急連絡の馳駅・飛駅，公文書の逓送，特別の要務による官吏の旅行などに用いられ，その利用には駅鈴の提示を必要とした。一方，伝馬は郡ごとに全国一律で五疋を置き，その使用には伝符の提示を要することが定められた。駅馬が駅家に置かれたのに対し，伝馬は郡家に置かれ，郡家は必ずしも駅路に沿わないので，駅路と伝路は本来別格であったと考えられる。畿内だけでなく地方でも少なくとも幅６～13mもある駅路跡と思われる大道が見つかっていることや，特に低地部では地形に沿わず直線的に伸びていることが近年の調査から分かってきた（木下1996）。

壱岐国については，『延喜式』に「優通」「伊周」の２駅が設置されるとともに駅馬が５疋備えられていたことが記されているが，伝馬に関する記述はない。両駅はそれぞれ壱岐島の北端と南端に位置したと考えられており，前者に比定されているのが大川地区から1.2㎞ほど南に下ったところに位置する印通寺港付近である。現在でも壱岐島と九州本土とを最短距離で結ぶフェリーが発着している交通の要衝であり，その北側には「優通（ゆうづ）」と発音を同じくする「勇頭（ゆうず）」という小字が残っている。さらに勇頭の西側には壱岐で不遇の最期を遂げた遣新羅使雪連宅満の墓や，瓦や石帯などが出土した椿遺跡があり，南側には古代から中世にかけての製鉄関連遺物や白磁Ⅰ類等が出土した中尾遺跡がある。大川地区を含め，古代において印通寺周辺が重要な地点であった様子が窺える。

駅路と関連し，それが経由したであろう国府の地についても，地名や総社，印鑰社の存在などを頼りに推定する試みがこれまでなされてきた。最も有力な説は芦辺・石田両町にまたがる湯岳興触地区である（第２図Ａ）。この地は古来，壱岐郡に属していたが，10世紀初頭に成立した『和妙抄』によれば壱岐の国府は石田郡にあったとされており，その解釈をめぐって後に国府が勇頭西側に移転した（第２図Ｂ）とする説や，郡境そのものが変更されたという説が提唱されている（註１）。興触遺跡では部分的な発掘調査も実施されたが，国府跡と積極的に断定できるような遺物は発見されていない（表2-3）。一方，国分寺に相当する嶋分寺はその所在地が確定している。『延喜式』には「壱岐直の氏寺を嶋分寺と為す。僧五口を置く」と記されており，発掘調査の結果，その地は島中央部の国分地区にあったことが判明した（表1-9）。伊周駅は，現在の勝本港付近に比定されており，駅路は国府，嶋分寺を経由しつつ壱岐島内を縦断し，それぞれ対馬へ呼子へと海上の道として繋がっていたと思われる（日野1976，高橋1979）。

さて，優通駅を出発点とし，これまでの国府推定地を経由し，嶋分寺や伊周駅へ向かう道が駅路であるとすれば，原の辻遺跡は駅路から外れた位置となる。では，原の辻遺跡丘陵部の南東～北側にかけて出土した官衙との関連性が深い初期貿易陶磁・国産施釉陶器や木簡，銅銙帯，道路状の遺構などはどのように捉えるべきなのであろうか。

馬場氏は駅伝制の理念的な意味を「在地社会から卓越し，都との空間的連続性を視覚的に示したのが駅路であり，（中略）駅鈴という霊器といった装置によって，他の通行者との間や，通過点での様々な儀礼の省略を可能にしている。駅制はこうした儀礼の省略や，在地社会と切り離されることによって，閉塞性も有していた各在地社会を超越することができ，王権の意思のみによって運用され得るものとな」る一方で「郡の交通機能は，在地社会に包摂された交通のあり方で，伝馬はそこに王権が一定の枠をはめたものである」と述べている（馬場2004）。駅伝制は，生活に密着し実用性の高い地方の道路に中央集権的な政治理念を吹き込む極めて巧妙な制度であり，新たに設置された駅路と在地社会に既に存在していた道路を転用した伝路の２本立てによりそれを体現したのであろう。島中央部における古墳の密集度合や，防人・烽の設置から考えて，壱岐においては駅伝制が制度化される以前からすでに島内を結ぶ道路網が整備されていたことは十分に考えられ，制度化に伴ってこれまでの道路を改良して直線的な路線をとるような所も生じたはずである。今年度石田高原地区で発見された礫を敷き詰めた道路状の遺構は，丘陵の裾部を自然地形に添う形で蛇行しながら南北に展開していた。それが川原畑地区で見つかった溝間の心々幅６ｍの直線的な道路へと変化したと考えるならば，上記のような政府の政策に対応したものとも考えられ，またそこに郡司クラスの影響力が働いていたとすれば，官衙跡を示す可能性の高い遺物が周辺で多く見つかっている理由もうなずける。文献上，壱岐に伝馬は置かれていなかったが，それは『延喜式』が成立した10世紀初頭のことであり，一般的に９世紀には駅路と伝路は統合される傾向にあることからしても，以前に伝路が存在した可能性は十分にある。壱岐では９世紀に新羅商人の往来が頻繁化するが，それを受けてそれまで実用的に用いられた原の辻遺跡丘陵東側沿いの伝路が廃止され，国府沿いをはしる駅路の方へと機能が移ったことも想定できよう。いずれにしても詳細は今後の調査に委ねざるを得ないが，原の辻遺跡は壱岐における律令国家の地方支配のあり方を解明する上でも重要な鍵を握っていることを念頭におく必要がある。

（註１）木下1986を参照し，壱岐島南半部における国府推定地を第２図Ａ～Ｂに示した。

【引用参考文献】（第２表掲載報告書をのぞく）

川口洋平1999「長崎県における古代遺跡の調査－現状と課題－」(『古代交通研究』第９号，古代交通研究会)
川口洋平2002「長崎県島嶼部出土の初期貿易陶磁－対馬・壱岐・五島の調査成果から」(『貿易陶磁研究』NO.22)
川口洋平2005「古代の遺構・遺物」(『原の辻遺跡　総集編Ⅰ』長崎県教育委員会)
木下　良1986「壱岐国府（研究概況)」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第10集)
木下　良1996「古代道路研究の近年の成果」(『古代を考える　古代道路』吉川弘文館)
日野尚志1976「壱岐嶋の国府・郡家について」(『史学研究』23，広島史学研究会)
日野尚志1983「西海道国府考」(『太宰府古文化論叢』上，吉川弘文館)
高橋誠一1979「壱岐国」(『古代日本の交通路』Ⅳ，大明堂)
馬場　基2004「駅伝制と地方社会」(『駅家と在地社会』奈良文化財研究所)
宮崎貴夫1998「長崎県地域の貿易陶磁の様相－肥前西部・壱岐・対馬－」(『貿易陶磁研究』NO.18)
＊古代の道路跡を考察するにあたり，郷土史家の喜多正氏から様々な知見を頂いた。記して感謝申しあげたい。

Ⅱ．調査に至る経緯

原の辻遺跡は，壱岐在住の小学校教員松本友雄によって1904～1905（明治37～38）年頃発見された。その後1927（昭和２）年，松本は，これまでの調査成果をまとめる形で原の辻遺跡を中央の学会誌に紹介し，原の辻遺跡の存在が全国に知られることとなった。

1939（昭和14）年，中学校教員であった鴇田忠正は，耕地整理によって削られた原の辻台地北端の崖面から３層の遺物包含層を確認し，各層の土器を北部九州の弥生式土器編年と比較することで検討を行い，中期から後期へ移行する過程の土器と位置づけた。

戦後，1951（昭和26）年から1961（昭和36）年にかけて数度の調査が東亜考古学会によって行われた。その中の成果から，水野清一・岡崎敬氏により「原の辻上層式・下層式」の様式が設定された。この東亜考古学会の調査以来原の辻遺跡の調査は行われていなかった。原の辻遺跡の調査が再び開始されるのは1974（昭和49）年からである。

当時壱岐では，饅頭状に盛り上がった畑が水田に変えられていた。この土地基盤整備による削平工事によって，石田大原地区で甕棺片や石棺片が散乱しているという連絡が石田町教育委員会（現壱岐市教育委員会）を通して長崎県教育委員会へ報告され，緊急発掘調査が実施された。この調査では，1,000㎡の範囲に甕棺51基，石棺19基以上，溝４条を確認し，副葬品として戦国式銅剣，玉類等が数多く出土した。

この緊急調査の結果を受けて1975（昭和50）年から３年間にわたって範囲確認調査が行われた。範囲確認調査では，新たな墓域やＶ字状の溝を確認し陶質土器や中国鏡が出土した。この範囲確認調査から，遺跡が広範囲に及び，出土した遺物からは大陸との深い関係が認められた。

1990（平成２）年度からは，幡鉾川流域総合整備事業が計画され，それに伴う発掘調査が台地周辺の低地部を中心に行われた。その結果，遺跡は100haの範囲に及び，台地を多重の環濠で囲む大規模な環濠集落であることが判明した。その後，船着き場跡などの重要遺構の発見も相次ぎ，1997（平成９）年に国史跡に指定された。更に，2000（平成12）年には，国の特別史跡に指定され，現在整備が進められている。

2002（平成14）年度からは，これまでに行われた調査を補完する目的で，調査研究事業に伴う発掘調査を継続的に実施している。今年度の調査対象区は，船着き場跡，石田高原地区，石田大原地区の３地区とした。

船着き場跡は，1996（平成８）年度の調査で遺構が確認された後，昨年度調査が行われている。昨年度の調査では，船着き場の東側に存在する水路の確認，船着き場の南北の規模の確認，船着き場に取り付く河川の流路の確認，という成果を上げることができた。今年度は，船着き場の西側に調査区を設定し，北側ではボーリング調査を実施することで，船着き場の東西の広がりと船着き場に取り付く河川の流路の把握を試みた。

丘陵の北東低地部に位置する石田高原地区は，過去の調査で多重環濠が検出されているが，途中で

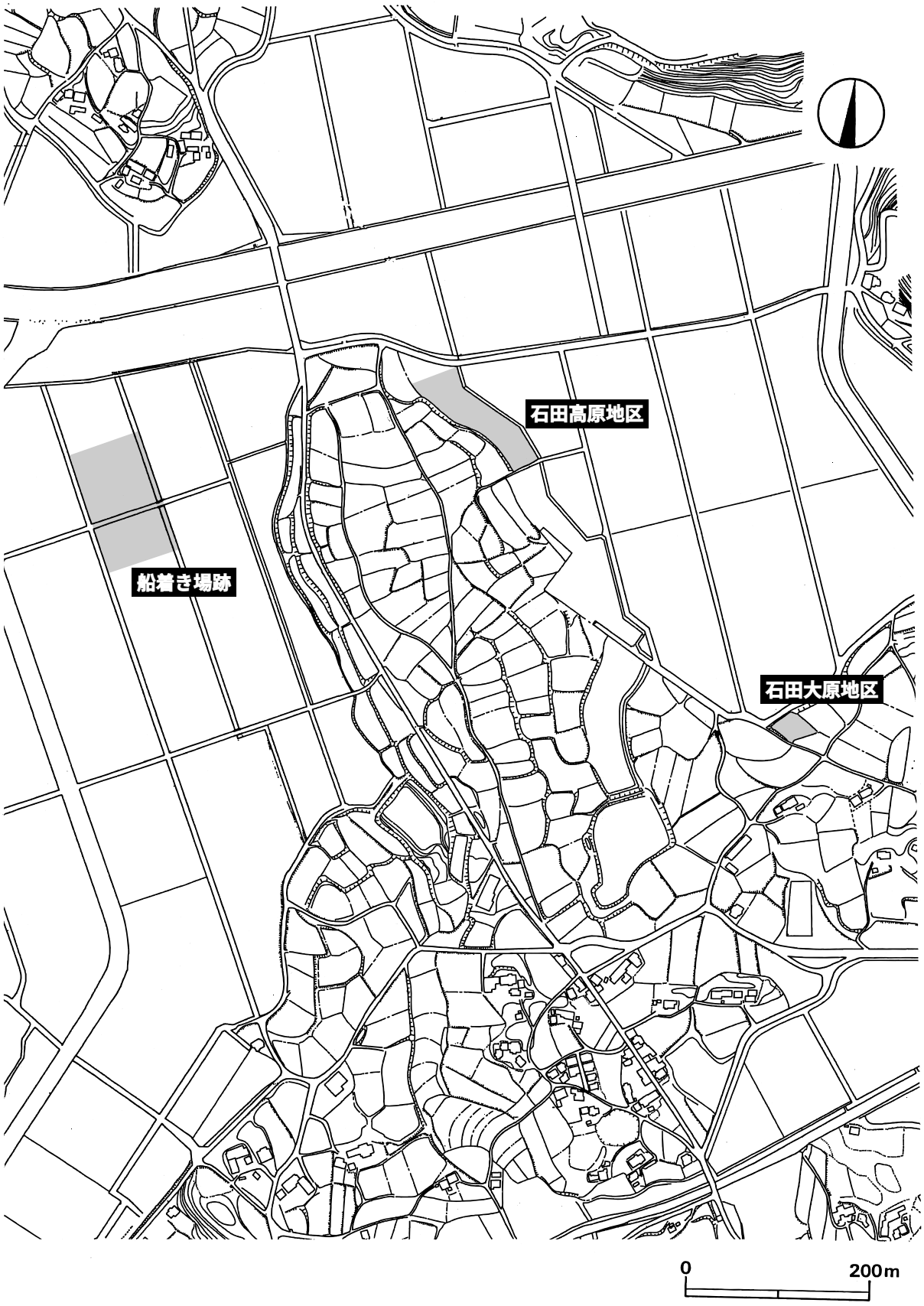
切れているものや枝分かれしているものがあり，各調査区で検出された環濠間のつながりが明確にはなってはいなかった。そこで今回，過去の調査区の間に調査区を設定することで，環濠間のつながりの把握を試みた。また，過去の調査では，調査の目的上部分的な調査で終わっているものもあり，環濠の時期が明確でなかったものもある。今回の調査では，それらの環濠の時期についても明らかになるよう試みた。

石田大原地区は，今回予定の調査区の一部が，2003（平成15）年度に石田町教育委員会によりすでに調査されている。この調査では，弥生時代中期後葉と思われる幅2.8m，深さ１mのV字溝が検出された。今回は，面的に広げて調査をすることで，V字溝の広がりや性格についての把握を試みた。

調査は，2006（平成18）年６月１日から12月26日まで実施した。

【参考・引用文献】

・2005「Ⅲ 学史と調査経過」原の辻遺跡　総集編Ⅰ『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集』長崎県教育委員会
・寺田正剛　2006「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第33集』長崎県教育委員会



第３図　平成18年度調査研究事業調査区位置図（１/6,000）

Ⅲ．調　　査

１．石田高原地区の調査

⑴　調査概要（第４図～第７図）

石田高原地区は，遺跡の中心である南北に伸びる台地の東側低地部に位置する。この地区の調査は，台地部の調査からかなり遅れて，1993（平成５）年度の幡鉾川総合整備事業によって初めて行われた。開発に伴う調査ではあったものの，この調査で，台地を取り巻く環濠を検出し，原の辻遺跡が多重の環濠を巡らす環濠集落であることが判明した。その後2002（平成14）年度以降，低地東側部分の遺構の広がりと環濠群のつながりを確認すべく調査研究事業として調査が継続的に行われ，東側低地部の様相が徐々に明らかになってきている。

今年度は，東側低地部のこれまでの調査でいまだはっきりとしていない環濠間の繋がりを明らかにする目的で，1993（平成５）年度調査区で16号溝を検出した地点を中心に，2002（平成14）年度北区，2002（平成14）年度中央区，2004（平成16）年度調査区の間を埋める形で調査区を設定した。調査区は，北からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区としたが，調査後半に検出した道路状遺構のＡ区より北での状況を把握するために，Ａ区の北にＦ区を設定した。

掘削は，南側のＥ区から行った。Ｅ区は2002年度中央区と部分的に重なっており，2002年度中央区で検出したSD１，SD２の続き（06－SD２，06－SD１）と北部分西壁際に溝と思われるプラン（４号溝＝06－SD４）を確認することができた。

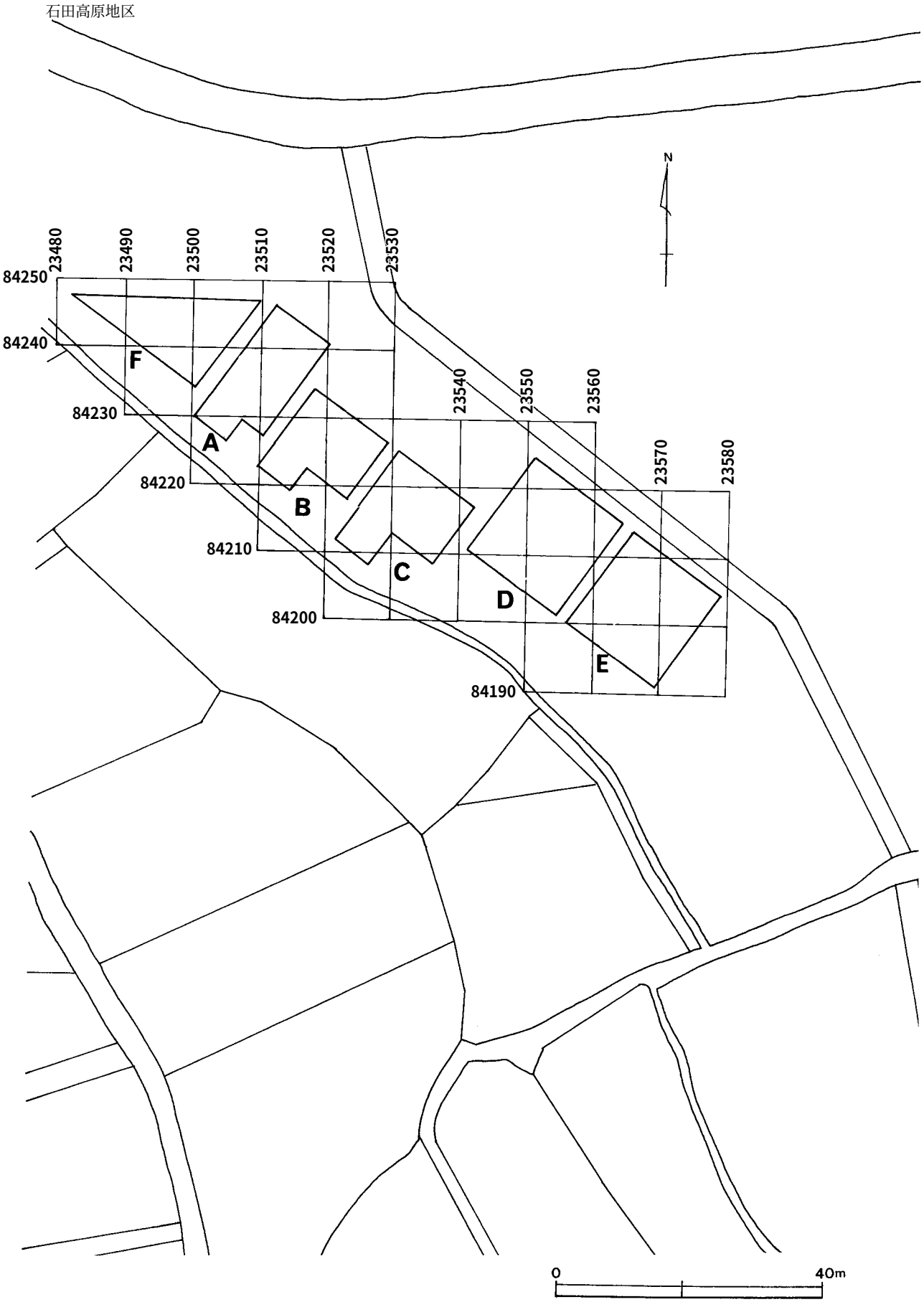
Ｄ区は，1993年度調査区で16号溝を検出した地点を含み，2002年度北区に隣接する。この区では，1993年度16号溝（93－16）が今年度調査の１号溝（06－SD１）と繋がり，さらに2002年度SD２（02－SD２）と繋がることを確認した。また，Ｅ区ではそれほどまでに明瞭ではなかった西壁際に見られる礫や土器片の集中がはっきりと確認できた。

Ｃ区ではＥ区，Ｄ区で認められた西壁際の集石が丘陵の縁辺に沿い，帯状に展開することを確認した。この集石は断面等の観察の結果，礫や土器片を敷いた道路状遺構であると判断した。また，南壁際で集石をはずしたところ，Ｅ区で検出した４号溝（06－SD４）の続きを検出することができた。この４号溝（06－SD４）は北壁際の道路状遺構の下からも確認できた。

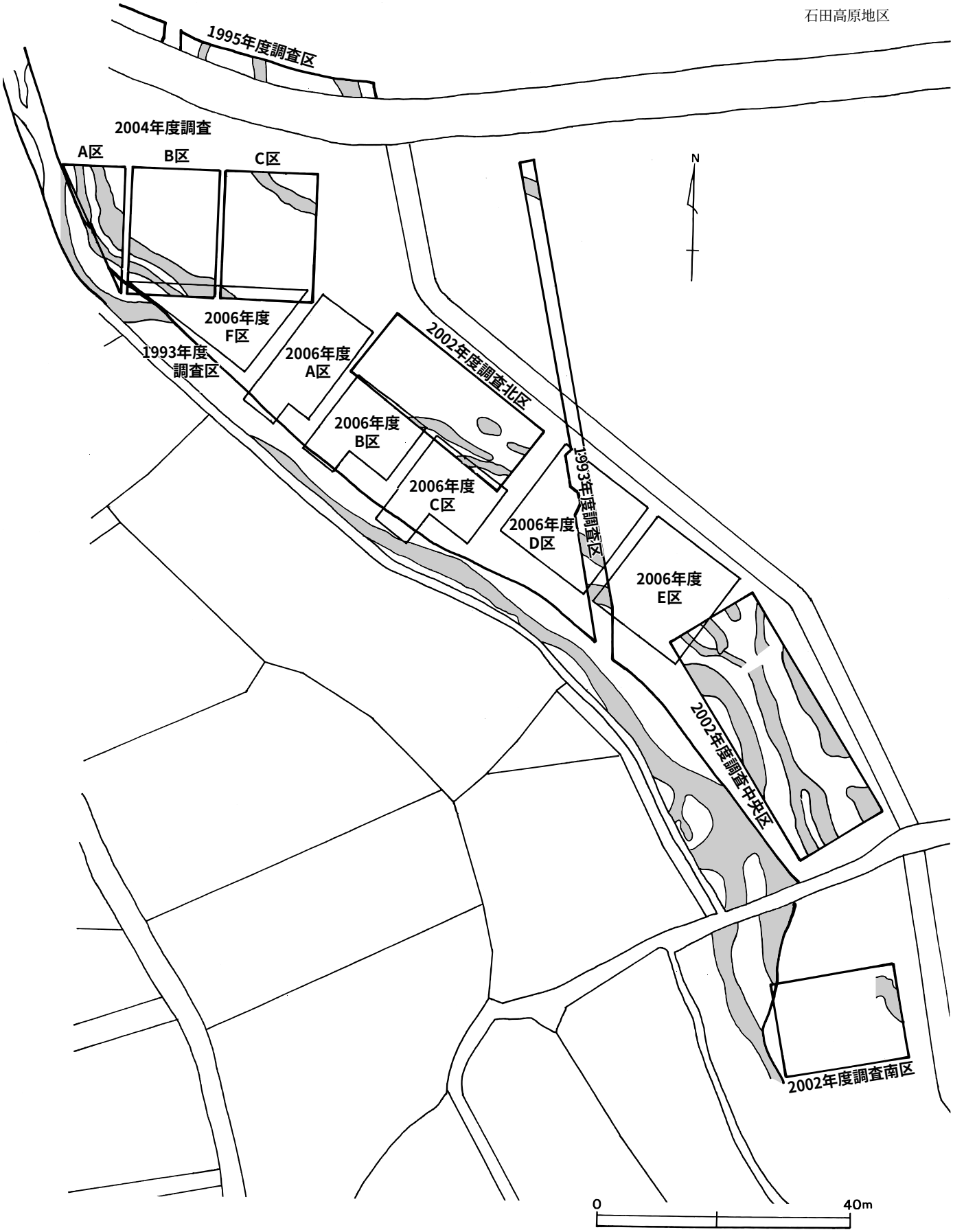
Ｂ区にも道路状遺構は続き，その下からは４号溝（06－SD４）の続きが確認できた。また，Ａ区へ向かって更に伸びている2002年度SD５（02－SD５）の続きを東部分で確認した（３号溝＝06－SD３）。

Ａ区でも，道路状遺構とその下の４号溝（06－SD４）は北西の方向へ向かって伸び，2004年度調査区で確認されていた集石につながる可能性が十分出てきた。Ｂ区で確認した３号溝（06－SD３）は，作業用ベルトの下からさらに北へ伸びていることを窺わせた。

道路状遺構が2004年度調査区で確認されていた礫群と繋がることを確認するためにＦ区を設定した。Ｆ区においても，道路状遺構は他地区での様相と変わらず円礫や土器片を多量に含み北西方向へ伸び，



第４図　石田高原地区調査区位置図（１/800）



第５図　石田高原地区過去の調査区と遺構配置図および今年度の調査区（１/800）

2004年度調査区で確認された礫群と繋がることが確認できた。合わせて道路状の遺構の下から重なって検出してきた４号溝（06－SD４）は，2004年度調査区で確認されたSD５（04－SD５）と，2002年度SD５（02－SD５）は2004年度SD３（04－SD３）と同一の溝であることも確認した。

⑵ 土層（第８図～第10図）

１層は客土である。重機で持ち込まれたのであろう一抱えもある石やコンクリート片が多量に入っている。２層から４層は水田面である。２層はにぶい褐色土である。ビニル袋やコーヒー缶が入り込み，最近まで地表に出ていたことを窺わせる（註１）。礫をほとんど含まない。３層は灰色粘質土である。きめの細かい粘質土で，鉄分が多く１日で茶褐色に変色する。近世の陶磁器が含まれる。４層は灰色粘質土である。２層と同じで，鉄分が多く１日で茶褐色に変色する。弥生土器片の量が増えるが摩滅しているものが多い。中世の輸入陶磁器が含まれる。４ｂ層は赤灰色粘質土である。土質は４層と同じであるが，小礫や土器片が増え硬くしまっている。須恵器片が見られる。５層は暗赤灰色粘質土である。さらに土器片が増え粘性も増す。含まれる土器片は弥生時代中期のもので占められ，この層は弥生時代中期の包含層であると思われる。６層は，灰白色の粘質土で地山である。６層地山の下からは，２枚の腐植土層が見られた。この腐植土は，調査区南側に見られＣ区南壁で顕著である。

（註１）中尾篤志　2005「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所報告書　第31集』長崎県教育委員会によると，1993（平成５）年度の調査終了後，排水目的で造成が行われたことを確認している。

⑶ 遺構と遺物

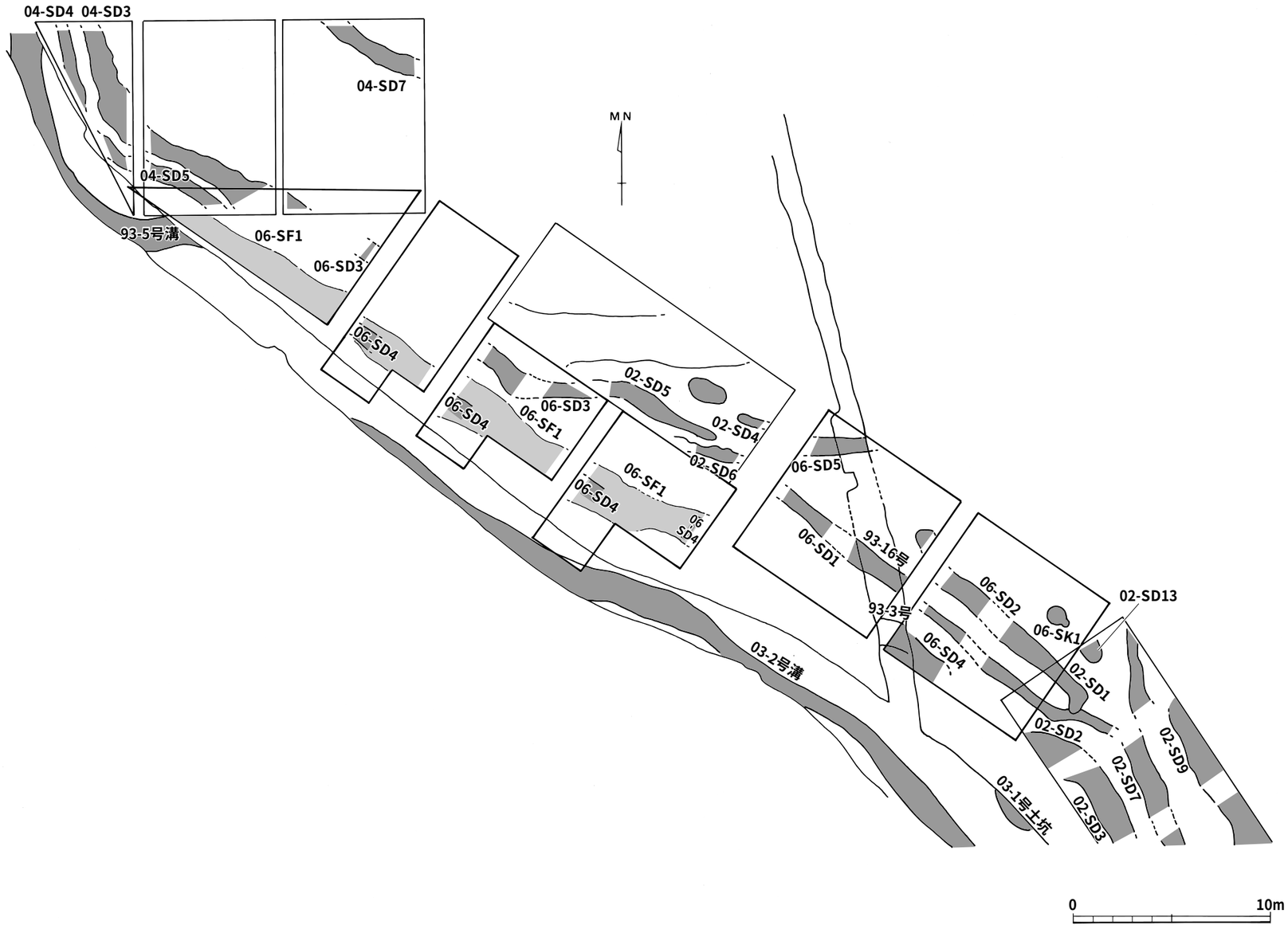
今回の調査では，５本の溝状遺構と土坑１基，および古墳時代の道路状遺構を検出した。５本の溝状遺構は，新たに検出した遺構ではなく過去の調査で確認された溝状遺構に繋がるものである。

①１号溝（06－SD１）（第７図，第11図）

断面は逆台形で最大幅1.8m，深さ0.4mを測る。2002年度調査時のSD２（02－SD２）と繋がり，Ｅ区内を２号溝（06－SD２）とおよそ２ｍの間隔を保ちながら併走する。途中で，1993年度調査区では16号溝（93－SD16）となりさらに直線状にＤ区内を伸びて北壁に至る。この溝の延長には2002年度調査時のSD６（02－SD６）があり同一の溝と思われる（註１）。底面レベルは，Ｄ区北壁で4.1ｍ，Ｅ区北壁で4.2m，2002年度中奥で4.2mを測り南東へ向けてわずかに傾斜している。

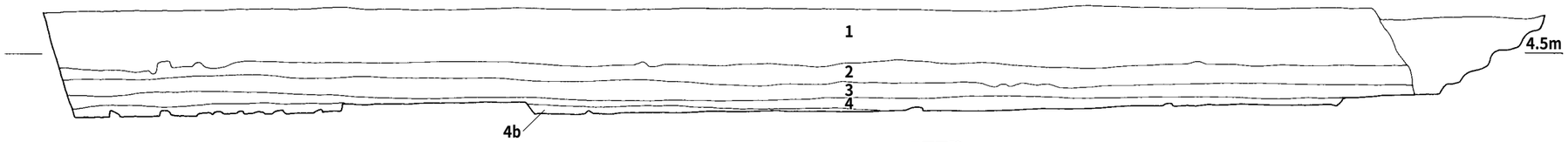
１号溝出土土器（第17図１～５・第２表）

1は短めの逆Ｌ字型口縁を持つ甕である。口縁部下に断面三角形の突帯が巡る。**2**は中央が若干上げ底になっている甕の底部である。外周の平らな部分は幅１㎝で巡っており，高台状を呈する。摩滅が著しい。**3**は支脚である。内面にシボリ痕を残すが丁寧な作りである。**4**は内外面にハケメ痕を持つ甕棺の胴部片である。外面は幅広の突帯が巡り，吸炭による黒変が見られる。**5**は丸みを持った胴部からわずかに外反しながら立ち上がる甕口縁部である。厚さ３㎜と非常に薄い器壁で，胎土に砂粒をほとんど含まない精良な粘土が使われている。搬入された土器と思われる。弥生時代中期中葉から



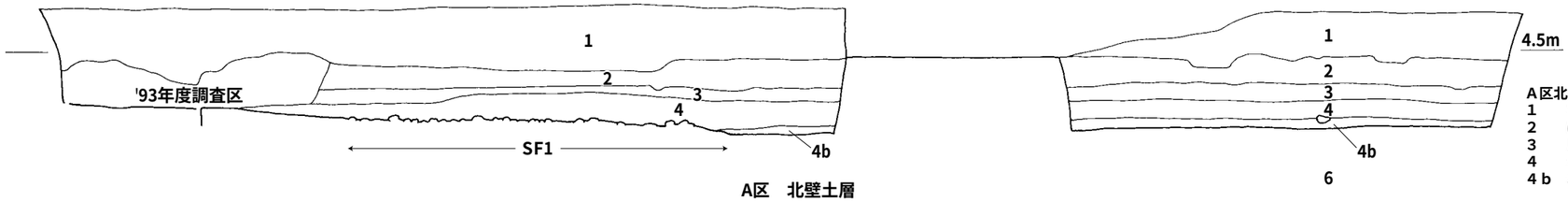
第６図　石田高原地区今年度検出した遺構と過去に検出した遺構の配置図（１/500）

第７図　石田高原地区今年度調査区における遺構配置図（１/150）



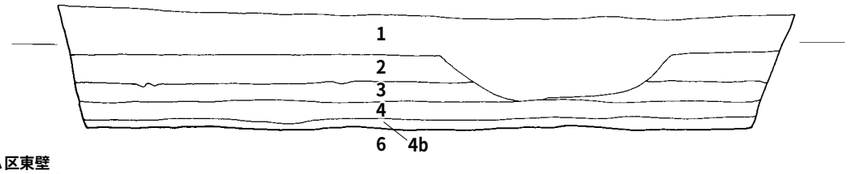
F区　西壁土層

F区西壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)



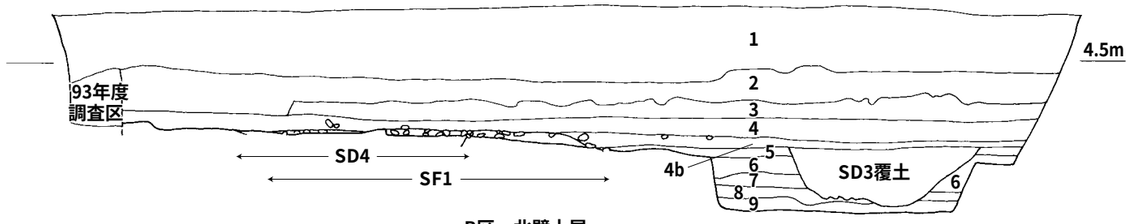
A区　北壁土層

A区北壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)



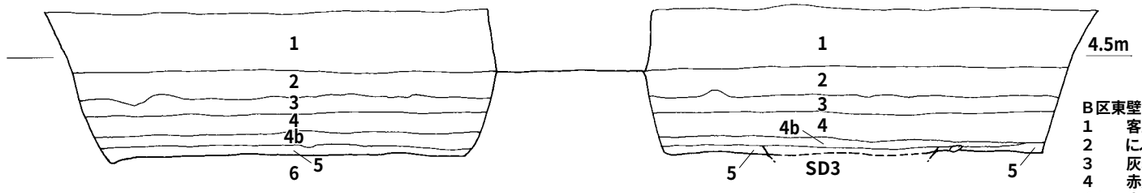
A区　東壁土層

A区東壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
6　灰白色粘質土(N6/0)。地山。



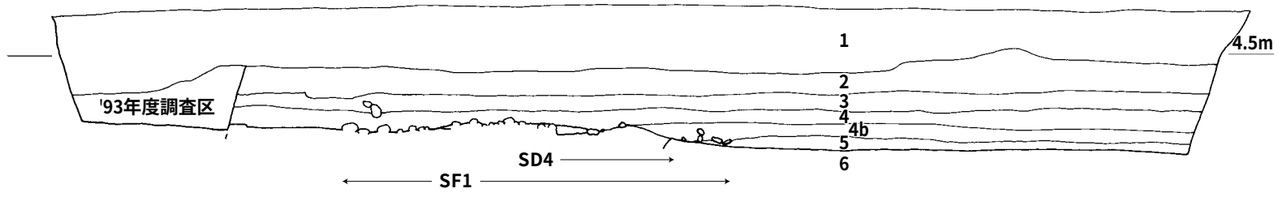
B区　北壁土層

B区北壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。
6　灰白色粘質土(N6/0)。地山。
7　灰黄褐色粘質土(10YR6/2)
8　黒褐色粘質土(10YR2/3)。
9　灰色土(7.5Y6/1)



B区　東壁土層

B区東壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。
6　灰白色粘質土(N6/0)。地山。

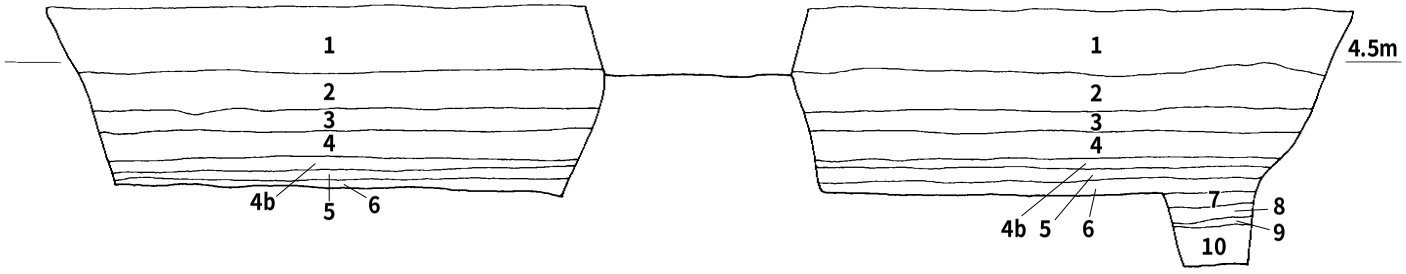


C区　北壁土層

C区北壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。
6　灰白色粘質土(N6/0)。地山。

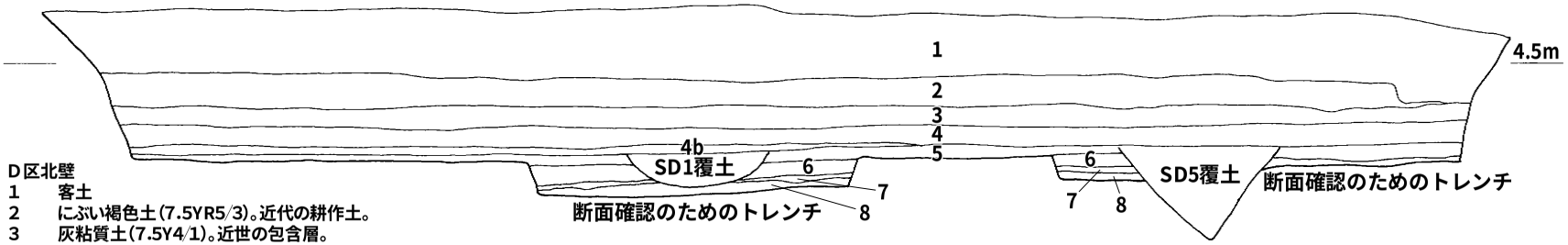
0　2m

第８図　石田高原地区Ｆ区・Ａ区・Ｂ区・Ｃ区土層図（1/40）



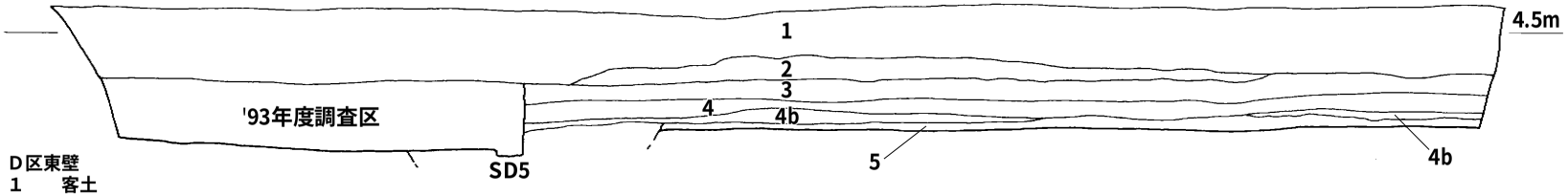
C区　東壁土層

C区東壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4 b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。
6　灰白色粘質土(N6/0)。地山。
7　黒褐色粘質土(10YR2/3)。腐植土層。東側でははっきりとしているが，西側部分ではぼやける。
8　灰色土(7.5Y6/1)
9　黒褐色土(10TR2/3)。腐植土層。8層との境界には凹凸が全体に見られる。
10　黒褐色土(2.5Y3/2)



D区北壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4 b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。
6　灰色粘質土(N5/0)
7　オリーブ黒色粘質土(5Y3/2)
8　灰色粘質土(5Y5/1)

D区　北壁土層

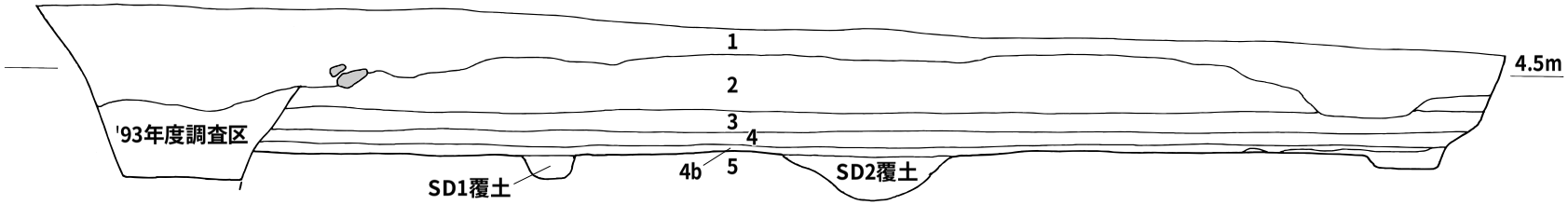


D区東壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4 b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。

D区　東壁土層

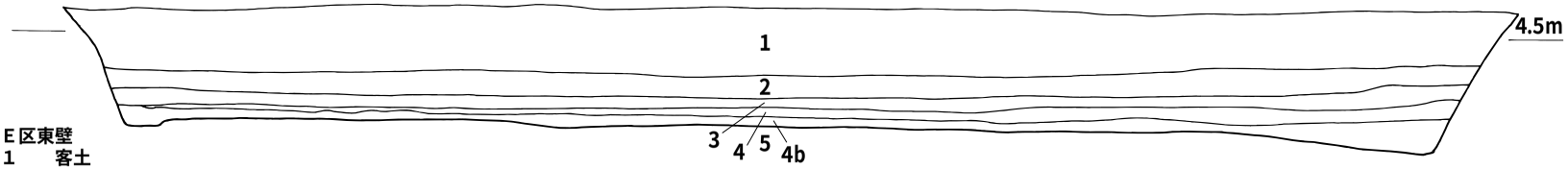
0　2 m

第９図　石田高原地区Ｃ区・Ｄ区土層図（１/40）



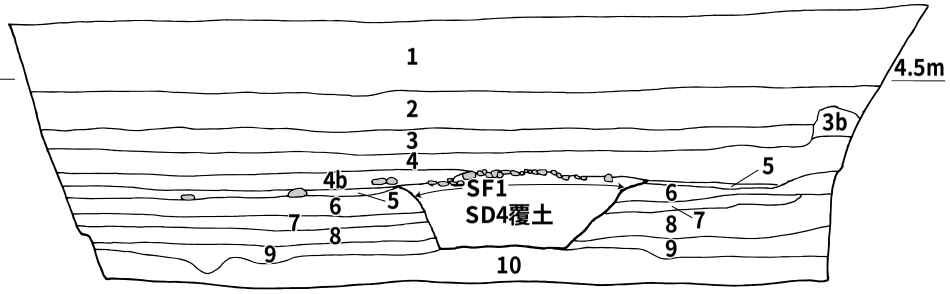
E区　北壁土層

E区北壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。



E区　東壁土層

E区東壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。

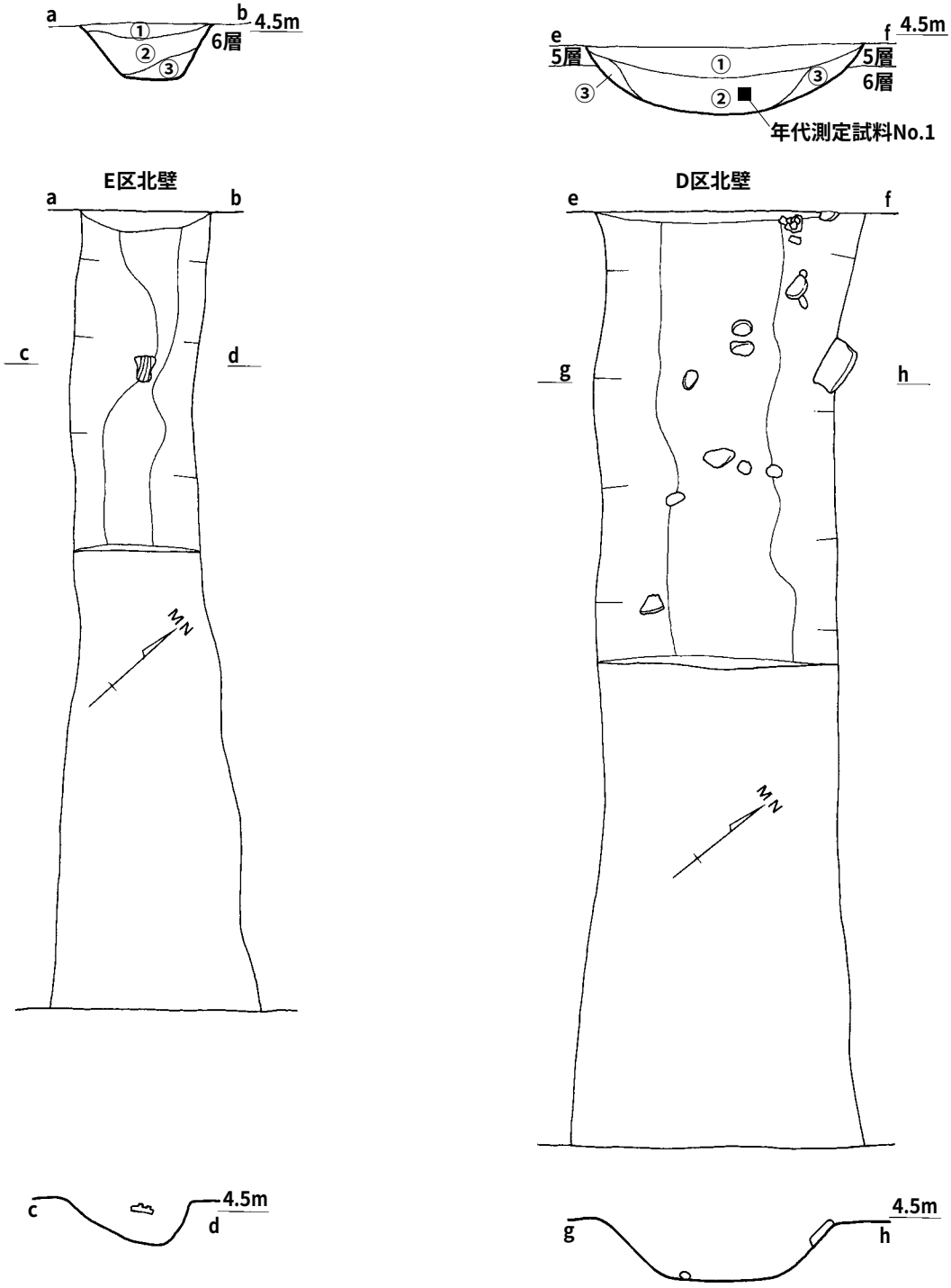


C区　南壁土層

C区南壁
1　客土
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)。近代の耕作土。
3　灰粘質土(7.5Y4/1)。近世の包含層。
4　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
4b　赤灰色粘質土(7.5Y4/1)
5　暗赤灰色粘質土(10R4/1)弥生時代中期の包含層。
6　灰白色粘質土(N6/0)。地山。
7　黒褐色粘質土(10YR2/3)。腐植土層。東側でははっきりとしているが，西側部分ではぼやける。
8　灰色土(7.5Y6/1)
9　黒褐色土(10TR2/3)。腐植土層。8層との境界には凹凸が全体に見られる。
11　黒褐色土(2.5Y3/2)

0　2m

第10図　石田高原地区E区・C区土層図（1/40）



E区 SD１
① 赤灰粘質土(2.5YR4/1)。5㎝大までのにぶい黄色(2.5Y6/3)の粘質土を全体に含む。
② 褐灰色粘質土(10YR4/1)。マンガン粒を全体に含む。
③ 黒褐色粘質土(2.5Y3/2)。5㎜大までの炭化物をまばらに含む。

D区 SD１
① 黒褐色粘質土(7.5YR2/1)。炭化物を全体に含む。
② 褐灰色粘質土(7.5YR4/1)。きめが細かで,よくしまっている。
③ 灰色粘質土(10YR4/1)。きめが細かで,よくしまっている。

E区での状況　　D区での状況

0　2m

第11図　１号溝（SD－１）平面および断面図（１/40）

古墳時代初頭にかけての遺物である。

②**２号溝（06－SD２）**（第７図，第12図）

2002年度調査時のSD１（02－SD１）の延長でＥ区中央を北西方向に伸び，ベルト内で北に大きく曲がる。Ｄ区では端部を確認できる。断面は逆台形で幅2.4m，深さ0.6mを測る。溝の上面からは古墳時代初頭の土器が出土した。この溝は，2002年度の調査で南東側の端部が同じように大きく曲がって収束していることが確認されている。全長は19.7m。底面レベルは北西端で4.2m，中央部で4.1m，南東端で4.0mを測り南東へ向けてわずかに傾斜している。

２号溝出土土器（第17図６～９・第２表）

6は直立する口縁部である。砂粒をほとんど含まない精良な粘土が使われており，焼成も良好である。口縁端部と下部に紐状の突帯が巡る。外面にはヘラミガキの痕がわずかに残る。壺か。**7**はわずかに上げ底状を呈する甕の底部片である。**8**はレンズ状を呈する甕の底部片である。**9**は坏部に稜を持ち大きく開く高坏の口縁部である。口縁端部は，切り取り調整がなされ断面四角形を呈する。**6**・**7**は弥生時代中期，**8**は弥生時代後期，**9**は古墳時代初頭のものである。

③**３号溝（06－SD３）**（第７図，第12図）

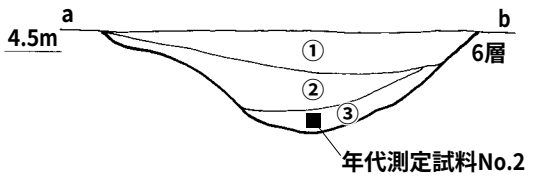
2002年度調査時のSD５（02－SD５）の続きをＢ区で確認し，３号溝（06－SD３）とした。断面は逆台形で幅2.4m，深さ0.7mを測る。北西方向にＡ区へ向けて伸びている。Ａ区では作業用ベルトの下を通りＦ区南壁で断面を確認できた。この溝は北西へ向かってさらに伸び，2004年度調査時のSD３とつながるものと思われる。2002年度の調査では，「竜」の線刻画が描かれた弥生時代後期後葉～終末の小壺が出土している。Ｂ区北壁の断面を見ると底面に凹凸があることが他の溝の断面と異なっている。底面レベルはＦ区南壁際で3.6m，Ｂ区北壁際で3.6m，2002年度北区で3.5mを測り南東へ向けてわずかに傾斜している。

３号溝出土土器（第17図10～17・第２表）

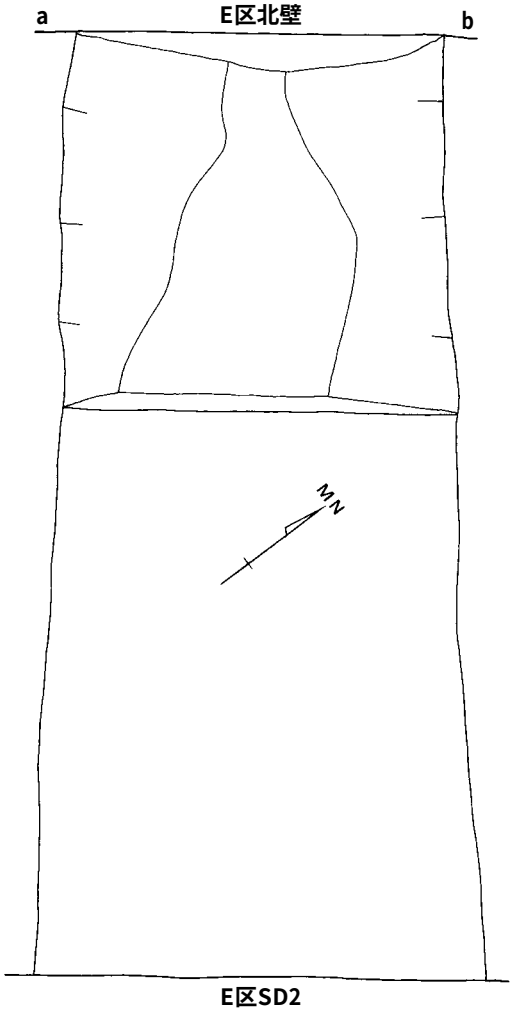
10～**13**は甕の底部片である。**10**は上げ底になっており弥生時代中期前葉のものである。**11**・**12**は弥生時代中期中葉，**13**は弥生時代後期前葉のものと思われる。**14**～**16**は壺の底部片である。弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてのものと思われる。**17**は古墳時代前期前葉の小型丸底鉢である。球形の体部からほぼ直線的に口縁部が伸びる。

④**４号溝（06－SD４）**（第７図，第13図）

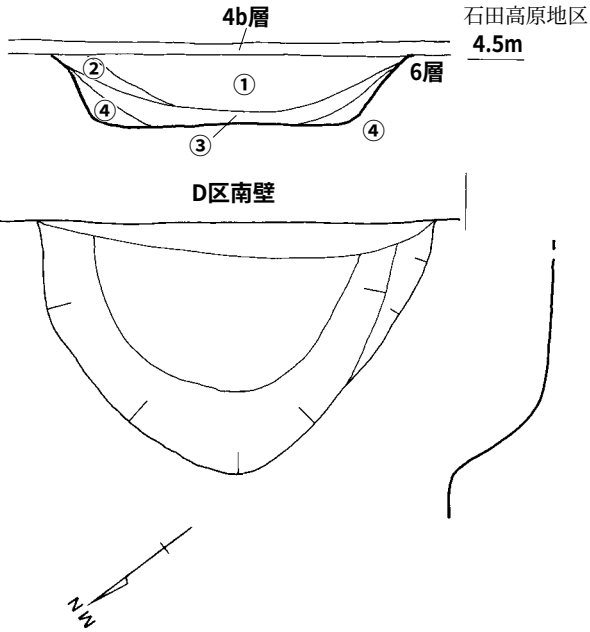
後述する礫や土器がびっしりと敷き詰められた古墳時代の道路状遺構の下から検出した。Ｃ区南壁際で確認している規模は，幅2.4m，深さ0.7mである。2004年度調査時のSD５の上にも同じように礫が乗っている状況が確認されており，Ｂ区・Ｃ区・Ａ区の北壁際で礫をはずしたところ，礫の下から溝のプランを確認することができた。この礫群はさらに北西方向にＦ区でも確認でき，2004年度調査区のSD５へ向かって伸びていることから，同一の溝であることが考えられる。また，礫群はＣ区の南東方向にも伸びており，その方向には，1993年調査時の３号溝（93－SD３），その続きと思われる。



E区北壁



E区SD2

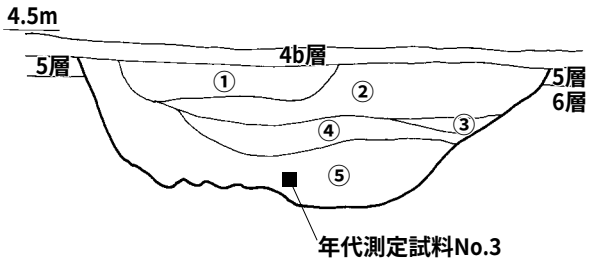


D区南壁

D区 SD２
① 黒褐色粘質土（7.5YR3/1）。しまりがあり，下部に１㎝大までの炭化物を全体に含む。
② 赤灰色粘質土（2.5YR5/1）。きめが細かで，炭化物をわずかに含む。
③ 褐灰色粘質土（7.5YR5/1）
④ 褐灰色粘質土（5YR6/1）

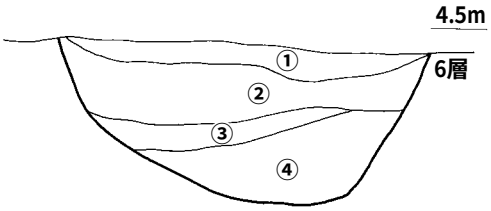
D区　SD２

E区 SD２
① 黄灰色粘質土（2.5Y6/1）。マンガン粒を全体に含む。
② 暗灰色粘質土（N3/0）。きめが細かで，炭化物・マンガン粒を全体に含む。
③ 灰色粘質土（5Y6/1）。きめが細かで，炭化物・マンガン粒をわずかに含む。



B区 SD３
① 黒褐色粘質土（5YR2/1）。炭化物を全体に含む。
② 赤灰色粘質土（2.5YR5/1）。上面に炭化物が混ざる。
③ 褐灰色粘質土（10YR5/1）。炭化物を全体に含む。
④ 褐灰色粘質土（5YR4/1）。炭化物を全体に含む。
⑤ 褐灰色粘質土（10YR5/1）。３㎝大までの炭化物をまばらに含む。

B 区北壁　SD３断面

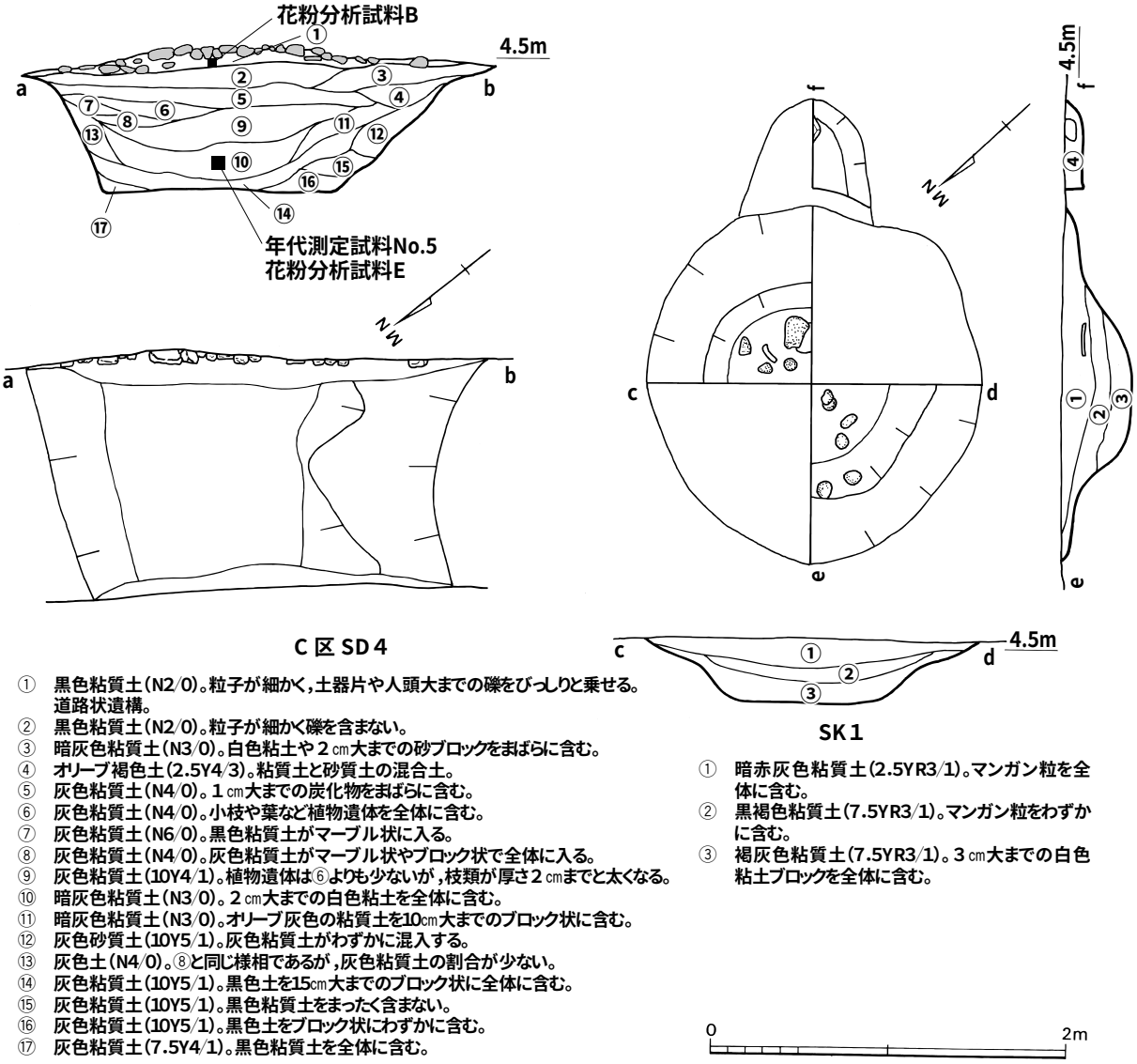


F区南壁 SD３
① 黒褐色粘質土（7.5YR4/1）。土器片を多く含む。
② 灰黄褐色粘質土（10YR5/2）。丈夫に鉄分の沈着が見られる。
③ 黄褐色粘質土（10YR3/4）。
④ 褐色粘質土（10YR4/3）。５㎝大までのオリーブ灰土をまばらに含む。

F 区南壁　SD３断面

0　2 m

第12図　２号溝（SD２）平面図および SD２・３号溝（SD３）断面図（１/40）



C 区 SD４

① 黒色粘質土（N2/0）。粒子が細かく，土器片や人頭大までの礫をびっしりと乗せる。道路状遺構。
② 黒色粘質土（N2/0）。粒子が細かく礫を含まない。
③ 暗灰色粘質土（N3/0）。白色粘土や２㎝大までの砂ブロックをまばらに含む。
④ オリーブ褐色土（2.5Y4/3）。粘質土と砂質土の混合土。
⑤ 灰色粘質土（N4/0）。１㎝大までの炭化物をまばらに含む。
⑥ 灰色粘質土（N4/0）。小枝や葉など植物遺体を全体に含む。
⑦ 灰色粘質土（N6/0）。黒色粘質土がマーブル状に入る。
⑧ 灰色粘質土（N4/0）。灰色粘質土がマーブル状やブロック状で全体に入る。
⑨ 灰色粘質土（10Y4/1）。植物遺体は⑥よりも少ないが，枝類が厚さ２㎝までと太くなる。
⑩ 暗灰色粘質土（N3/0）。２㎝大までの白色粘土を全体に含む。
⑪ 暗灰色粘質土（N3/0）。オリーブ灰色の粘質土を10㎝大までのブロック状に含む。
⑫ 灰色砂質土（10Y5/1）。灰色粘質土がわずかに混入する。
⑬ 灰色土（N4/0）。⑧と同じ様相であるが，灰色粘質土の割合が少ない。
⑭ 灰色粘質土（10Y5/1）。黒色土を15㎝大までのブロック状に全体に含む。
⑮ 灰色粘質土（10Y5/1）。黒色粘質土をまったく含まない。
⑯ 灰色粘質土（10Y5/1）。黒色土をブロック状にわずかに含む。
⑰ 灰色粘質土（7.5Y4/1）。黒色粘質土を全体に含む。

SK１

① 暗赤灰色粘質土（2.5YR3/1）。マンガン粒を全体に含む。
② 黒褐色粘質土（7.5YR3/1）。マンガン粒をわずかに含む。
③ 褐灰色粘質土（7.5YR3/1）。３㎝大までの白色粘土ブロックを全体に含む。

第13図　４号溝（SD４）・１号土坑（SK１）平面図および断面図（１/40）

Ｅ区西壁際の溝，さらに南西には2002年度に確認されたSD３（02－SD３）がある。これらの溝も同一の溝となる可能性が高い。覆土からは，弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が出土した。底面レベルは，2004年度調査区で3.7m，Ｃ区で3.7m，1993年度調査区で3.7m，2002年調査区で3.6mを測りわずかに南東に傾斜している。

４号溝出土土器（第17図～第19図18～43・第２表）

18～**22**は逆Ｌ字状を呈する弥生時代中期中葉から後葉にかけての甕の口縁部片である。**21**・**22**は口縁部直下に断面三角形の突帯が巡る。**23**～**26**は弥生時代中期の上げ底になった甕の底部片である。**23**・**25**はハケメが胴部下端まで施される。**26**はハケメを施した後胴部最下端をナデている。端部を整える意識があったものと思われる。**27**は弥生時代後期前半の平底の甕の底部片である。内面にヘラ状工具で強くなでた痕が残る。**28**～**30**は弥生時代の甕の底部片である。**28**は上げ底状を呈し，中期中葉のものと思われる。**29**は平底で，中期中葉から後期前葉のものと思われる。**30**はレンズ状を呈し，後期中

葉から後葉のものと思われる。**31**は弥生時代後期前半の複合口縁壺の口縁部片である。**32**～**34**は弥生時代中期後葉から後期初頭にかけて見られる鋤先形口縁の高坏である。いずれも内外面に丹塗りの痕が残る。**35**は坏部に稜を持ち大きく外反して開く高坏の口縁部である。弥生時代後期後葉のものである。**36**は弥生時代後期前半のものと思われる丹塗りで短頸の広口壺である。外面には粗いハケメが内面にはナデが施されている。丹は外面と内面頸部に施されている。くすんだ色を呈し発色は良くない。**37**は弥生時代後期後葉の甕棺の胴部片である。断面四角形の突帯が巡り，内面には上下方向のハケメが，外面には叩きの痕が残る。**38**～**41**の甕と**42**・**43**の高坏は，Ａ区北壁際の道路状遺構直下にある４号溝覆土最上面から一括して出土したものである。**38**は胴部中位より上半が残る長胴の甕である。内外面ともにハケメが施されている。**39**はほぼ完形の球胴の甕である。内外面ともに細かいハケメが施されている。**40**は肩部から上位が残る甕である。肩部には竹管文が施されているが，全周するかどうかは不明である。肩部には，横方向のハケメも見られる。**41**は球形の胴を持つ甕の上半部である。内面は横方向のケズリが施され，薄い器壁となっている。外面は胴部上半部に横方向のハケメが，下半部には縦方向のハケメが施される。また，肩部にはハケメ調整の後，浅い沈線が一条施される。**42**・**43**は高坏である。**42**は外面にわずかな稜を持ちほぼ直線的に広がる坏部と，上位がわずかにふくらみ穿孔が裾部との境に３ヶ所施された脚部が残る。裾部は残存部から大きく開くと思われる。脚部内面にシボリ痕が，内面裾部にハケメが残る。**43**は低脚の高坏の脚部片である。スカート状に大きく広がる脚部である。これらの一括遺物は弥生時代後期後半から古墳時代前期前半のものと思われる。

⑤５号溝（06－SD５）（第７図・第14図）

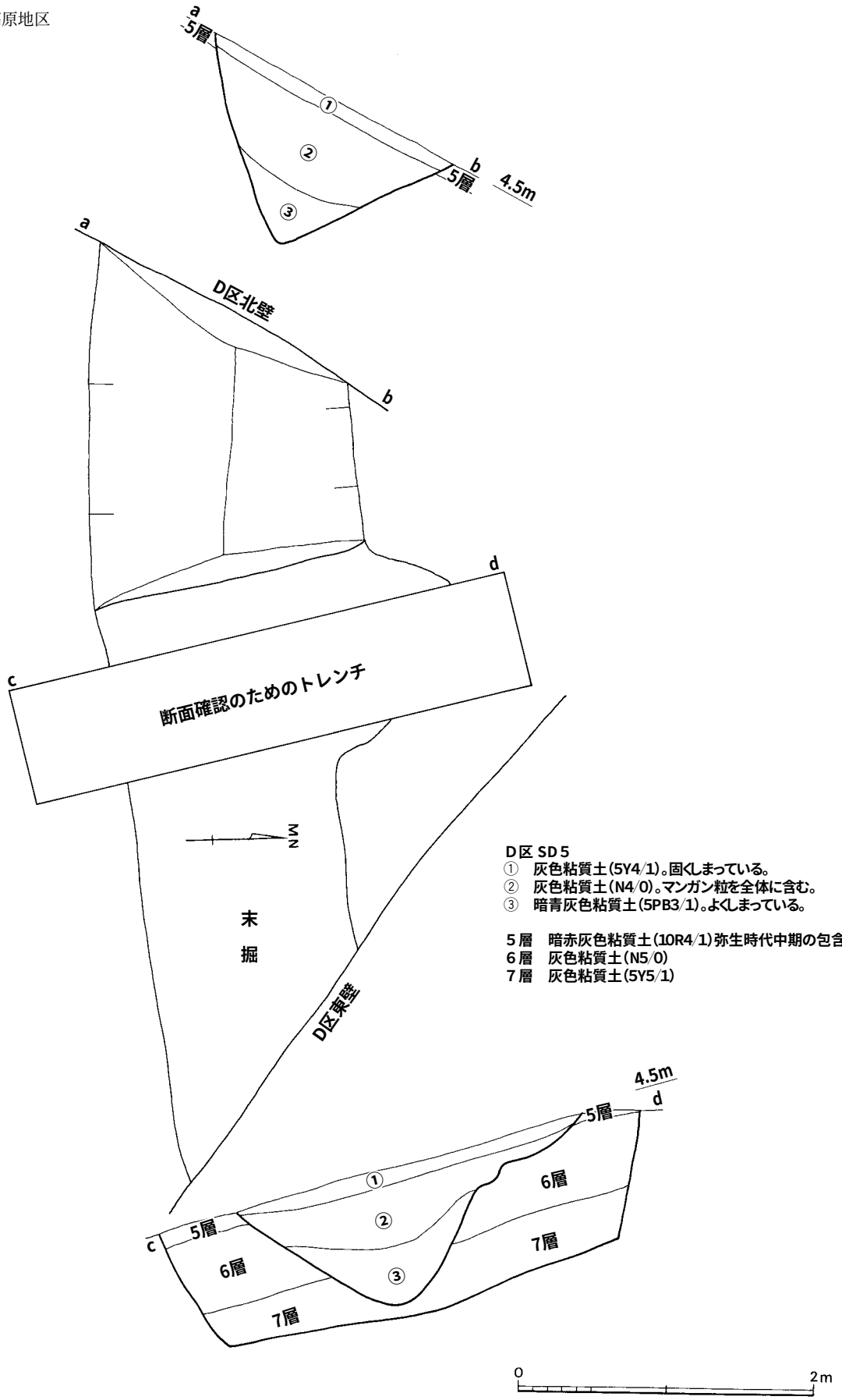
Ｄ区北東隅で検出した。主軸は東－西で，幅1.9m，深さ1.0mを測る。断面はＶ字状を呈し，覆土は青灰色で固くしまっている。今回確認した他の溝が，断面はＵ字形もしくは逆台形であること，覆土に腐植土を含みラミナを観察できる等，溝が掘削されてから一定期間水があったことが窺えるのに対し，形状も覆土の状態も異なっている。形状からすると，台地部分に掘削された環濠と同じであり，東側低地部で似ている形状の溝は1993年調査時の10号溝がある。覆土からは弥生時代中期～後期の土器片が出土した。西へそのまま伸びていくと，2002年調査時のSD４（02－SD４）と繋がる可能性がある。ただし，02－SD４は溝の始まり部分であるためであろうか，断面は逆台形を呈し形状が異なっている。

５号溝出土土器（第19図44～48・第２表）

すべて弥生時代の土器である。**44**・**45**は逆Ｌ字形を呈する中期前葉の甕の口縁部片である。**46**は中期中葉の甕の底部片である。上げ底になっている。**47**は底が膨らみレンズ状になる前の甕の底部片である。後期中葉と思われる。**48**は後期中葉の高坏で口縁部が大きく外反する。

⑥１号土坑（SK１）（第７図，第13図）

Ｅ区南東隅で検出した。長径2.0m，短径1.9mのほぼ円形の平面プランを呈している。確認面からなだらかに落ち込んだ後，大きな角度で落ち込み下端に至る。深さは0.6mを測る。覆土内から10点の円礫が出土した。二分の一が未掘であるため，土坑内に入っている礫の数はさらに多くなると思わ



第14図　５号溝（SD５）平面図および断面図（１/40）

れる。土坑の性格については不明である。

１号土坑出土土器（第19図49～53・第２表）

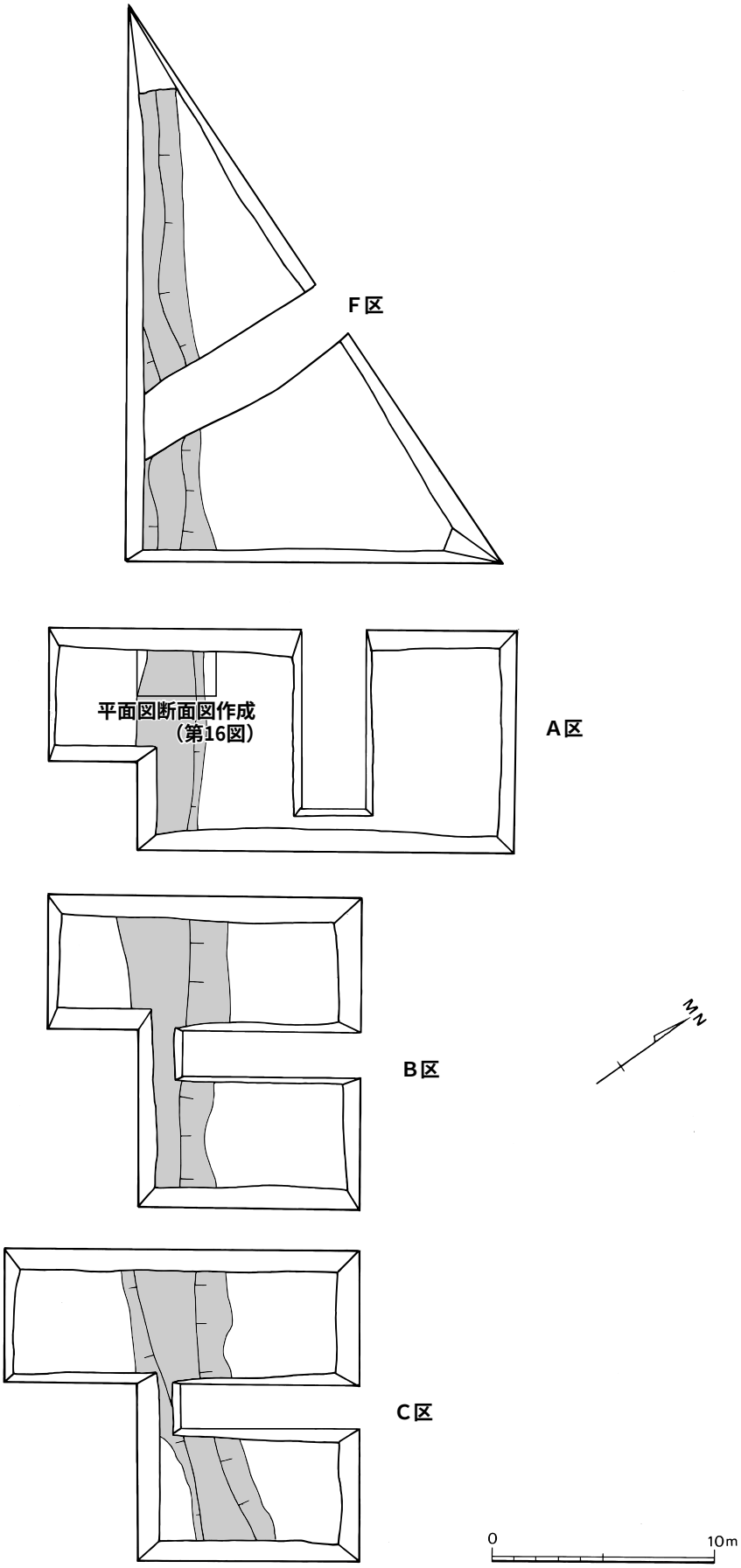
すべて，弥生時代の遺物である。**49**は逆Ｌ字形を呈する中期中葉の甕の口縁部片である。**50**は逆Ｌ字形を呈する中期中葉の甕の口縁部片である。口縁部の下には断面三角形の突帯が巡る。**51**は小片ではあるが，後期の甕の口縁部片と思われる。口縁端部をわずかに外側につまみ出している。**52**・**53**は中期中葉のもので，**52**は甕の底部片，**53**は壺の底部片である。どちらも上げ底になっており，接地面が高台状を呈する。

⑦**道路状遺構（SF１）**（第10図・第15図・第16図）

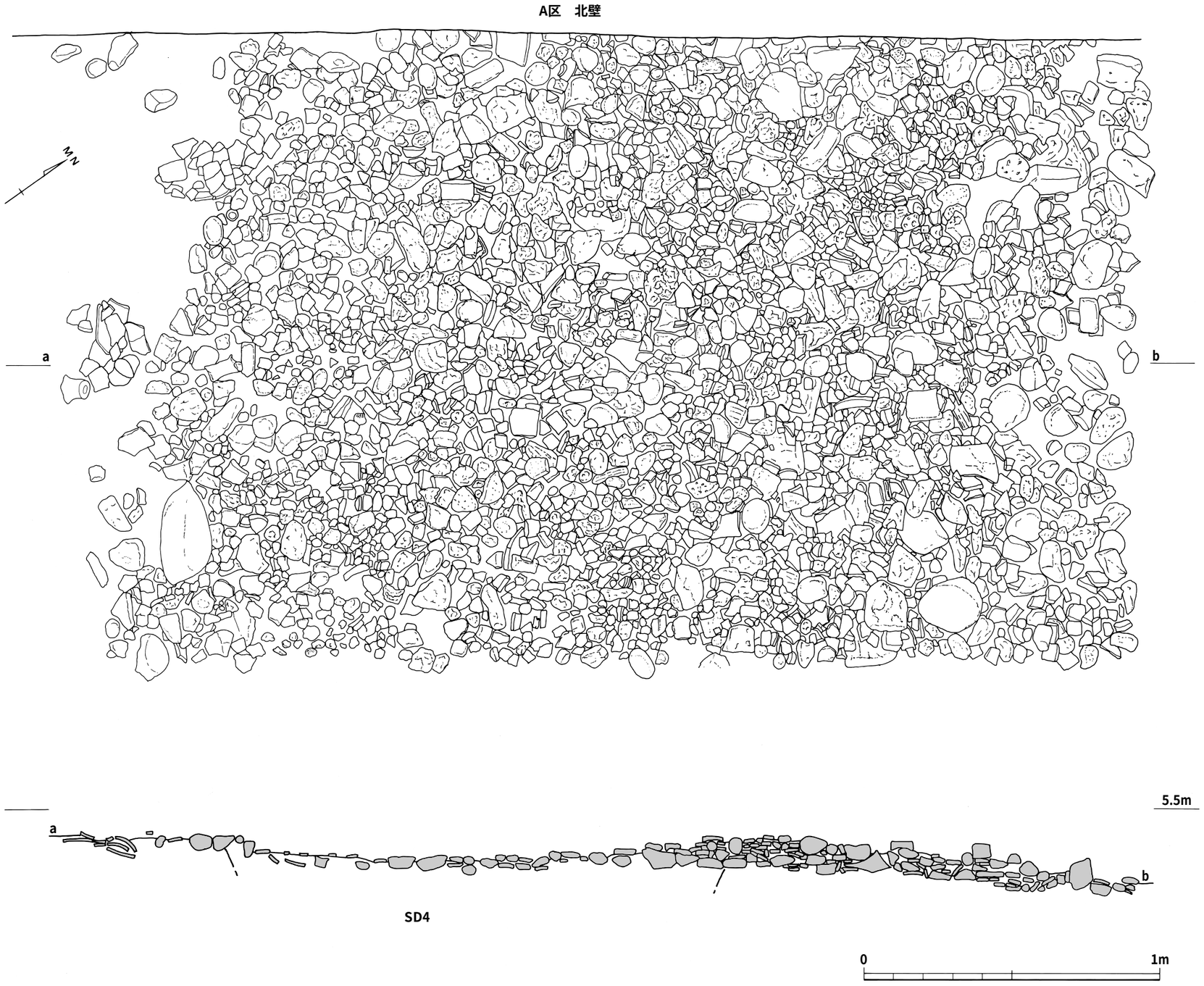
Ａ区からＦ区の西壁際から検出した。前述した溝の周辺を削平後，溝のプランに重なるように人頭大までの礫や土器片を薄く敷き詰めて作り出している。礫は円礫が多く凹石や磨石が目に付く。西側（丘陵側）は礫をはずすとすぐに地山となり，東側はなだらかに落ちている。当初は，土地の削平を行った際に溝部分の覆土を覆うことで地盤のゆるさをカバーしたものと考えたが，断面観察の結果，①溝覆土の中にもぐりこんだ礫があること。②Ａ区において顕著に見られることであるが，突き固めたか踏み固めたかでもしたように頂部がある程度平らになっており，さらに，礫どうしが密に重なりあっていること。③東側落ち込み際の幅約１ｍの平らで他より若干高い部分の断面に礫や土器が集中していること。④もともとは大きな土器の破片が，移動をせずにその場で砕片になっていること。などから，道路として利用した遺構と判断した。道幅はおよそ３ｍを測る。Ｃ区での土層断面の状況をみると，東へ向けて道路状遺構の傾斜が終わるところから５層が表れる。５層の上には道路状遺構の上面と同じ高さまで４ｂ層の堆積が見られ，道路状遺構の直上から４層の堆積が始まる。４ｂ層，４層には人頭大までの円礫が道路状遺構を中心として多く含まれる。礫の中から出土した遺物は，弥生時代の土器片が圧倒的に多い中，４～５世紀代と思われる土師器片も出土した。東側の傾斜面に堆積した４ｂ層からは須恵器長頸壺の頸部や須恵器坏蓋（第27図３，４）が出土している。

道路状遺構出土土器（第20図～第23図・第３表）

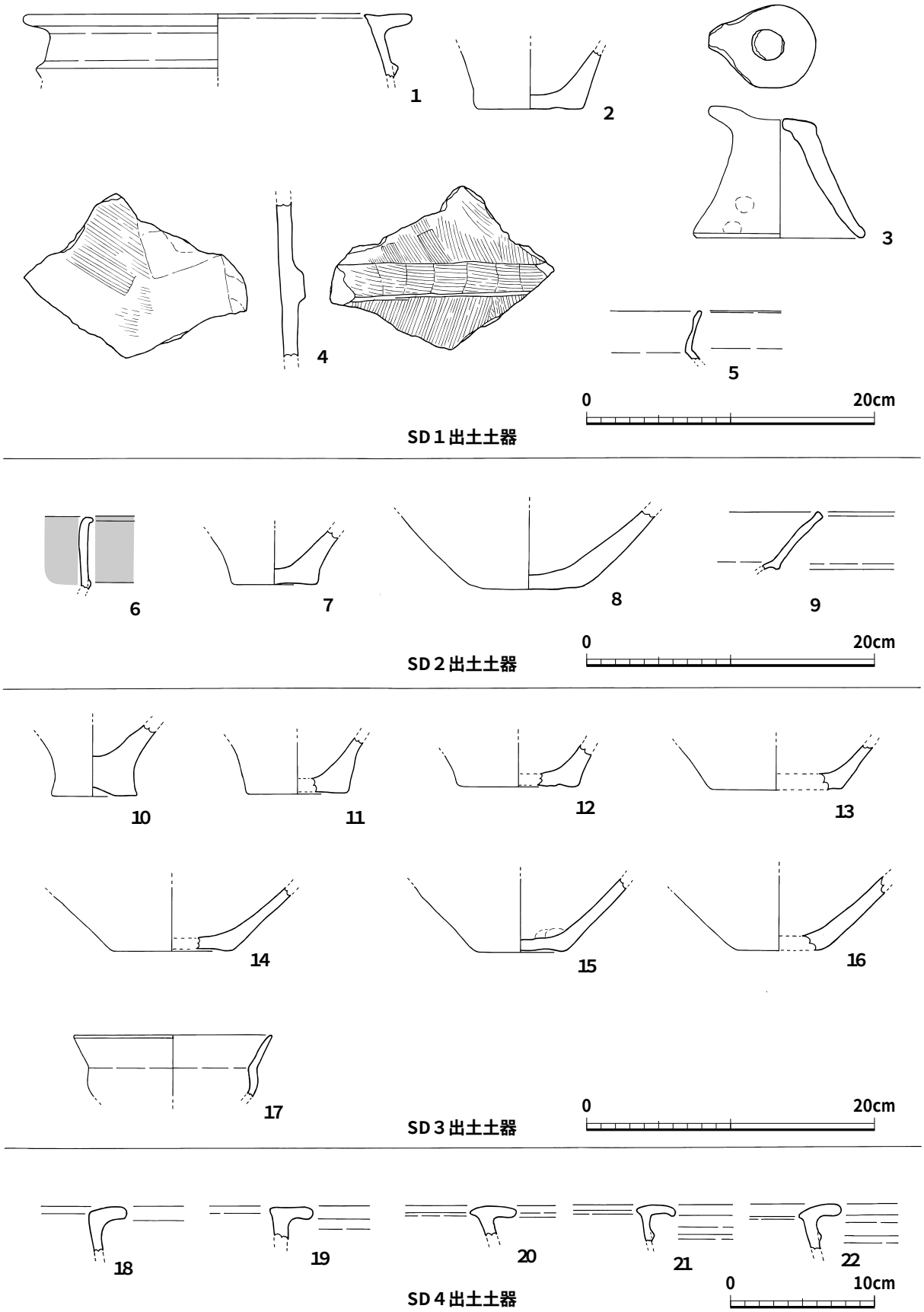
１～**18**は甕の口縁部片である。**１**・**２**は短い逆Ｌ字形の口縁が付くことから弥生時代中期前葉のものと思われる。**３**～**10**・**12**は弥生時代中期中葉から後葉のもので，口縁部が逆Ｌ字形や鋤先形を呈する。**７**・**12**を除き，口縁部の下には断面三角形の突帯が巡る。**３**は胴部に縦方向のハケメが施され，内面には粘土紐の接合痕が見える。**６**は口縁部と胴部との接合部分のナデが十分でなく，外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。**12**には短い逆Ｌ字形の口縁が付く。外面にはハケメの痕がわずかに残る。**11**は口縁部が「くの字形」を呈し口縁下に断面三角形の突帯が巡る。**13**はくの字形口縁の甕で，胴部中位に最大径を持つ。**14**は短く外反する口縁が付く甕であるが，胴の張りが小さい。**15**・**16**は口縁端部が立ち上がるもので，鋤先形口縁を起こしたような形状をしている。また，断面には粘土紐の接合痕が確認できる。壺の可能性もある。**12**を除く**11**～**16**の土器は，弥生時代後期のものと思われる。**17**～**19**は内面にヘラケズリの痕を残す古墳時代前期の甕である。**17**は内湾しながら開く口縁部である。端部へ行くにつれ少しずつ厚くなっている。**18**はほぼ直線的に開き端部を内側につまみ上げた口縁部



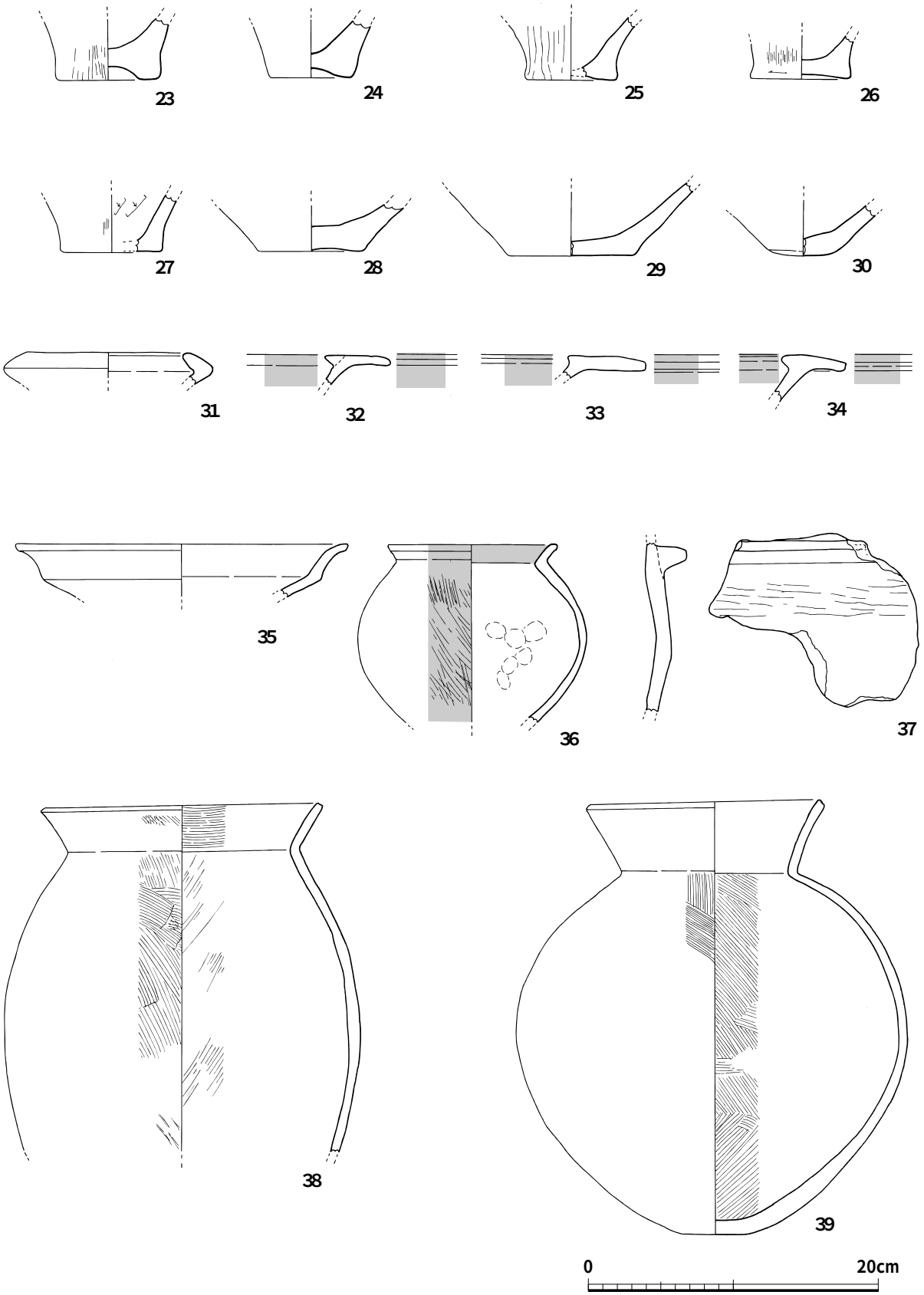
第15図　道路状遺構（SF１）位置図（１/300）



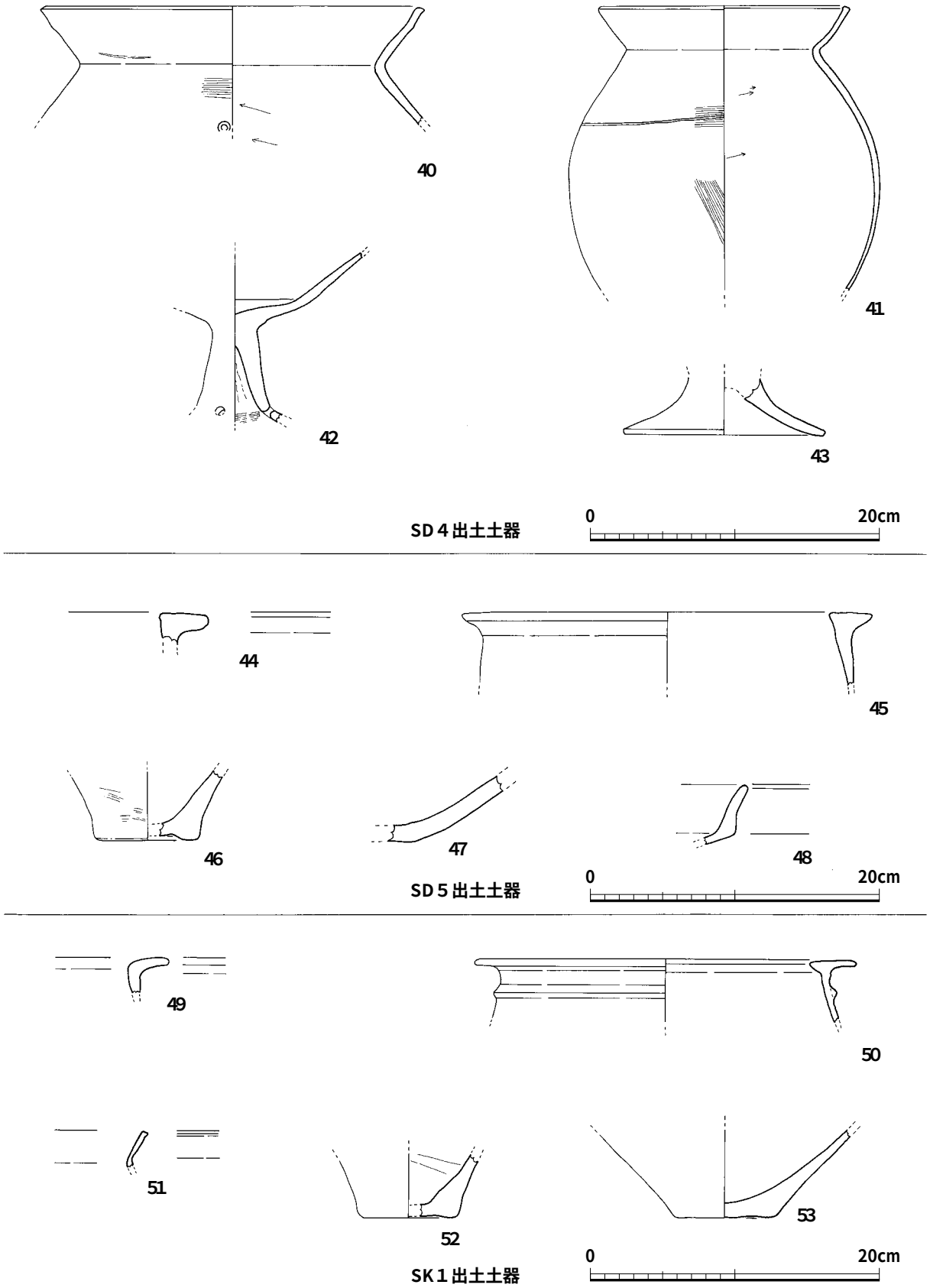
第16図　A区 SF１平面図（部分）および断面図（1/15）



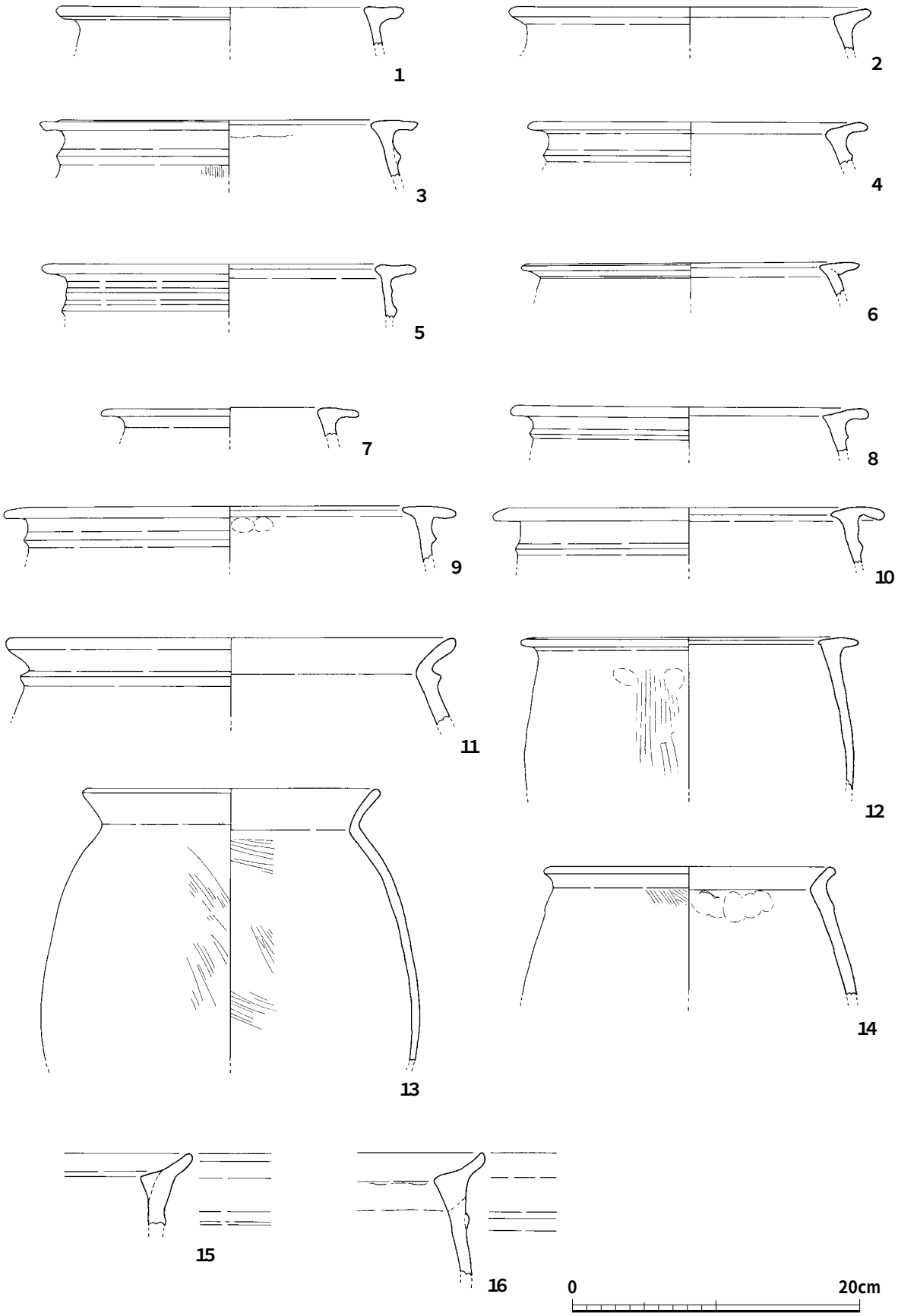
第17図　SD１・SD２・SD３・SD４出土遺物（土器①）（１／４）



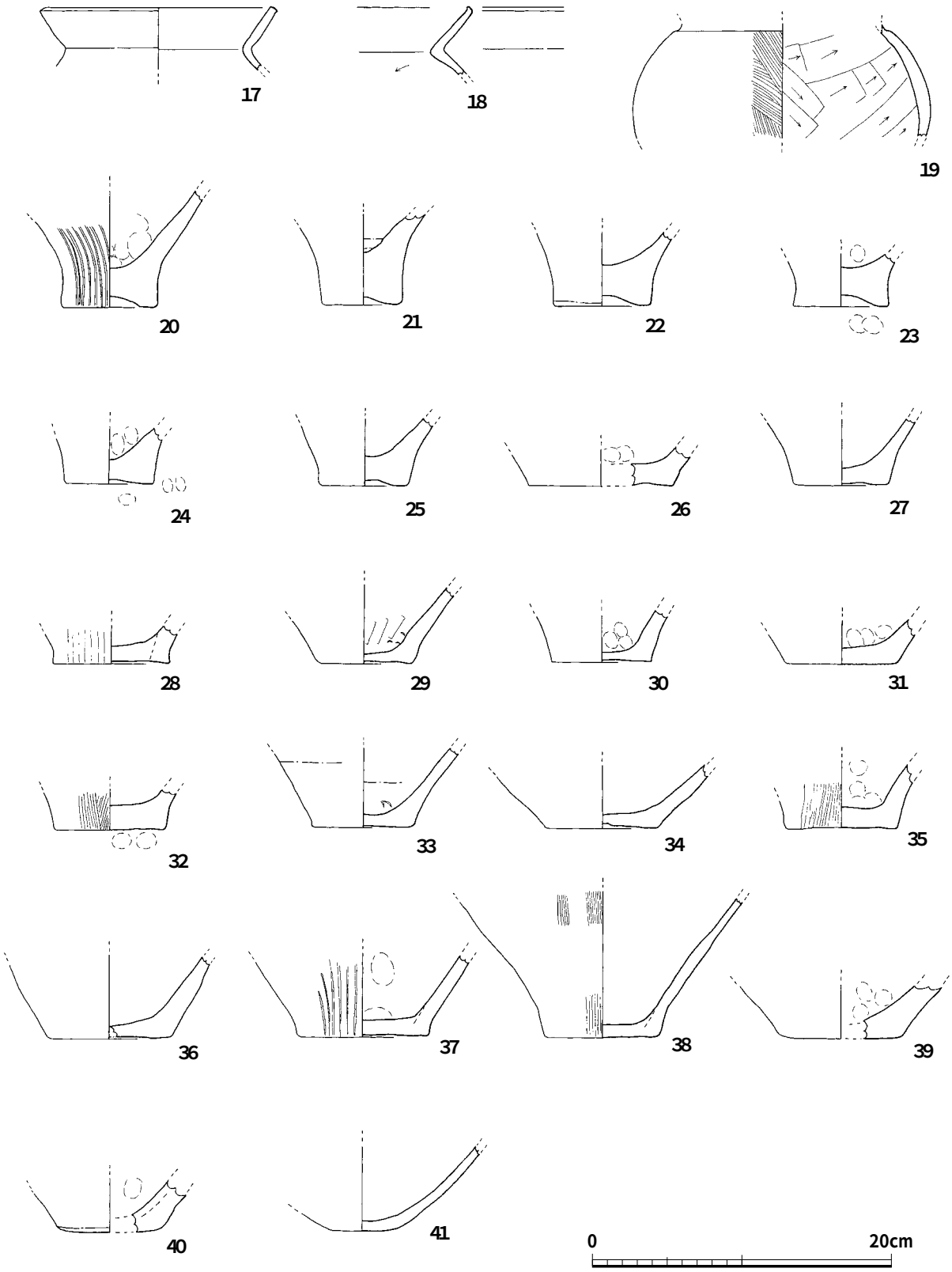
第18図　SD４出土遺物（土器②）（１／４）



第19図　SD４・SD５・SK１出土遺物（土器③）（１/４）



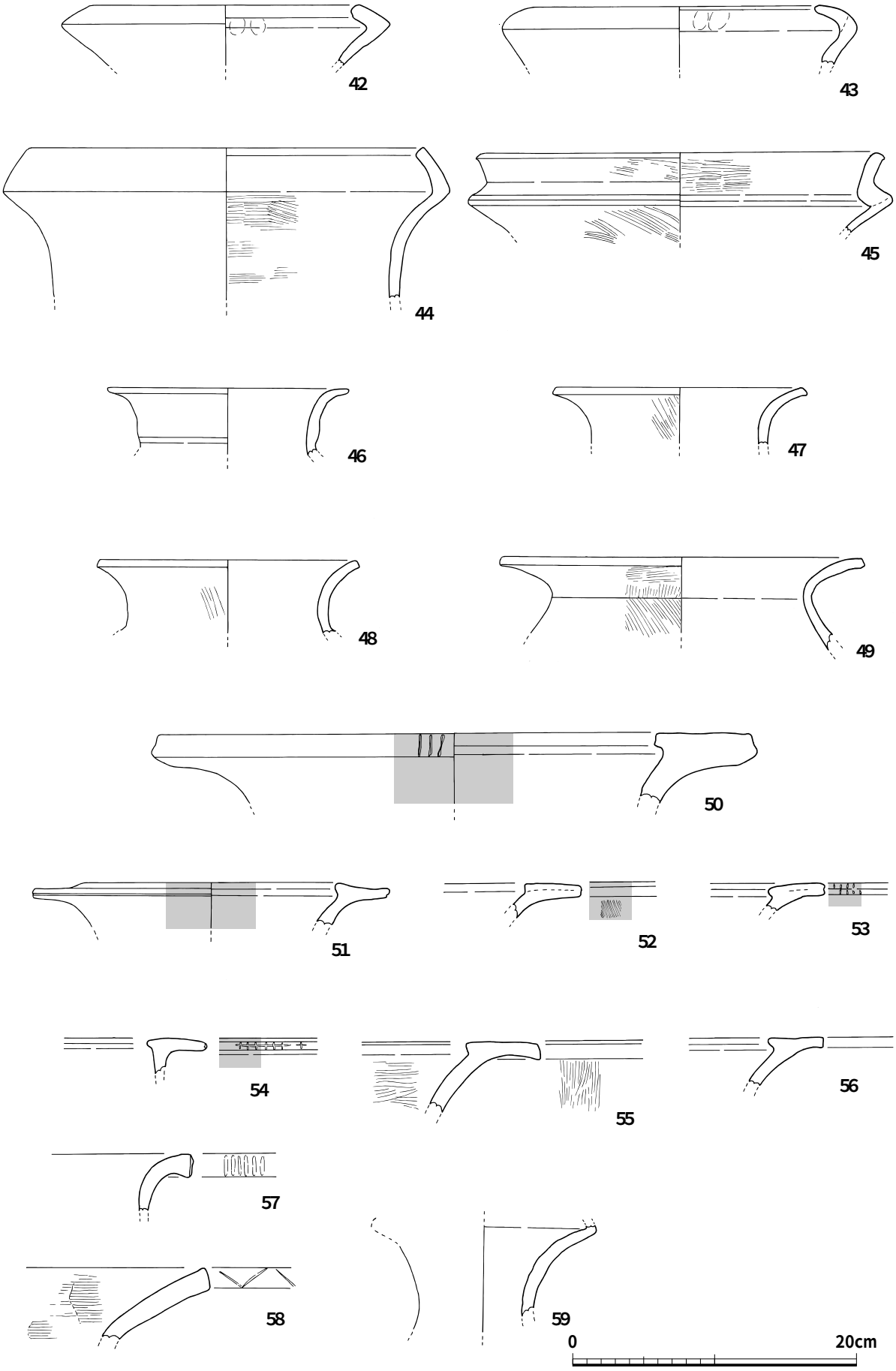
第20図　SF１出土遺物（土器①）（１／４）



第21図　SF１出土遺物（土器②）（１／４）

である。**19**は外面に斜め方向の荒いハケメで調整された後，頸部との境に丁寧なヨコナデが施されている。胎土に砂粒を多く含むが，外面にはほとんど現れてはいない。**20**～**25**は弥生時代中期前葉の上げ底で分厚い底部を持つ甕である。いずれも内面に調整のための指圧痕が認められる。**21**の指圧痕は強いナデ状のもので，内壁に沿い円弧を描いている。**26**～**38**は若干上げ底を残すか平底の甕である。これらは，弥生時代中期中葉から後期前葉のものであろう。多くの内面に指圧痕が残っている。**29**・**33**は指圧による調整の後なされたヘラ状工具による押さえの痕が確認できる。**28**・**37**・**38**は断面に，**33**は内外面に粘土紐の接合痕が認められる。**39**～**41**は底部が丸くなっていく段階の甕で，弥生時代後期中葉から後葉のものである。**39**・**40**は内面に指圧痕があり，**40**は断面に粘土紐の接合痕が認められる。

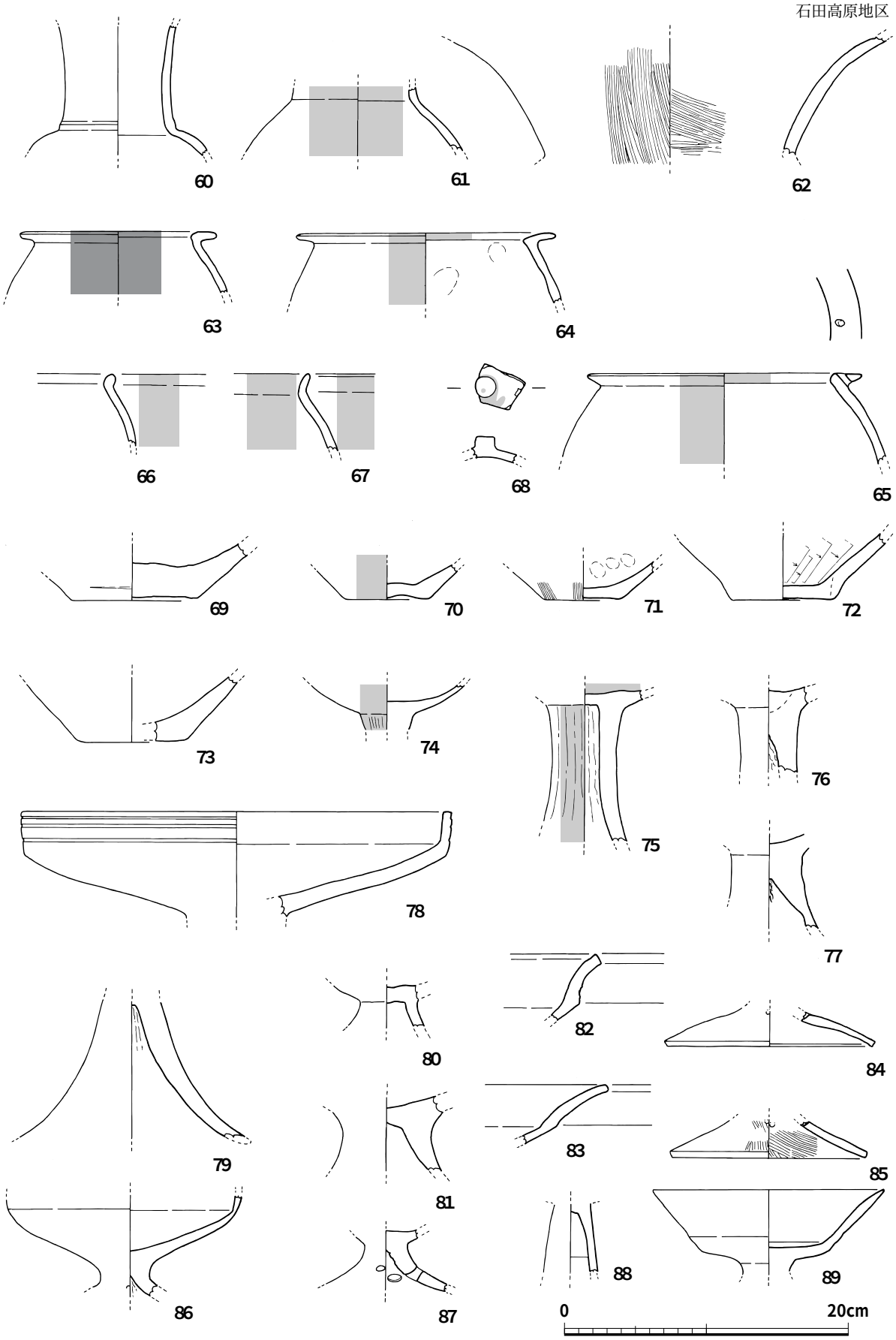
42～**45**は複合口縁壺の口縁部片である。**42**・**43**は屈曲部分が立ち上がらない後期前半のものである。**43**は断面に接合痕が残る。**44**は内面にハケメが施された大形品である。**45**は口縁部分が大きく屈曲し先端が外反し立ち上がる大形の壺である。内外面にハケメが施されているが，外面はさらにナデ消したことが伺える。断面に接合痕を残す。搬入品と思われる。**44**は弥生時代後期中葉，**45**は後期後葉のものと思われる。**46**～**49**・**57**・**58**は広口壺の口縁部片である。**46**～**48**はほぼ直立した頸部から口縁部が大きく外反する。**46**は胴部との境に段を持つ。**47**・**48**は外面にハケメを施している。**49**は胴部から大きく口縁部が外反する。外面には細かいハケメが施される。**57**は頸部から口縁部が大きく外反する。端部は面取りが行われ，縦に刻みが入る。**58**は直線的に大きく開く口縁部片である。端部は面取りが行われ山形の刻みが入る。内面にはハケメが施されている。大形の製品である。**46**～**49**は弥生時代中期前葉，**49**・**57**・**58**は弥生時代後期のものであろう。**50**～**56**は鋤先形口縁壺の口縁部片である。**50**は大形の壺で復元口径が42.8㎝を測る。口縁端部には縦に刻みが入れられ，内外面ともに丹塗りの痕が残る。**51**は口縁端部に浅い沈線が一条巡り，内外面ともに丹塗りの痕が残る。**52**は頸部にハケメが施されており，粘土紐による鋤先状の平坦部分の作り出しが断面に表れている。**53**は口縁端部に浅い沈線が一条巡り，縦に刻みが入る。内外面に丹の痕が残る。断面には粘土紐の接合痕が残る。**54**も口縁端部に浅い沈線が一条巡り，縦に刻みが入る壺である。外面に丹塗りの痕が残る。**55**は大形の壺である。内面に横位の，外面には縦位のハケメが施される。**56**はナデで丁寧に仕上げている。これらの鋤先形口縁壺は弥生時代中期後葉のものである。**59**～**62**は壺の胴部および頸部である。**59**は複合口縁壺の頸部片である。胴部からほぼ直立して立ち上がりゆっくりと外反しながら屈曲部へ至るものと思われる。**60**は長頸壺である。丸みを持った胴部との境に浅い段を有し，わずかに外反しながら上方へ伸びていく。**61**は精良な粘土で作られ，内外面丹塗りの袋状短頸壺である。袋部分は欠損していたが，精良な粘土で作られていること，丹塗りであること，焼成が良好なこと等が短頸壺と同じであり，頸部が内湾しながら立ち上がることから器種を判断した（註２）。**62**は外反しながら大きく開く広口壺の頸部である。外面に縦方向のハケメが，内面には横方向のハケメが施される。**63**～**67**は短頸壺である。**63**は砂粒を多く含み器表がざらついているが，指圧とナデで非常に丁寧に作っている。吸炭により褐灰色になった胎に黒塗りを施している。**64**は精良な粘土を使い丁寧に作っている。内面には指圧



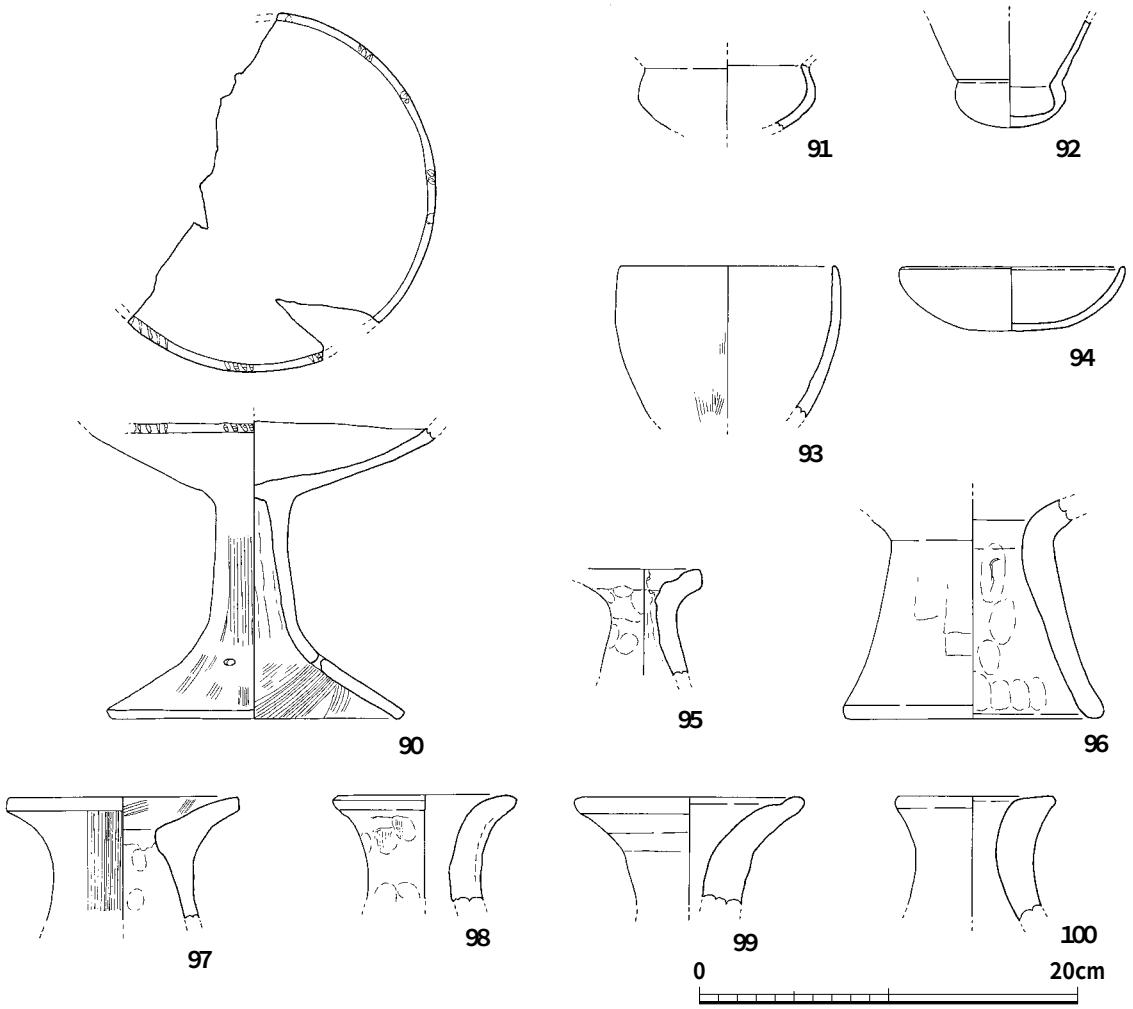
第22図　SF１出土遺物（土器③）（１／４）

痕が多く残る。**65**は頸部に穿孔が施してあり，内外面に丹塗りの痕が残る。内面は丁寧に磨いている。**66**は小さな頸部が外反する短頸壺である。外面に丹塗りの痕を残す。**67**は頸部が立ち上がる短頸壺である。**68**は短頸壺の蓋である。精良な粘土で作られ，小さなボタン状の突起が上部に付く。外面に丹塗りの痕が残る。これらの短頸壺や蓋は弥生時代中期後葉から後期前葉のものである。**69**～**73**は壺の底部である。**69**は指圧により内底部に凹凸を作り出している。**70**は外面に丹塗り痕をかすかに残している。砂粒は含まれるが，精良な粘土で作られており，焼成も非常に良好である。**71**は内面に指圧痕を，外面にハケメを残す。焼成は甘く灰黄色に焼きあがっている。**72**は内面にヘラ状工具による押さえの痕が明瞭に残る底部である。押さえは時計回りに行われている。同じような技法はSF１出土甕**29**でも確認することができた。**73**は内面に指圧痕が残るが丁寧にナデが施されている。これらの壺底部は，弥生時代中期後葉から後期前葉のものと思われる。

74～**90**は高坏・台付甕である。**74**は外面丹塗りの高坏で，坏部・脚部ともに外面は丁寧に磨かれている。坏部が丸く立ち上がる鋤先形口縁の高坏であろう。**75**は高坏脚部である。上面に坏部内底が残る。内外面ともに丹塗りで脚部外面には丁寧な縦方向のヘラミガキが認められる。この高坏も坏部が丸く立ち上がる鋤先形口縁の高坏であろう。**76**は高坏脚の上部である。内面にはシボリ痕が残る。**77**は上面に坏部内底が残る高坏脚部である。坏部内面のシボリ痕を丁寧にナデ消している。**78**は浅い坏部から口縁が直立する高坏である。復元口径30.4㎝を測る。口縁部外面には３条の沈線が巡る。**79**は裾が大きく広がる脚部である。内面にシボリ痕を消すナデが見られる。**80**は台付鉢である。鉢底部に中空の脚部を貼り付けたことが分かる。**81**は台付鉢である。内外面丁寧にナデが施してある。**82**は高坏の口縁部片である。坏部にある強い稜から大きく外反する。端部は面取りが行われ断面方形を呈する。**83**は**82**よりもさらに口縁部が外反するものである。そのために，坏部の稜も**82**ほどは明瞭でない。**84**は裾部である。砂粒をほとんど含まないきめの細かい粘土を使っている。上方に穿孔が見られる。**85**は裾部である。内外面にハケメが施されている。外面のハケメは消えかかっているが内面のハケメは明瞭に残る。上方に穿孔が見られる。**86**は坏部が丸みを持って立ち上がる低脚の高坏である。外面にはハケメの痕が残る。**87**は低脚の高坏の脚部である。裾部上方に穿孔が見られる。**88**は小形で中空の脚部である。胎土は精良で器壁も均一の厚さで作られている。**89**は高坏の坏部である。平らな坏底から直線的に外へ向かって開く。口径は16.4㎝である。胎土は砂粒が少なく精良である。内外面ともナデで仕上げる。**90**は口縁部のみを欠く高坏である。浅い皿状の坏部から稜を持ち，口縁部が外反しながら立ち上がるタイプと思われるが，坏部の稜の部分より先が接合面できれいに剥落しており，擬口縁となる。この接合面には，最多５条単位のヘラ状工具による刻みが５㎝程度の間隔で施されている。粘土接合をより強固にするための技法と思われる。脚部や裾部にはハケメが見られる。また，裾部には穿孔が３箇所ある。**74**～**76**は弥生時代中期後葉，**77**～**83**は弥生時代後期**84**～**87**・**90**は古墳時代前期，**88**・**89**は古墳時代中期のものと思われる。



第23図　SF１出土遺物（土器④）（1／4）



第24図　SF１出土遺物（土器⑤）（１/４）

91・92は精良な粘土で作られた小形丸底壺である。どちらも丁寧なナデで仕上げている。古墳時代前期中葉のものである。**93**は鉢である。内面には指圧痕による凹凸が残るが丁寧にナデを行っている。外面にはハケメが見られるが，口縁部付近はナデにより消えている。弥生時代後期前葉のものであろう。**94**は丸底の坏である。手持ちヘラケズリで調整後，丁寧なナデ調整で仕上げている。焼成も良好である。金雲母の量が多い。古墳時代中期後葉のものと思われる。

95は小形の支脚で，下半とつまみ部を欠いている。内外面ともに指圧痕が残る。

96～**100**は器台である。**96**は下半部である。内面には指圧痕が良く残るが，外面はナデにより丁寧に仕上げている。**97**は上半部である。内面には調整が行われないまま粘土紐による接合痕が残っている。外面にはハケメが施されている。**98**は上半部である。ナデの下には指圧痕が残る。外面にはハケメが見られる。**99**は上半部である。内外面ともナデにより調整されてはいるが，成形の際の指圧痕が残る。胎土には大きな砂粒を含まない。**100**は上半部である。指圧痕を残さず，ナデにより丁寧に仕上げられている。これらの器台は弥生時代後期のものである。

第25図　出土遺物（土器⑥・土製品）（1/3）

⑧**その他の遺物**（第25図～第31図・第４表～第８表）

土器・土製品（第25図・第４表）

1～**3**は如意形口縁の甕である。いずれも口唇部下端に刻み目を持つ。弥生時代前期後葉の資料である。**4**は口縁部が肥厚する無頸壺である。結晶片岩片を多量に含み，よく焼きしまり赤褐色を呈する。他の弥生土器と比べると明らかに異質である。楽浪系滑石混入土器の流れを汲むものと考えられる。**5**は鉢である。平底から内湾気味に胴部は立ち上がる。内外面に丁寧なナデが施される。搬入品か。**6**は壺の頸部と思われる小片である。４条の沈線が確認でき胎土が黒褐色であることから，搬入

された土器と考えられる。**7**は壺の肩部と思われる小片である。竹管文が並んで押されている。竹管文の下には沈線が巡っていたことが伺える。畿内方面からの搬入品か。**8**は壺の胴部と思われる小片である。外面全体に横位の沈線とその下に斜めの浅く細い沈線が施される。**9**・**10**は牛角形把手である。**9**は２本の粘土紐の先端を重ねることで牛角状の突起を作り出していることが断面から分かる。**11**～**13**は円盤状土製品である。いずれも弥生土器の胴部片を打ち欠いて作り出している。**12**は打ち欠いた後，周囲を研磨している。**13**はＥ区 SD２覆土内から出土している。

瓦質土器・陶質土器（第26図・第５表）

1～**17**は瓦質の土器である。**1**～**9**は外面に格子目のタタキ痕が残る。**10**～**12**は交差する縄蓆タタキ痕が残るものである。**13**～**17**は縄蓆タタキ痕の上から横位の沈線が施される。**18**～**25**は陶質土器である。**19**・**21**を除き縄蓆タタキ痕の上から横位の沈線が施される。また，**18**～**20**は綾杉状の縄蓆タタキ痕である。

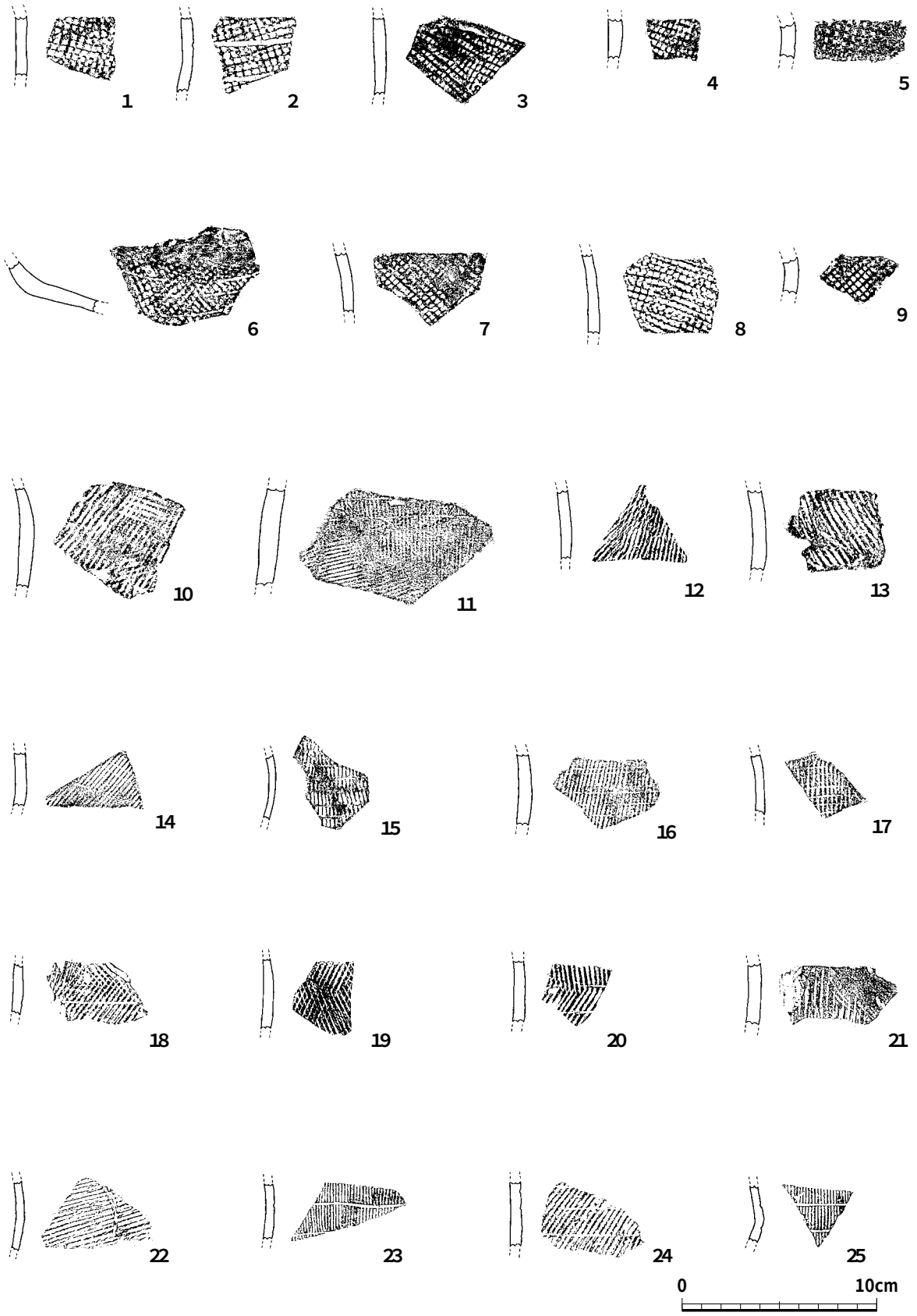
須恵器・瓦器・陶磁器（第27図・第６表）

1～**4**は須恵器である。**1**は坏身である。蓋受けのたちあがりが長く内傾も弱い。６世紀前半のものと思われる。**2**は坏蓋である。裾部が外に張り出し，かえりも内に向かって大きく開くことから７世紀後半のものと思われる。**3**は長頸壺の頸部片である。外面に２条の浅い沈線が巡る。内面には粘土紐の接合痕とシボリ痕が明瞭に残る。７世紀後半から８世紀前半にかけてのものと思われる。Ｃ区内道路状遺構の東斜面に張り付くようにして出土した。土層は４ｂ層である。**4**はつまみが付く坏蓋である。扁平な天井部でつまみは中心に向けて僅かに凹む。８世紀前半のものと思われる。

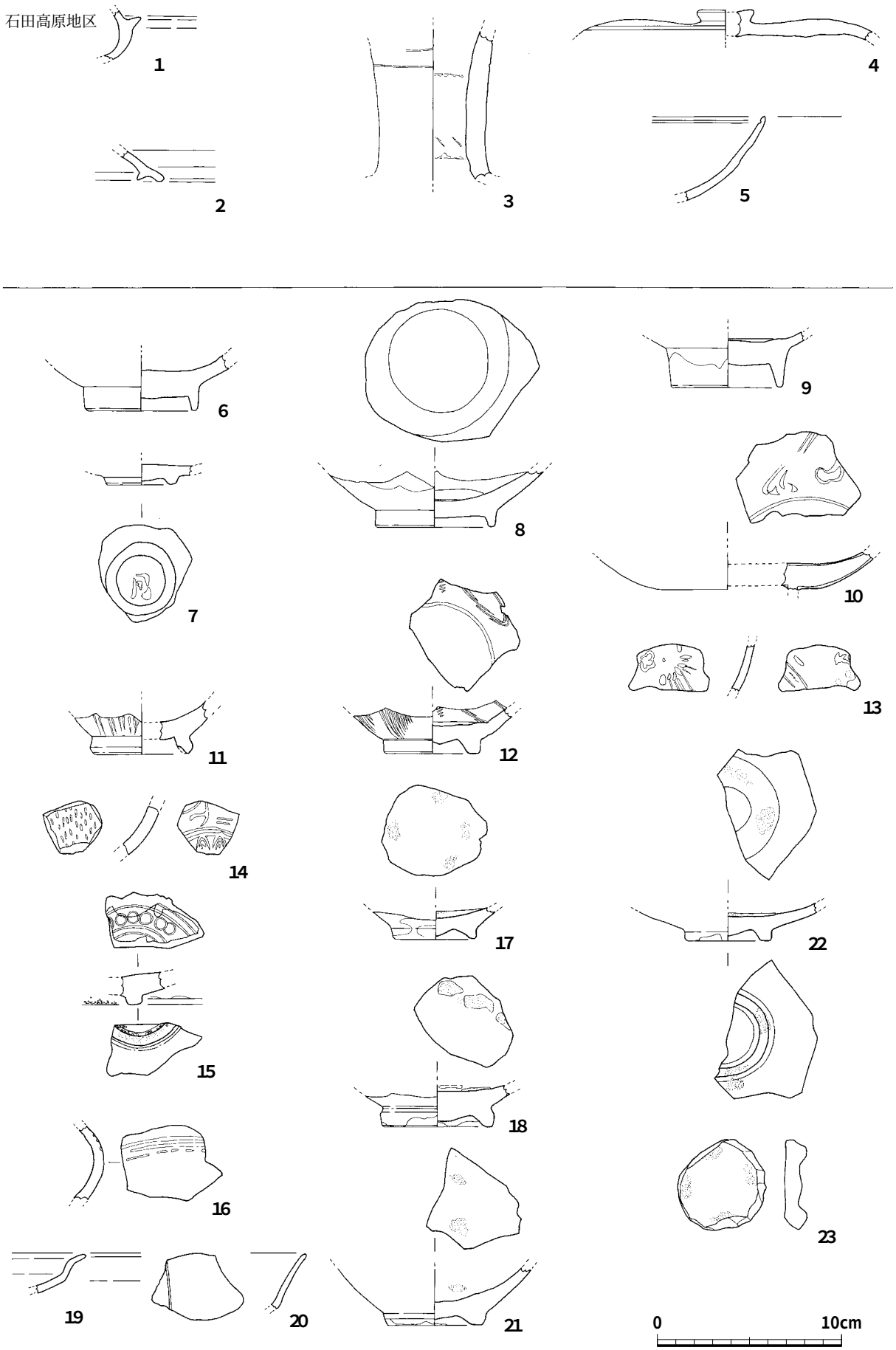
5は楠葉型と思われる瓦器椀の体部上半片である。内面口唇部直下に沈線が巡る。内面のミガキは摩滅のために分からないが，外面に凹凸が残ることから，手持ちによる成形であったことが伺える。

6～**12**は中国産の磁器である。**6**は高台内面に文字が描かれるが判読できない。若干短いが，足長の高台を持つ白磁Ｖ類である。**7**は柔らかい胎土に白濁した釉がかかる白磁の皿である。体部下半は露胎である。高台内面に「月」であろうか文字が描かれる。15世紀前半のものである。**8**は見込みの釉が輪状に掻き取られる白磁椀Ⅷ類である。**9**は高い高台を持つＶ類である。**10**は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。内面見込みに沈線が巡り，体部には蓮華文と思われる文様が施されている。釉が分厚く掛かる。**11**はオリーブ色の釉が外面畳付け際まで掛かる龍泉窯系青磁椀である。外面に縦方向の櫛目が入るが，蓮弁があるかどうかは不明である。**12**は同安窯系青磁椀Ⅰ類である。外面体部下半は露胎で，縦の櫛目が入る。内面見込みと体部の境には大きな段を有する。

13～**19**・**21**は朝鮮半島産の陶磁器である。**13**は内面に黒土と白土で，外面は白土による象嵌が施される青磁である。**14**は外面下部に蓮弁文が，内面に列点文が白土の象嵌で施される青磁である。胎土は青灰色で精良である。**15**は見込みに白土で円形文と沈線を象嵌する青磁である。畳付けに粗い砂目が残る。**16**は外面に白土の象嵌で線を巡らす象嵌青磁である。**17**は高台内を荒い削りで兜巾状に削り出す灰青陶器である。胎土はきめが細かく，全面施釉後畳付けの釉を掻き取る。見込みには重ね焼きの目跡が残る。**18**は青磁椀の底部である。ざっくりした胎に畳付けを除き釉が薄く掛かる。高台と体



第26図　出土遺物（瓦質土器・陶質土器）（1/3）



第27図　出土遺物（須恵器・瓦器・陶磁器）（1／3）

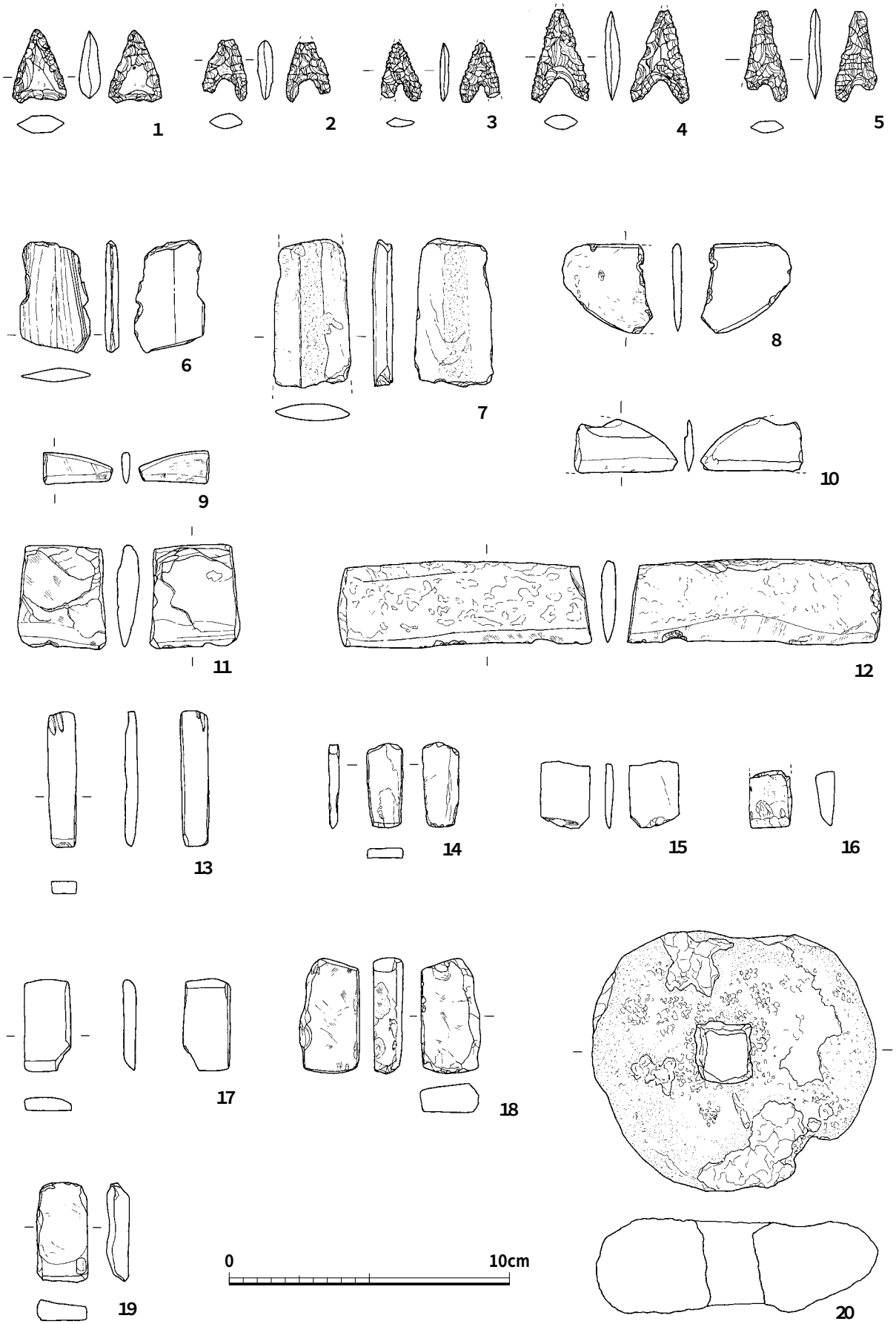
部境に段を有するためにがっしりとした高台の印象を受ける。見込みには目跡が残る。**19**は端反りの白磁皿である。やや青味を帯びた白色の釉が掛かる。**20**は華南三彩の坏である。白色の胎にコバルトブルーの釉が掛かる。体部内面を分割する縦の隆線が入る。**21**は雑釉陶器である。ざっくりした胎に白濁をした釉が畳付けを除き掛かる。見込みには目跡が残る。**22**は内野窯系の陶器皿である。外面に透明釉が，内面には青緑色の釉が掛かる。見込みの釉は蛇ノ目釉剥ぎされ，重ね焼きの目跡も残る。目跡は畳付けにも見られる。**23**は円盤状陶磁製品である。高台周りを欠き取って作り出している。元は青磁の小椀で，高台内を兜巾状に削り出し，全面施釉後畳付けの釉薬を掻き取っている。見込みに白色土による４足の目跡が残る。

石器（第28図～第31図35・第７表）

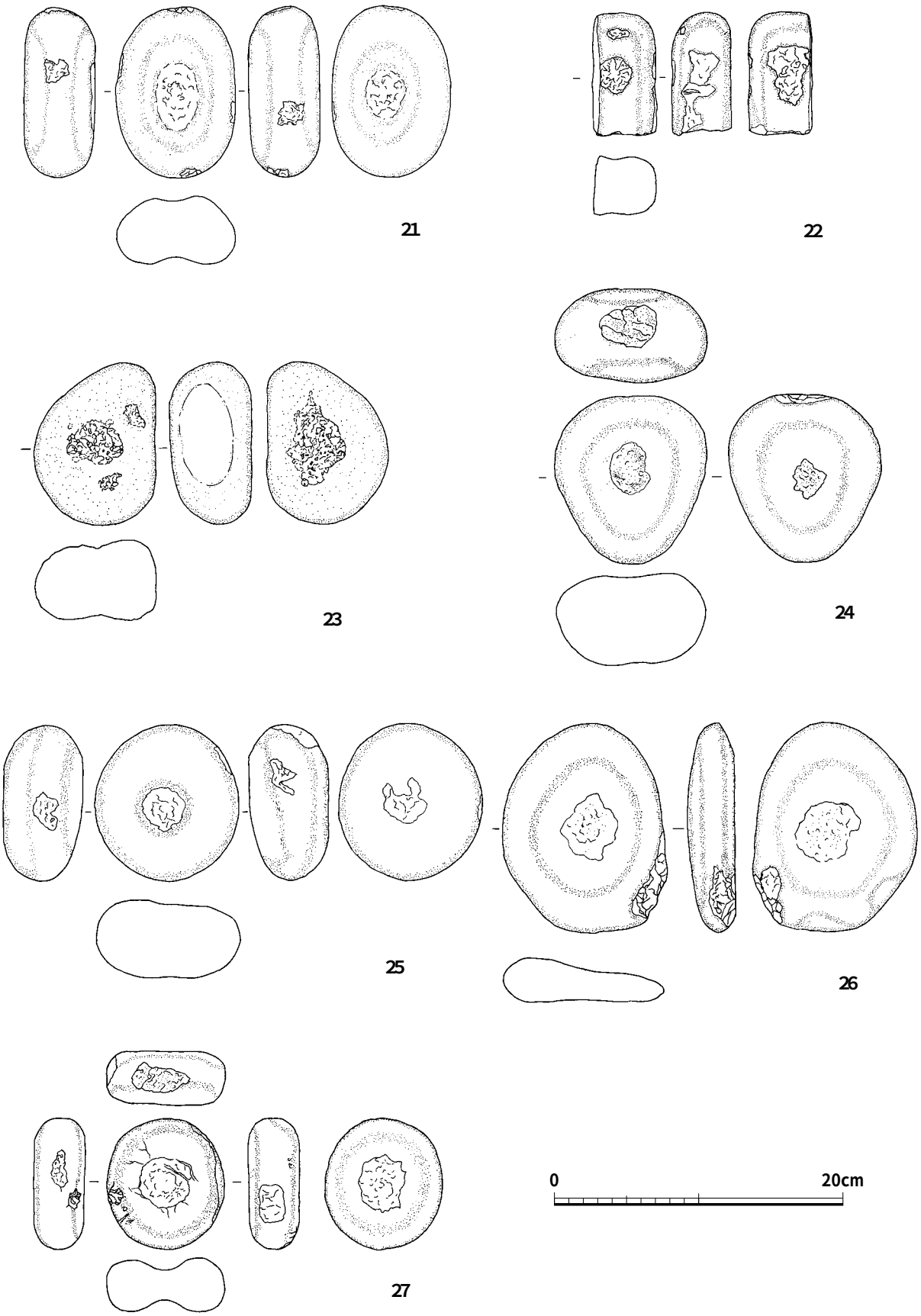
1～**5**は石鏃である。**1**は抉りがほとんど無く二等辺三角形の形をしている。原石の表皮が両面に残っている。この表皮は強い擦痕によりスリガラス状を呈しているが，人為的な研磨によるものか自然の摩擦によるものかは不明である。また厚さ５㎜ほどの表裏に原石の表皮が残ることから原石の厚さもこの程度であったことが伺える（註３）。**2**・**4**・**5**は不純物が含まれることから，壱岐産の黒曜石と思われる。**6**・**7**は石剣である。**6**は灰白色の頁岩製で，先端と基部を欠くのみならず刃部の刃こぼれも著しい。**7**は硬質砂岩製である。先端と基部を欠いている。**8**は石包丁である。青灰色の頁岩製で半分が欠損している。紐通しの穴は両面から穿っている。**9**～**12**は青灰色の硬質砂岩製の石鎌である。**9**と**10**は先端部分である。全面に研磨がなされている。**11**は両端を欠いたもので，全面に研磨がなされている。**12**は先端部分を欠くもので，刃部のみに研磨が行われている。**13**～**19**は扁平片刃石斧である。**13**・**14**は全長に対して刃部が狭い鑿状のもので，**13**・**19**は抉り状の浅い凹みが付く。いずれも青灰色の頁岩製であるが，**14**は熱を受けたのか橙色である。**20**は多孔質玄武岩の円礫の中心に方形の穿孔を行った石錘と思われるものである。似た形状のものが2002年の調査時にすぐ近くで出土している（註４）。**21**～**27**は凹石である。海岸で見られる円礫を使用している。凹みは両面に見られるが，**27**は深い凹みを作り出している。**28**・**29**は磨石である。どちらもかなり使い込まれており，**28**は磨面の反対面に凹みを持つ。**29**は側縁に敲打痕を残す。**30**・**31**は砥石である。いずれも灰色の硬質砂岩製である。**30**は砥ぎ面に浅い敲打痕があり，砥石として使わなくなった後に台石として利用したものと思われる。**32**～**34**は敲石である。**32**・**34**は一般的な敲石とは異なり，かなりの力で側縁を使ったものと思われる。**21**～**34**の大型石製品は道路状遺構東斜面の上に堆積する４ｂ層より出土したものである。**35**は石製支脚である。被熱により赤変している面が明瞭である（アミ部分）。赤変面の反対側には作り出しによる背鰭状の突起がある。つまみと同じ機能と思われる。頂部と底部は平らに作られている。

金属器・ガラス玉・木製品（第31図１～18・第８表）

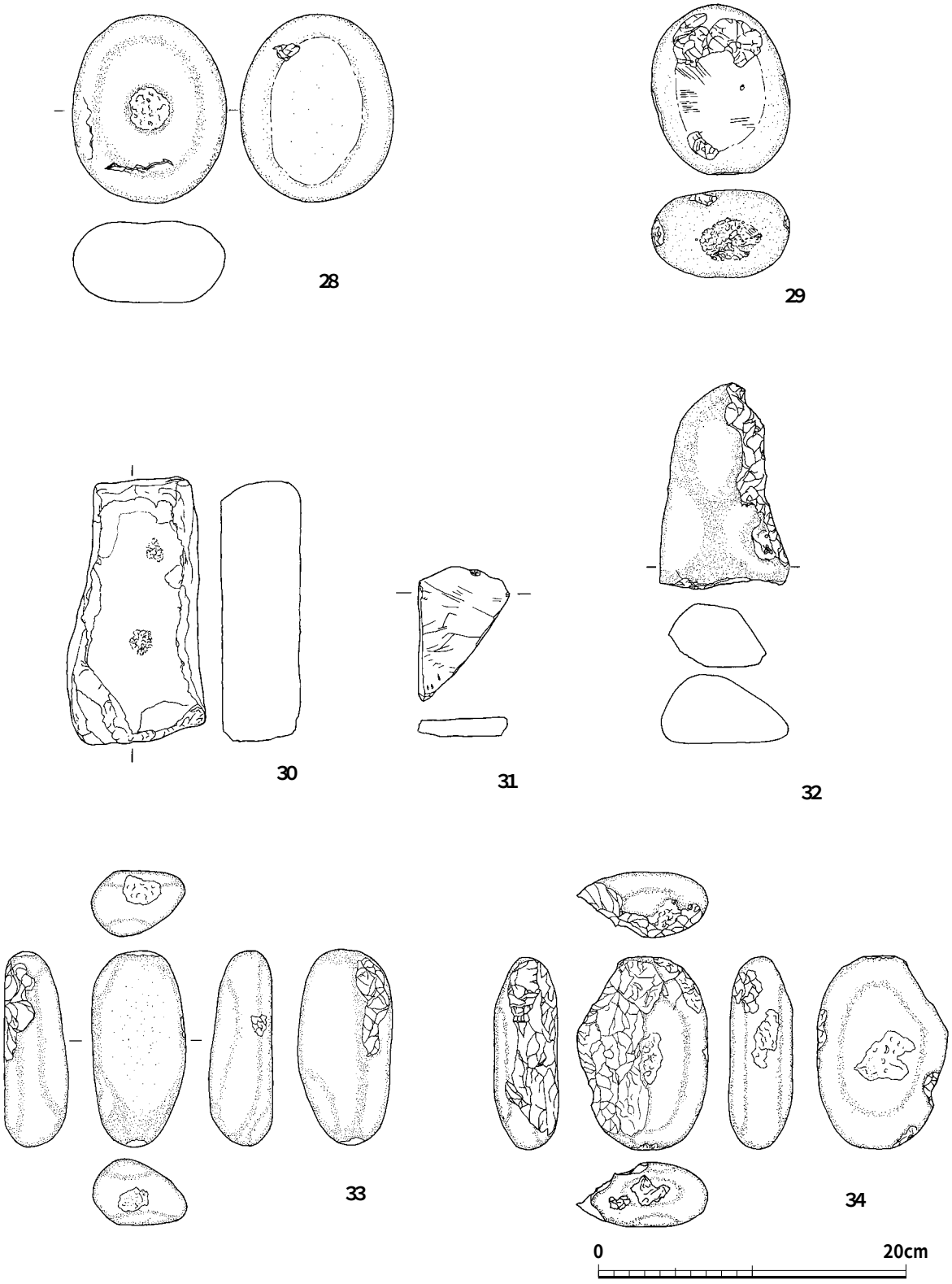
1・**2**は袋状鉄斧である。**1**は錆の下に赤い色が付着しているのが観察でき，丹塗りの可能性もある。**2**は土坑１内から出土した。**3**～**8**は銅鏃である。**8**は錆が取れてしまっているためか，非常に小型である。**9**～**16**はガラス玉である。**9**は他のガラス玉よりも大型で，風化のためにガラス質を失っ



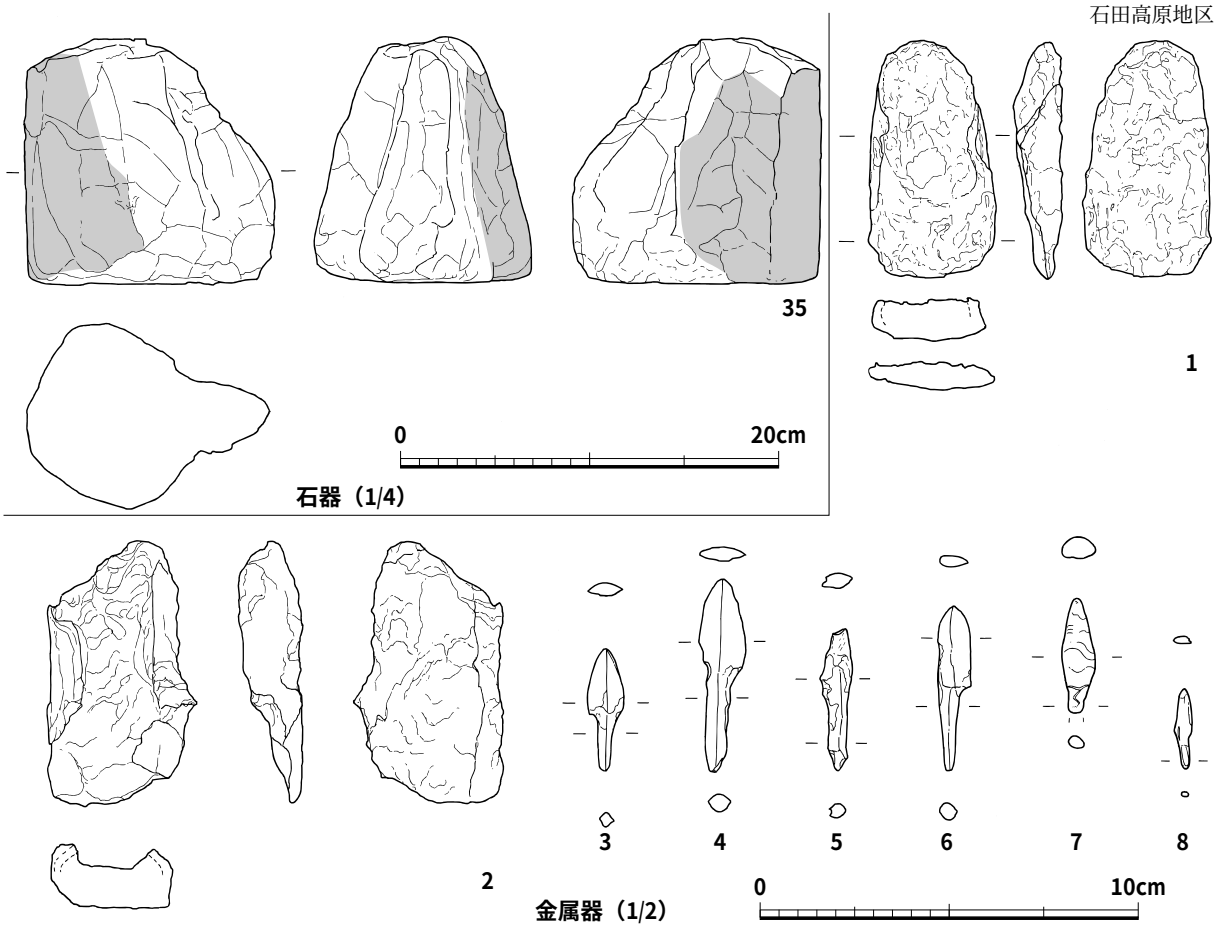
第28図　出土遺物（石器①）（1／2）

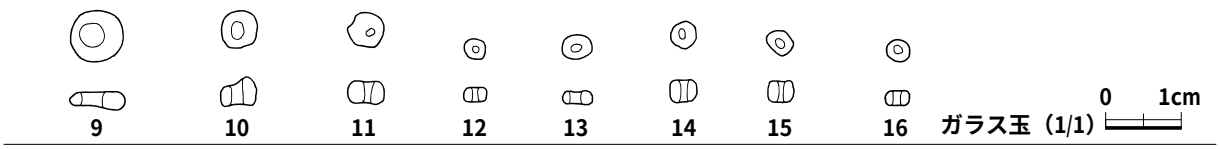


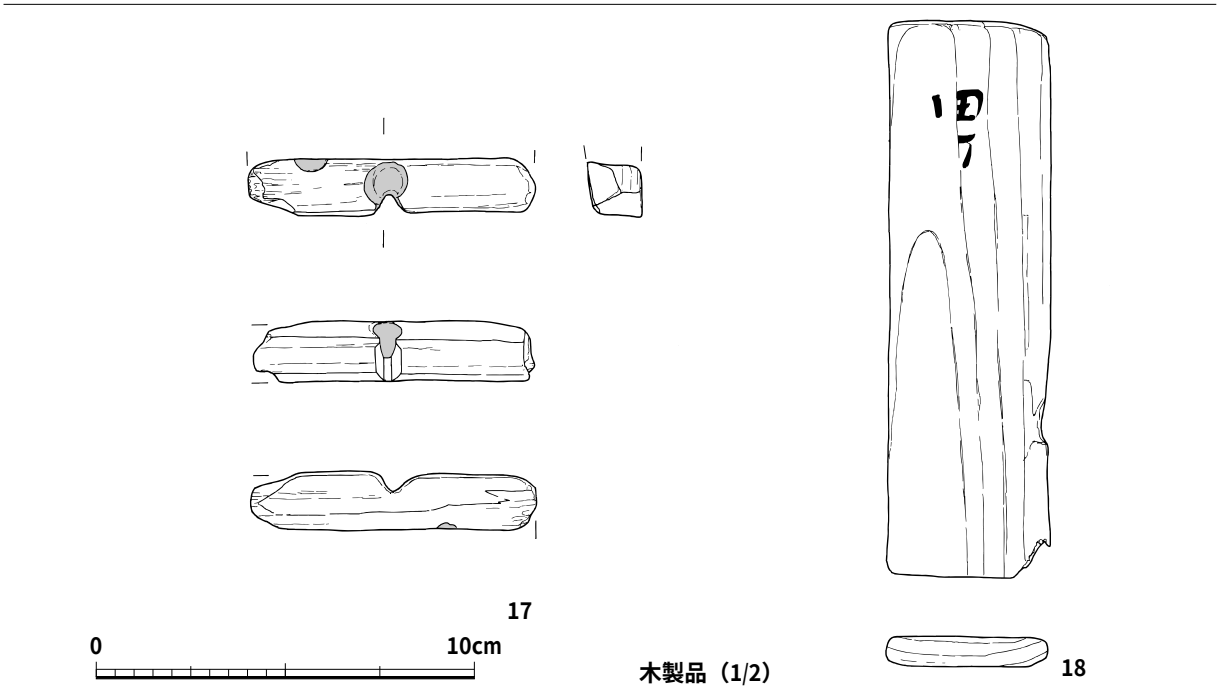
第29図　出土遺物（石器②）（1／4）



第30図　出土遺物（石器③）（1／4）







第31図　出土遺物（石器④（1／4）・金属器（1／2）・ガラス玉（1／1）・木製品（1／2）

ている。**14・15**が濃い青色で他はコバルトブルーである。**17**は火きり臼である。厚さ1.6㎝の杉と思われる板材を利用し，表面左右に一箇所ずつ裏面に一箇所使用した痕が残る。凹部は摩擦による熱で黒変している（アミ部分）。凹部の位置から判断すると臼の幅は2.5㎝程度であったものと思われる。Ｃ区の道路状遺構から出土。**18**は木簡である。表面に墨書で書かれた２文字が確認できる。最初の文字は田と思われるが，次の文字は判読不能である。Ｃ区３層出土。

（註１）02－SD６は報告によると，最深部で10㎝であった。この溝の延長線にあたるＣ区東壁際を精査しても溝を確認できなかったことから，この溝は2002年度調査区北区内で収束しているものと思われる。

（註２）類例は2005年度不條地区調査の際に出土している（寺田正剛　2006「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第33集』長崎県教育委員会　P32　第23図）。寺田正剛氏の教示による。

（註３）遺跡周辺を歩くと土器片に混ざり前面が擦痕によりスリガラス状を呈する長さ３～４㎝厚さ１㎝程度の黒曜石の円礫を良く見かける。この円礫の擦痕は自然によるものと思われる。

（註４）類例は2002年度石田高原地区調査の際に出土している（中尾篤志　2003「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第26集』長崎県教育委員会　P145　第87図）

【参考文献】

・宮崎貴夫　2005「土器」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第30集　原の辻遺跡　総集編１』長崎県教育委員会

第２表　石田高原地区出土土器観察表①

報告番号		調査区	遺構名	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第17図	1	D区	SD１	甕	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	
	2	D区	SD１	甕	赤褐	2.5YR4/6	灰白	10YR7/1	石英・長石	底部		指圧	摩滅
	3	D区	SD１	器台	明褐灰	7.5YR7/2	橙	2.5YR6/8	石英・長石・角閃石	完形	指圧・ナデ	シボリ・指圧・ナデ	杏形
	4	E区	SD１	甕	黒褐	2.5Y3/1	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	胴部	ハケメ	ハケメ	甕棺・外面吸炭
	5	D区	SD１	甕	灰白	10YR7/1	褐灰	10YR4/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ	ナデ	含まれる砂粒は微細である
	6	D区	SD２	壺?	橙	5YR7/6	橙	5YR7/8	石英・長石・金雲母	口縁部	ヘラミガキ	ナデ	含まれる砂粒は微細である
	7	E区	SD２	甕	橙	2.5YR6/6	黒褐	2.5Y3/1	石英・長石・金雲母	底部	指圧・ナデ	指圧	
	8	E区	SD２	甕	橙	7.5YR6/6	褐	7.5YR4/6	石英・長石	底部		ナデ	
	9	E区	SD２	高坏	灰白	2.5Y8/1	褐	10YR4/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	10	F区	SD３	甕	灰白	5Y8/1	黄灰	2.5Y4/1	石英・長石・金雲母	底部			
	11	B区	SD３	甕	明赤褐	2.5YR5/6	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部			
	12	F区	SD３	甕	赤	10R5/6	赤灰	2.5YR5/1	石英・長石・金雲母	底部			
	13	F区	SD３	甕	浅黄橙	7.5YR8/3	灰白	7.5YR8/2	石英・長石	底部			
	14	B区	SD３	壺	褐	7.5YR4/3	黒褐	7.5YR3/2	石英・長石・金雲母	底部			
	15	F区	SD３	壺	にぶい黄	2.5YR6/3	褐灰	10YR5/1	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	16	F区	SD３	壺	橙	5YR7/6	褐灰	10YR6/1	石英・長石・金雲母	底部	ナデ		
	17	F区	SD３	小型丸底壺	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/8	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	18	C区	SD４	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	19	C区	SD４	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR4/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	20	C区	SD４	甕	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	21	C区	SD４	甕	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	22	C区	SD４	甕	橙	2.5YR7/6	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
第18図	23	C区	SD４	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	5YR6/6	石英・長石	底部	ハケメ・ナデ	ナデ	
	24	C区	SD４	甕	にぶい橙	5YR7/4	褐灰	7.5YR5/1	石英・長石・金雲母	底部			
	25	C区	SD４	甕	にぶい橙	5YR7/4	灰白	10YR8/1	石英・長石	底部	ハケメ	ナデ	
	26	C区	SD４	甕	明褐灰	7.5YR7/2	灰褐	7.5YR6/2	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	ナデ	胴部最下端をナデで調整
	27	C区	SD４	甕	橙	5YR7/6	褐灰	7.5YR5/1	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	ヘラナデ	内面のヘラナデは強い
	28	C区	SD４	壺	橙	7.5YR7/6	褐灰	10YR5/1	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
	29	C区	SD４	壺	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
	30	C区	SD４	壺	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y4/1	石英・長石	底部	ナデ	ナデ	
	31	C区	SD４	複合口縁壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	32	C区	SD４	高坏	褐	7.5YR6/3	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部			鋤先形口縁・内外面丹塗り
	33	C区	SD４	高坏	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	2.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部		ミガキ	鋤先形口縁・内外面丹塗り
	34	C区	SD４	高坏	にぶい橙	5YR6/4	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	鋤先形口縁・内外面丹塗り
	35	C区	SD４	高坏	明赤褐	2.5YR5/6	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	36	C区	SD４	壺	赤	10R5/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	胴部より上位	ハケメ	ナデ	外面と内面頸部に丹塗り
	37	C区	SD４	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	胴部	タタキ・ナデ	ハケメ	甕棺
	38	C区	SD４	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	胴部上半	ハケメ	ハケメ	
	39	C区	SD４	甕	赤	10R5/8	赤灰	10R5/1	石英・長石・金雲母	ほぼ完形	ハケメ	ハケメ	
第19図	40	C区	SD４	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	灰褐	7.5YR6/2	石英・長石・金雲母・角閃石	肩部から上位	ハケメ	ヘラケズリ	肩部に竹管文
	41	C区	SD４	甕	明赤褐	2.5YR5/8	赤	10R5/6	石英・長石・金雲母	胴部上半	ハケメ	ヘラケズリ	肩部に一条の浅い沈線
	42	C区	SD４	高坏	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	坏部・脚部		袖部にハケメ	脚部に穿孔３ヶ所
	43	C区	SD４	高坏	橙	5YR6/8	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	裾部	ナデ	ナデ	低脚の高坏
	44	D区	SD５	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石	口縁部			
	45	D区	SD５	甕	褐	7.5YR4/4	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ		
	46	D区	SD５	甕	橙	5YR6/6	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石	底部		ナデ	
	47	D区	SD５	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ハケメ	
	48	D区	SD５	高坏	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	49	E区	SK１	甕	褐灰	7.5YR4/1	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部			
	50	E区	SK１	甕	橙	2.5YR6/6	にぶい橙	5YR7/4	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	51	E区	SK１	甕	明赤褐	5YR5/6	にぶい橙	5YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	52	E区	SK１	甕	浅黄橙	10YR8/2	灰白	5Y7/1	石英・長石	底部	ナデ	ナデ	
	53	E区	SK１	壺	にぶい橙	10YR7/2	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	

第３表　石田高原地区出土土器観察表②

第20図	1	A区	SF１	甕	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄褐	10YR5/3	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	2	C区	SF１	甕	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	3	A区	SF１	甕	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	4	C区	SF１	甕	明赤褐	2.5YR5/6	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	5	B区	SF１	甕	橙	2.5YR6/6	灰褐	7.5YR6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	6	B区	SF１	甕	明赤褐	5YR5/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	粘土紐接合痕
	7	C区	SF１	甕	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	8	C区	SF１	甕	にぶい黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	9	C区	SF１	甕	灰オリーブ	5Y6/2	灰白	5Y7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・指圧	
	10	C区	SF１	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	11	C区	SF１	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	12	A区	SF１	甕	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	胴部上半	ハケメ・指圧	ヨコナデ	胴部外面下半にヘラミガキ
	13	C区	SF１	甕	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	胴部上半	ハケメ・指圧	ハケメ・指圧	口縁部にヨコナデ
	14	C区	SF１	甕	灰黄	2.5Y7/2	灰白	5Y7/1	石英・長石・金雲母・角閃石	胴部上半	ハケメ・ヨコナデ	ヨコナデ・指圧	
	15	C区	SF１	甕	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	粘土紐接合痕
	16	B区	SF１	甕	にぶい橙	5YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/3	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	粘土紐接合痕
第21図	17	A区	SF１	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい橙	5YR7/4	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	
	18	B区	SF１	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	
	19	B区	SF１	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	胴部	ハケメ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	
	20	A区	SF１	甕	淡赤橙	2.5YR7/3	褐灰	7.5YR4/1	石英・長石・金雲母・角閃石	底部	ハケメ	指圧・ナデ	
	21	A区	SF１	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/3	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	ナデつけ状の指圧
	22	A区	SF１	甕	灰褐	7.5YR6/2	褐灰	10YR4/1	石英・長石・金雲母・角閃石	底部		指圧・ナデ	

石田高原地区

報告番号		調査区	遺構名	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第21図	23	C区	SF1	甕	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい赤褐	5YR5/4	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	24	C区	SF1	甕	にぶい橙	5YR7/4	褐灰	5YR4/1	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	25	C区	SF1	甕	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	26	C区	SF1	甕	橙	5YR6/6	黄灰	2.5Y4/1	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	27	C区	SF1	甕	にぶい橙	7.5YR6/4	灰褐	7.5YR5/2	石英・長石・金雲母・角閃石	底部		ナデ	
	28	C区	SF1	甕	にぶい橙	7.5YR7/4	褐灰	10YR4/1	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	ナデ	粘土紐接合痕
	29	A区	SF1	甕	明赤褐	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/8	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	ヘラ状工具による押さえ痕
	30	C区	SF1	甕	にぶい赤褐	2.5YR5/4	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	31	C区	SF1	甕	赤橙	10R6/6	浅黄橙	10YR8/3	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	32	C区	SF1	甕	灰白	2.5Y7/1	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ		
	33	C区	SF1	甕	灰黄	2.5Y6/2	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	ヘラ状工具による押さえ痕
	34	B区	SF1	甕	浅黄橙	10YR8/3	灰白	2.5Y8/1	石英・長石・金雲母	底部		ナデ	
	35	C区	SF1	甕	橙	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	指圧・ナデ	
	36	C区	SF1	甕	橙	5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	37	B区	SF1	甕	にぶい褐	7.5YR6/3	褐灰	10YR4/1	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	指圧・ナデ	
	38	B区	SF1	甕	にぶい黄橙	10YR7/3	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石・金雲母	底部		ナデ	断面に接合痕
	39	C区	SF1	甕	赤	10R5/6	明赤褐	2.5YR5/6	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	
	40	C区	SF1	甕	明赤褐	2.5YR5/6	灰黄褐	10YR4/2	石英・長石・金雲母	底部		指圧・ナデ	断面に接合痕
	41	A区	SF1	甕	にぶい橙	5YR6/4	灰褐	5YR4/2	石英・長石・金雲母	底部			
第22図	42	C区	SF1	複合口縁壺	赤	10R5/8	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	指圧・ヨコナデ	
	43	C区	SF1	複合口縁壺	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	指圧・ヨコナデ	
	44	C区	SF1	複合口縁壺	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	
	45	B区	SF1	複合口縁壺	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	
	46	B区	SF1	広口壺	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	47	C区	SF1	広口壺	橙	2.5YR6/6	明赤褐	2.5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	
	48	C区	SF1	広口壺	橙	2.5YR6/6	明赤褐	2.5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	
	49	B区	SF1	広口壺	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ハケメ	
	50	C区	SF1	鋤先形口縁壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	内外丹塗り・口唇部に刻み
	51	A区	SF1	鋤先形口縁壺	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	内外丹塗り・口唇部に横位沈線
	52	C区	SF1	鋤先形口縁壺	橙	2.5YR6/6	ナデ	指圧・ナデ	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	外面丹塗り・断面に接合痕
	53	C区	SF1	鋤先形口縁壺	にぶい橙	7.5YR6/4	褐灰	7.5YR5/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	内外丹塗り・口唇部に横位沈線と刻み
	54	A区	SF1	鋤先形口縁壺	明赤褐	5YR5/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	外面丹塗り・口唇部に横位沈線と刻み
	55	A区	SF1	鋤先形口縁壺	橙	5YR6/6	明赤褐	5YR5/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	
	56	C区	SF1	鋤先形口縁壺	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	57	C区	SF1	広口壺	橙	2.5YR6/8	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	口唇部に刻み
	58	C区	SF1	広口壺	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ヨコナデ	口唇部に刻み
	59	C区	SF1	複合口縁壺	明赤褐	2.5YR5/6	にぶい橙	5YR7/4	石英・長石・金雲母	頸部	ナデ	ナデ	
第23図	60	C区	SF1	長頸壺	橙	2.5YR6/8	橙	2.5YR6/8	石英・長石・金雲母	頸部	ナデ	ナデ	
	61	C区	SF1	袋状短頸壺	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	胴部	ナデ	指圧・ナデ	丁寧な作り・丹塗り・袋状口縁壺
	62	B区	SF1	広口壺	灰黄	2.5Y7/2	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	頸部	ハケメ	ハケメ	
	63	B区	SF1	短頸壺	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	石英・長石・金雲母	胴部上半	ナデ	指圧・ナデ	黒塗り
	64	C区	SF1	短頸壺	灰黄	2.5Y6/2	灰オリーブ	5Y6/2	石英・長石・金雲母	胴部上半	ナデ	指圧・ナデ	丹塗り
	65	C区	SF1	短頸壺	灰黄	2.5Y7/2	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	胴部上半	ミガキ	ナデ	丹塗り
	66	C区	SF1	短頸壺	赤	10R5/6	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	胴部上半	ナデ	指圧・ナデ	丹塗り
	67	C区	SF1	短頸壺	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	石英・長石・金雲母	胴部上半	ナデ	指圧・ナデ	丹塗り
	68	C区	SF1	短径壺蓋	明赤褐	2.5YR5/8	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	蓋つまみ部	ナデ	指圧・ナデ	丹塗り
	69	A区	SF1	壺	にぶい橙	5YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	指圧・ナデ	
	70	A区	SF1	壺	明赤褐	2.5YR5/8	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	外面丹塗り
	71	C区	SF1	壺	灰黄	2.5Y7/2	浅黄	2.5Y7/3	石英・長石・金雲母	底部	ナデ・ハケメ	指圧・ナデ	
	72	B区	SF1	壺	黄橙	10YR7/4	黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	内面に時計回りの強いヘラ押し当て
	73	C区	SF1	壺	にぶい橙	7.5YR6/4	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	指圧・ナデ	
	74	C区	SF1	高坏	赤	10TR4/6	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	坏部・脚部	ナデ・ミガキ	指圧・ナデ	外面丹塗り
	75	C区	SF1	高坏	明赤褐	2.5YR5/6	浅黄橙	10YR8/3	石英・長石・金雲母	坏部・脚部	ヘラミガキ	ナデ	内外丹塗り
	76	C区	SF1	高坏	橙	7.5YR7/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	脚部	ナデ		
	77	C区	SF1	高坏	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄橙	10YR6/4	石英・長石・金雲母	脚部	ナデ	ナデ	
	78	C区	SF1	高坏	灰白	2.5Y8/2	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	坏部	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	口縁部外面に3条の沈線が巡る
	79	C区	SF1	高坏	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	石英・長石・金雲母	坏部	ナデ	ナデ	
	80	C区	SF1	台付鉢	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	脚部・鉢部	ナデ	ナデ	
	81	C区	SF1	台付鉢	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	脚部・鉢部	ナデ	ナデ	
	82	C区	SF1	高坏	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	83	C区	SF1	高坏	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	84	C区	SF1	高坏	橙	5YR6/6	にぶい褐	7.5YR5/4	長石・金雲母	裾部	ナデ	ナデ	穿孔あり
	85	A区	SF1	高坏	にぶい褐	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR5/4	石英・長石・金雲母	裾部	ハケメ	ハケメ	穿孔あり
	86	A区	SF1	高坏	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	脚部・鉢部	ハケメ	ナデ	穿孔あり
	87	B区	SF1	高坏	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/3	石英・長石・金雲母	脚部・鉢部	ナデ	ナデ	穿孔あり
	88	A区	SF1	高坏	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	石英・長石	脚部	ナデ	ナデ	
	89	B区	SF1	高坏	にぶい橙	7.5YR7/3	橙	5YR7/6	石英・長石・金雲母・角閃石	坏部	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
第24図	90	A区	SF1	高坏	橙	2.5YR6/8	にぶい黄橙	10YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部のみ欠	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	擬口縁
	91	A区	SF1	小型丸底壺	明赤褐	5YR5/6	にぶい橙	5YR6/4	石英・長石・金雲母	胴部	ナデ	ナデ	
	92	B区	SF1	小型丸底壺	橙	5YR7/6	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部一部欠	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
	93	B区	SF1	鉢	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	胴部上半	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
	94	B区	SF1	丸底坏	にぶい橙	7.5YR7/3	橙	5YR7/8	石英・長石・金雲母	1/4	ナデ	ナデ	
	95	C区	SF1	器台	灰黄	2.5Y7/2	橙	5YR6/6	石英・長石・金雲母	上半	指圧・ナデ	指圧・ナデ	沓形器台
	96	C区	SF1	器台	明赤褐	2.5YR5/8	にぶい黄橙	10YR7/2	石英・長石・金雲母	下半	指圧・ナデ	指圧・ナデ	
	97	C区	SF1	器台	にぶい橙	5YR6/4	にぶい赤褐	5YR5/4	石英・長石・金雲母	上半	ハケメ	指圧・ナデ	
	98	C区	SF1	器台	橙	7.5YR7/6	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石・金雲母	上半	ハケメ	指圧・ナデ	
	99	B区	SF1	器台	褐	7.5YR4/4	灰黄	2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	上半	ナデ	ナデ	
	100	B区	SF1	器台	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	上半	ナデ	指圧・ナデ	

第４表　石田高原地区出土土器・土製品観察表

報告番号		調査区	遺構名	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第25図	1	E区	５層	甕	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	口唇下半に刻み
	2	E区	５層	甕	灰褐	7.5YR5/2	にぶい黄橙	10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	口唇下半に刻み
	3	E区	５層	甕	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	口唇下半に刻み
	4	C区	SF１	無頸壺	にぶい赤褐	2.5YR4/4	にぶい赤褐	5YR4/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	結晶片岩片多く含む
	5	B区	SF１	鉢	灰白	10YR7/1	灰黄褐	10YR6/2	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ	
	6	D区	４b層	壺	にぶい黄褐	10YR7/4	黒褐	5YR2/1	石英・長石・角閃石	頸部	ナデ	ナデ	４条の沈線
	7	B区	SF１	壺	橙	5YR6/6	橙	5YR6/7	石英・長石・金雲母	肩部	ナデ	ナデ	沈線の上に竹管文
	8	B区	４層	壺	灰褐	7.5YR5/2	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石	胴部	ナデ	ナデ	斜位と横位の細沈線
	9	C区	SF１	把手	橙	5YR6/6	灰黄褐	10YR5/2	石英・長石・金雲母	把手のみ	ナデ	－	
	10	F区	４層	把手	橙	7.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	把手のみ	ナデ	－	
	11	A区	SF１	円盤状土製品	褐	7.5YR4/3	明赤褐	2.5YR5/6	石英・長石	完形	－	－	
	12	C区	SF１	円盤状土製品	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	石英・長石・金雲母	完形	打ち欠き部分を研磨		
	13	E区	SD２	円盤状土製品	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/3	石英・長石	完形	－	－	

第５表　石田高原地区出土瓦質土器・陶質土器観察表

報告番号		調査区	遺構名	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第26図	1	E区	４層	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	2	B区	４b層	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・金雲母	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	3	F区	４b層	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石・金雲母	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	4	A区	SF１	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石・金雲母	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	5	E区	３層	半島系土器	灰	N5/0	灰	N6/0	石英・長石	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	6	F区	３層	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石・金雲母	肩部	格子目タタキ・ヨコナデ	ナデ	瓦質土器
	7	F区	４b層	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	8	A区	４b層	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	9	A区	SF１	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石・金雲母	胴部	格子目タタキ	ナデ	瓦質土器
	10	A区	４b層	半島系土器	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	石英・長石・金雲母	胴部	縄席文の交差	ナデ	瓦質土器
	11	A区	４層	半島系土器	灰白	N7/0	灰白	N7/0	石英・長石・金雲母	胴部	縄席文の交差・沈線	ナデ	瓦質土器
	12	A区	４b層	半島系土器	灰白	N7/0	灰白	N7/0	石英・長石	胴部	縄席文の交差	ナデ	瓦質土器
	13	A区	４b層	半島系土器	灰白	N7/0	灰白	N7/0	石英・長石	胴部	縄席文・沈線	ナデ	瓦質土器
	14	F区	４層	半島系土器	灰白	N7/0	灰白	N7/0	石英・長石・金雲母	胴部	縄席文・沈線	ナデ	瓦質土器
	15	F区	４層	半島系土器	灰	N6	灰	N6	石英・長石・金雲母	胴部	縄席文・沈線	ナデ	瓦質土器
	16	F区	４b層	半島系土器	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	石英・長石・金雲母	胴部	縄席文・沈線	ナデ	瓦質土器
	17	C区	SF１	半島系土器	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	石英・長石・金雲母	胴部	縄席文・沈線	ナデ	瓦質土器
	18	C区	４b層	半島系土器	青灰	5B5/1	青灰	5B5/1	長石	胴部	綾杉状縄席文・沈線	ナデ	陶質土器
	19	A区	４b層	半島系土器	灰	N5/0	灰	N6/0	長石	胴部	綾杉状縄席文	ナデ	陶質土器
	20	A区	SF１	半島系土器	灰	N5/0	灰	N6/0	長石	胴部	綾杉状縄席文・沈線	ナデ	陶質土器
	21	F区	３層	半島系土器	灰	N5/0	灰	N6/0	長石	肩部	縄席文・ナデ	ナデ	陶質土器
	22	A区	４b層	半島系土器	灰	N5/0	灰	N6/0	長石	胴部	縄席文・沈線	ナデ	陶質土器
	23	F区	４b層	半島系土器	灰	N5/0	褐灰	10YR5/1	長石	胴部	縄席文・沈線	ナデ	陶質土器
	24	A区	SF１	半島系土器	青灰	5B4/1	青灰	5B4/1	長石	胴部	縄席文・沈線	ナデ	陶質土器
	25	F区	４b層	半島系土器	灰	N5/0	灰	N5/0	長石	胴部	縄席文・沈線	ナデ	陶質土器

第６表　石田高原地区出土須恵器・瓦器・陶磁器観察表

報告番号		調査区	遺構名	種類	部位	色調(外面)		色調(胎)		残存状況	その他
第27図	1	D区	４b層	須恵器坏身	受け部	灰	5TR6/1	灰	5TR6/1	一部残	
	2	C区	４b層	須恵器坏蓋	裾部	灰	N5/0	灰	N5/0	一部残	
	3	C区	４b層	須恵器長頸壺	頸部	暗黒	N3/0	灰	N4/0	頸部のみ残	成形痕あり
	4	B区	４b層	須恵器坏蓋	天井部	灰黄	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	天井部のみ残	
	5	E区	４層	瓦器椀	体部上半	灰	N6/0	灰	5Y4/1	一部残	楠葉型か
	6	A区	４層	白磁椀	底部	灰白	2.5Y8/2	灰白	5Y7/2	底部のみ	高台内に墨書
	7	D区	３層	白磁皿	底部	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	底部のみ	高台内に墨書
	8	E区	４層	白磁椀	底部	浅黄	5Y7/3	灰白	5Y7/1	底部のみ	
	9	F区	４層	白磁椀	底部	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/1	底部のみ	
	10	C区	４層	青磁椀	底部	オリーブ灰	10Y5/2	灰白	N8/0	底部のみ	
	11	C区	２層	青磁椀	底部	オリーブ灰	10Y6/2	灰白	N7/0	底部のみ	
	12	A区	４層	青磁椀	底部	灰	7.5Y6/1	灰白	5Y7/1	底部のみ	
	13	D区	４層	象嵌青磁	不明	灰	10Y6/1	灰	N6/0		
	14	B区	２層	象嵌青磁椀	体部	オリーブ灰	10Y4/2	灰	10Y6/1	体部のみ	
	15	B区	４層	象嵌青磁坏	底部	オリーブ灰	2.5GY6/1	灰白	N7/0	底部のみ	目跡あり
	16	F区	４層	象嵌青磁	体部	オリーブ灰	10Y6/2	灰白	N7/0	体部のみ	
	17	E区	４層	灰青陶器椀	底部	灰	10Y6/1	灰白	N7/0	底部のみ	目跡あり
	18	E区	４層	青磁椀	底部	明緑灰	10GY7/1	灰白	5Y8/1	底部のみ	目跡あり
	19	A区	４層	白磁皿	口縁部	灰白	10Y7/1	灰白	7.5Y7/1	口縁部のみ	
	20	B区	４層	華南三彩坏	口縁部	コバルトブルー	?	灰白	N8/0	口縁部のみ	
	21	E区	３層	雑釉陶器椀	底部	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1	底部のみ	目跡あり
	22	C区	３層	陶器皿	底部	オリーブ黒	5Y3/2	灰オリーブ	5Y5/2	底部のみ	目跡あり
	23	B区	２層	円盤状陶磁製品	(底部)	オリーブ灰	2.5GY6/1	灰白	2.5Y7/1	(完形)	目跡あり

第７表　石田高原地区出土石器観察表

報告番号		調査区	遺構名	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	残存状況	その他
第28図	1	F区	4b層	石鏃	2.6	2	0.7	2.5	黒曜石	完形	表裏に原石の表皮が残る
	2	E区	3層	石鏃	2.1	1.6	0.5	1.2	黒曜石	先端欠	不純物が混ざる
	3	A区	3層	石鏃	2.1	1.5	0.3	0.6	黒曜石(漆黒)	ほぼ完形	
	4	E区	4b層	石鏃	3.4	2.1	0.5	2	黒曜石	先端欠	不純物が混ざる
	5	B区	5層	石鏃	3.3	1.7	0.5	1.3	黒曜石	先端・基部欠	不純物が混ざる
	6	C区	4層	石剣	6	3.8	0.7	21.2	頁岩(灰白色)	先端・基部欠	刃部も欠けている
	7	C区	4層	石剣	7.9	4.2	0・9	44.8	硬質砂岩(青灰色)	先端・基部欠	
	8	A区	4b層	石包丁	4.8	4.8	0.5	15	頁岩(青灰色)	半分欠損	両面から穿孔
	9	B区	4層	石鎌	3.7	1.8	0.5	4.6	硬質砂岩(青灰色)	先端のみ	全面研磨
	10	F区	4b層	石鎌	5.5	2.9	0.5	8.8	硬質砂岩(青灰色)	先端のみ	全面研磨
	11	A区	4b層	石鎌	5.5	4.8	1.2	48.8	硬質砂岩(青灰色)	両端欠	全面研磨
	12	C区	4b層	石鎌	13.6	4.6	0.9	98.4	硬質砂岩(青灰色)	先端欠	刃部のみ研磨
	13	D区	4b層	扁平片刃石斧	7.2	1.5	0.7	15.5	頁岩(青灰白色)	刃部欠け	石鑿状
	14	C区	SF1	扁平片刃石斧	4.5	2	5.5	9.1	頁岩(にぶい橙5YR6/4)	基部欠	石鑿状・被熱?
	15	A区	4b層	扁平片刃石斧	3.6	2.7	4.5	71	頁岩(青灰白色)	刃部・基部欠	
	16	D区	4b層	扁平片刃石斧	3.7	2.2	1	11.1	頁岩(青灰白色)	基部欠	
	17	F区	4層	扁平片刃石斧	4.9	2.5	0.7	17.7	頁岩(青灰白色)	刃部一部欠	
	18	F区	4層	扁平片刃石斧	6.2	3.2	1.2	57.3	頁岩(青灰白色)	刃部・基部欠	
	19	B区	4b層	扁平片刃石斧	5.3	2.8	1.1	30.7	頁岩(青灰白色)	基部一部欠	
	20	F区	4b層	石錘	15.1	13.9	5.1	817.8	多孔質玄武岩	ほぼ完形	方形の孔
第29図	21	B区	4b層	凹石	11.8	8.3	4.7	780	玄武岩	完形	敲打面あり
	22	B区	4b層	凹石	8.5	4.5	4.2	306.2	玄武岩?(緑色)	凹部残	敲打面あり
	23	B区	4b層	凹石	11.1	8.5	5.7	866.8	玄武岩	完形	
	24	C区	4b層	凹石	11.6	10.5	6.5	1210	玄武岩	完形	敲打面あり
	25	C区	4b層	凹石	10.8	10	5.5	972.6	玄武岩	完形	敲打面あり
	26	C区	4b層	凹石	14.3	11.4	3.3	711.4	玄武岩	完形	敲打面あり
	27	C区	4b層	凹石	9	8.1	3.7	450.3	玄武岩	完形	敲打面あり
第30図	28	C区	4b層	磨石	12.2	10	5.3	1119	玄武岩	完形	裏面に凹部あり
	29	C区	4b層	磨石	11	8.9	5.7	900.6	玄武岩	完形	側縁に敲打痕あり
	30	A区	4b層	砥石	9.1	17.5	5.2	1292.5	硬質砂岩(灰色)	完形	砥ぎ面に敲打痕あり
	31	C区	4b層	砥石	8.7	6	1.3	77.6	硬質砂岩(灰色)	部分	
	32	A区	4b層	敲石	13.3	8.5	4.5	679	玄武岩	―	
	33	C区	4b層	敲石	12.7	6.2	4.3	509	玄武岩	完形	
	34	C区	4b層	敲石	12.5	8.6	4.2	641	玄武岩	完形	
第31図	35	A区	4b層	石製支脚	13.1	11.6	13.3	1005	多孔質玄武岩	完形	一部被熱

第８表　石田高原地区出土金属器・ガラス玉・木製品観察表

報告番号		調査区	遺構名	種類	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存状況	その他
第31図	1	C区	5層	袋状鉄斧	鉄	6.3	3.5	1.3	47.6	完形	丹塗りか?
	2	E区	SK1	袋状鉄斧	鉄	6.7	3.9	1.7	48.6	基部欠	
	3	C区	4b層	銅鏃	青銅	3.3	1	0.4	2.4	完形	
	4	B区	4層	銅鏃	青銅	5.1	1.2	0.5	3.9	一部欠	
	5	A区	4層	銅鏃	青銅	3.7	0.8	0.4	2.1	先端欠	
	6	A区	4b層	銅鏃	青銅	4.4	0.8	0.5	3.4	一部欠	
	7	D区	4層	銅鏃	青銅	3.1	0.9	0.6	2.7	基部欠	
	8	E区	4層	銅鏃	青銅	2.1	0.5	0.2	0.4	完形	
	9	A区	4b層	玉	ガラス	0.7	－	0.2	－	完形	灰白色
	10	F区	4b層	玉	ガラス	0.5	－	0.4	－	完形	水色
	11	A区	4b層	玉	ガラス	0.5	－	0.3	－	完形	水色
	12	A区	4層	玉	ガラス	0.3	－	0.2	－	完形	水色
	13	A区	4b層	玉	ガラス	0.4	－	0.2	－	完形	水色
	14	B区	4b層	玉	ガラス	0.3	－	0.3	－	完形	濃い青
	15	B区	4層	玉	ガラス	0.3	－	0.3	－	完形	濃い青
	16	A区	4層	玉	ガラス	0.4	－	0.2	－	完形	水色
	17	C区	SF1	火きり臼	杉?	7.5	1.5	1.6	－	一部残	凹部の表面炭化
	18	C区	3層	木簡	杉	14.7	4.3	0.8	－	完形	田?の墨書

⑷ 小　　結

溝について

今年度は，東側低地部で確認されていた環濠間の繋がりを明らかにする目的で，1993（平成５）年度調査区で16号溝を検出した地点を中心に，2002（平成14）年度北区，2002（平成14）年度中央区，2004（平成16）年度調査区の間を埋める形で調査区を設定した。調査区外に伸びるものや旧調査区内で収束するものを除き，過去に検出した溝をつなぐことができた。その結果，東側低地部での状況は，丘陵を取り巻く溝だけではなく西側低地部と同じように短い溝も配置されていたことが分かった。この短い溝は，丘陵を取り巻く溝と同じように丘陵の裾のラインに沿って，北西－南北に向けて掘削されている。切り合い関係は今回の調査では確認できず，ほぼ同じ間隔を保ち整然と並んでいる印象を受けた。溝の中から出土する遺物が弥生時代の中期～後期（中には古墳時代初頭）と時代の幅があることから，これらの溝が長い間利用されていたことが伺える。年代測定の結果と出土遺物の年代に差があることからもこのことが言えよう。また，出土遺物の量についてみてみると，丘陵側の SD４ではまとまって出土したが，丘陵から離れると遺物の量は減り，ローリングしているものが増えてくる。このことから，丘陵に近い溝が土器の廃棄場として利用されたものと思われる（註１）。

では，これらの短い溝はどのような利用をされたのであろうか。各溝の底面レベルはわずかに南東に傾くか，ほぼ同じである。溝の覆土に腐植土を多く含むことからも，さほど流れのないよどんだ状態で水があったことが伺える。積極的に排水をしないで水を溜めていた状態ではなかろうか。排水と利水の両方の目的があったものと思われる。これらの溝と異なる溝が，断面Ｖ字で壁が切り立っている５号溝である。この溝は主軸方向も東－西と他の溝とずれている。また，覆土が腐植土をまったく含まず，締まった２層からのみなることも異なっている。これらのことから，５号溝は他の溝と異なる目的で掘削され，短期間のうちに埋められたことが考えられる。掘削の目的は，形状から考えると防御のためであったと思われる。

道路状遺構について

今年度の調査で東側低地部に丘陵の縁辺に沿うように道路状遺構があったことが明らかになった。この遺構は４号溝の上に礫や土器を敷き詰めて作られており東側が緩やかに傾斜をしている。構築方法は，地山まで削り出しを行い東側は排水のための傾斜を持たせたものと思われる（Ｃ区南壁では，削り残った地山の上の５層がわずかに残っている様子が観察できる）。そして，その上に礫や土器片を置いたものと思われる。その際，通路になる部分には他よりも厚く敷いている様子がＡ区の断面から分かる。では，どうして溝のラインと重なるようにして道を作ったのであろうか。低地の利用もしくは排水の関係で，丘陵の縁辺部分に道を作ったが，そこにはもともと溝がありたまたま重なってしまったものであろうか。４号溝のプランと道路状遺構のプランの重なりを検討することと旧地形の復元をすることでその理由は分かってくるものと思われる。

次に，構築の時期であるが，４号溝の中からは，３世紀後半の遺物が出土している。溝は少なくともこの時期までは機能をしており，道路状遺構が作られたのはこれ以降になる。道路状遺構に敷かれ

た遺物は，圧倒的に弥生時代のものが多いのだが，４世紀半ばのものと思われる遺物（第24図92）が道路面に食い込む状態で出土した。また，路面からは５世紀半ばの遺物（第23図89，第24図94）が出土している。道路の東側斜面は４ｂ層により徐々に埋まっていくが，ここからは須恵器の長頸壺や坏蓋（第27図３，４）が出土している。４ｂ層はその後も堆積を続け，道の上端と同じ高さになる。そして，３層が堆積をして道路を覆い隠してしまう。以上の状況から，道路状遺構は５世紀半ばまでは積極的に利用され，少なくとも東側斜面が埋まっていく８世紀前半までは利用があったものと思われる。

過去の調査では，北へ200mの地点から両脇に側溝を持った古代の道路跡が確認されている。この道路は，今回検出した道路状遺構とは異なり側溝を持つしっかりとしたものである。この道路の開通が，今回検出した道路状遺構の廃絶と関わってくることも考えられる。これまで遺構・遺物に乏しかった古墳時代の資料がさらに増えることを期待したい。

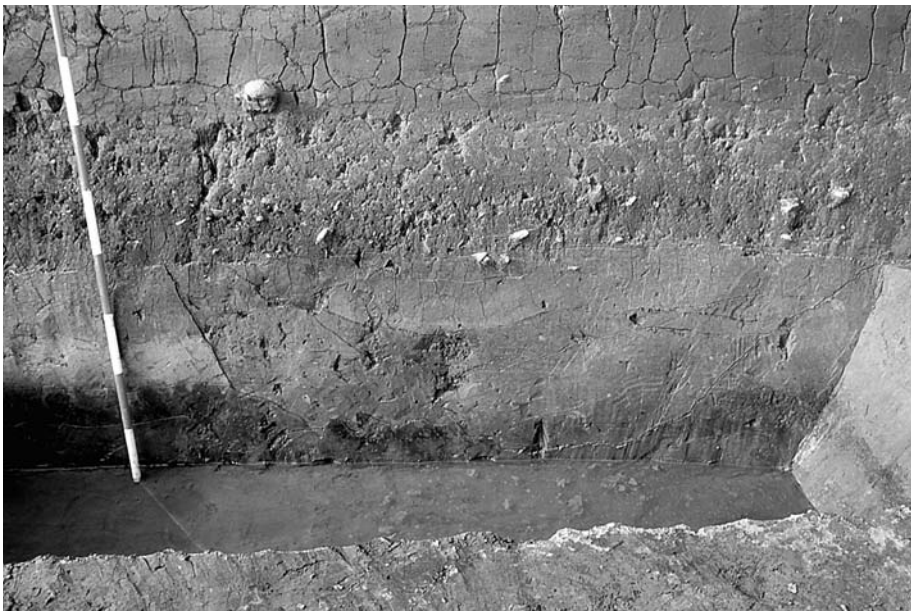
（註１）1993年に調査されたより丘陵側の２号溝からもおびただしい量の土器が出土している

石田高原地区
遺跡近景

１号溝土層堆積状況
（Ｄ区　北壁）

２号溝土層堆積状況
（Ｅ区　北壁）

図版２



３号溝土層堆積状況
（Ｂ区　北壁）

４号溝土層堆積状況
道路状遺構敷石状況
（Ｃ区　南壁）

５号溝土層堆積状況
（Ｄ区　東から）

１号土坑土層堆積状況
（Ｅ区　東から）

道路状遺構検出状況①
（Ａ区　南から）

道路状遺構検出状況②
（Ａ区　北から）

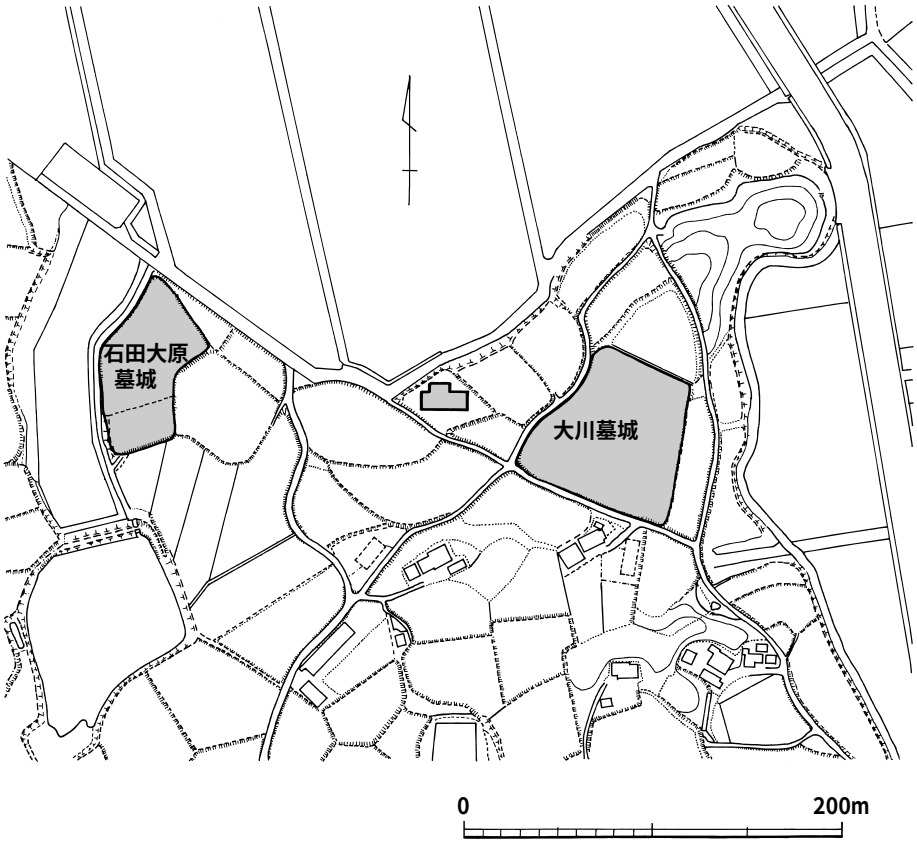
２．石田大原地区の調査

⑴　調査概要

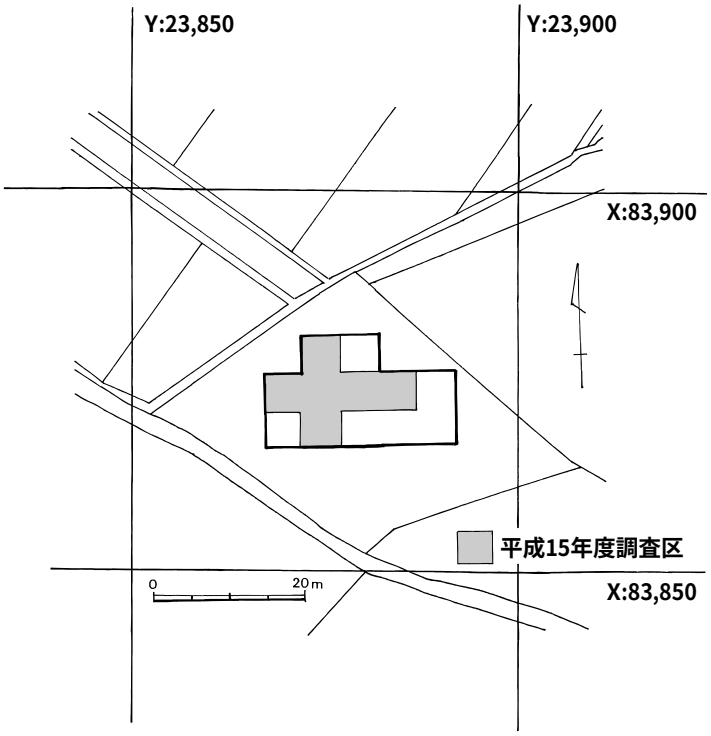
石田大原地区は，原の辻丘陵の南東側に位置し，1974（昭和49）年に畑地の農地改良工事の際に甕棺墓・石棺墓を中心とする墓域が確認された地区である。その後，2001（平成13）～2002（平成14）年の石田町教育委員会（現壱岐市教育委員会），2004（平成16）年の壱岐市教育委員会の調査が継続して実施されており，現在までのところ，甕棺墓82基，石棺墓21基，土壙墓21基が確認されている（福田2005，松見2005）。

平成18年度の調査区（353番地）は，石田大原地区の中でもさらに西側に位置し，大川地区に隣接する場所である。墓域が確認された調査区（石田大原墓域）よりも約150m東に離れており，２本の農道で分断されるなど現況では継続した地形とは言い難い。

一方，今年度の調査区の東側にあたる大川地区では，石田大原地区同様，墓地（大川墓域）が確認されている。1976（昭和51）年の土地改良を目的としたブルドーザーによる削平の際，甕棺墓・石棺墓が発見され，試掘調査で箱式石棺墓２基，土壙墓２基，小児甕棺墓４基が検出された（藤田1977）。1995（平成７）年の長崎県教育委員会による範囲確認調査では，箱式石棺墓５基，石蓋土壙墓および土壙墓13基，小児甕棺墓７基が検出され，副葬品やその周辺から，鉄剣・鉄鋤先，鉄鎌，青銅鏡などが出土している（宮崎1999）。2005（平成17）年の壱岐市教育委員会による調査では，箱式石棺墓が１基と甕棺墓が３基，祭祀土壙や環状遺構が検出された。こうした経緯からこの地区が弥生時代中期後半から後期後半を中心に形成された墓地であることが判明している。今回の調査区はこの２つの墓域に挟まれた立地（第32図）であり，墓地の一部であることが推測されたため，2003（平成15）年石田町教育委員会により調査が実施されている（河合2004）。調査では，Ｖ字形の溝状遺構が検出され，造成土中ではあるが青銅鏡（内行花文鏡）が出土している。



第32図　平成18年度石田大原地区調査区位置図（１/4,000）



第33図　石田大原地区調査区設定図（1/1,000）

平成18年度の調査は，以前の調査で検出された溝状遺構の性格と時期を再度確認することを目的として，発掘調査を実施した。調査区は，日本測地系の座標軸を利用し設定した。幸いにも，平成15年度の調査区を拡張する状況で調査区が設定され（第33図），過去の調査区とのつながりや層位の確認などは容易であった。

調査は人力による表土剥ぎから実施し，遺物包含層の確認・掘り下げと遺構検出を順次行っていった。調査区の現況は，広さ600㎡ほどの平坦な区画であるが，表土を剥ぎその下の造成土を掘り下げたところ，区画の北側や西側の周辺部はかなり地形が傾斜しており，現在のような平らな地形になる前は極度な「饅頭畑」が形成されていたことがわかった。従って表土と造成土の土量がかなりの嵩となるために排土の置き場に苦慮し，当初500㎡の調査区を予定していたが，300㎡の調査で終了した。

遺構は，平成15年度に確認された溝が１条とその周辺にピット状の遺構が確認され，中央部には不定形の土壙状の遺構が検出された（第34図）。但し，溝以外の遺構については，プランが明確ではなく，いくつかの遺構について半裁したものの立ち上がりが不明確であったことから，大方の遺構は検出だけにとどめた。また，埋土が明確なピットについては，いずれも径が10㎝程度であったことから，掘り下げは行っていない。

層位は大きく４つに区分され（第36・37図），溝の埋土については基本層位とは別に付号している。

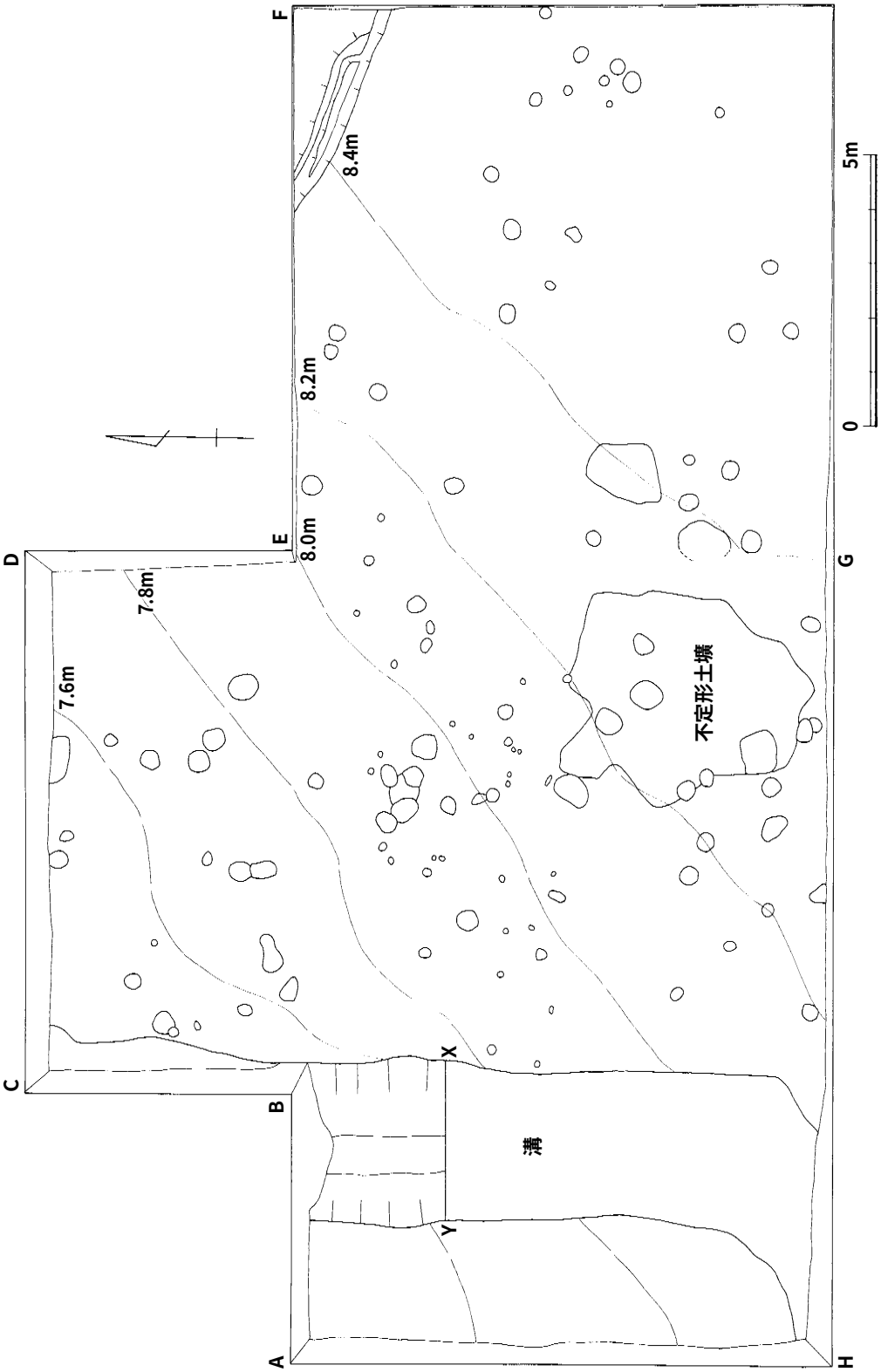
１層は耕作土（１ａ）および客土による造成土（１ｂ）であり，造成土は前述するように調査区の周辺部に厚く堆積している。調査区の中央付近は造成土がなく耕作土も15㎝程度と薄い。

２層は褐色土であり，地形の傾斜に沿ってほぼ均一に堆積していることから饅頭畑の耕作土と考えられる。中近世陶磁器などが包蔵されており，貿易陶磁器なども散見できる。

３層は黒褐色粘質土であり，下層に弥生時代の土器を包含する。ただし調査区の中央部に関しては３層と色調は類似するものの攪乱を受けているところもあり，純粋な遺物包含層とは断定できない。

４層は褐色の粘質土層であり，弥生時代の遺構検出面である。厚さ10㎝程度であり，その下は明黄灰色地山層につながっていく。

調査は平成18年８月28日から開始し，途中９月26日から他地区の調査で中断，12月15日に再開し，12月19日に終了した。



第34図　平成18年度石田大原地区遺構配置図（1/80）

⑵ **遺構**（第34図）

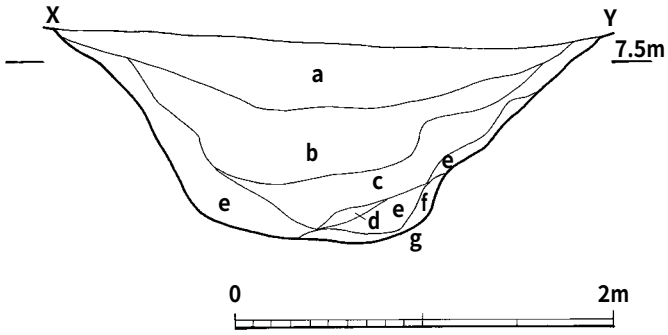
①溝

調査区の西側に，南北方向に延びる溝が検出された。平成15年度の調査の際に確認されていた遺構で，当時はＶ字形の溝状遺構と位置づけられている。

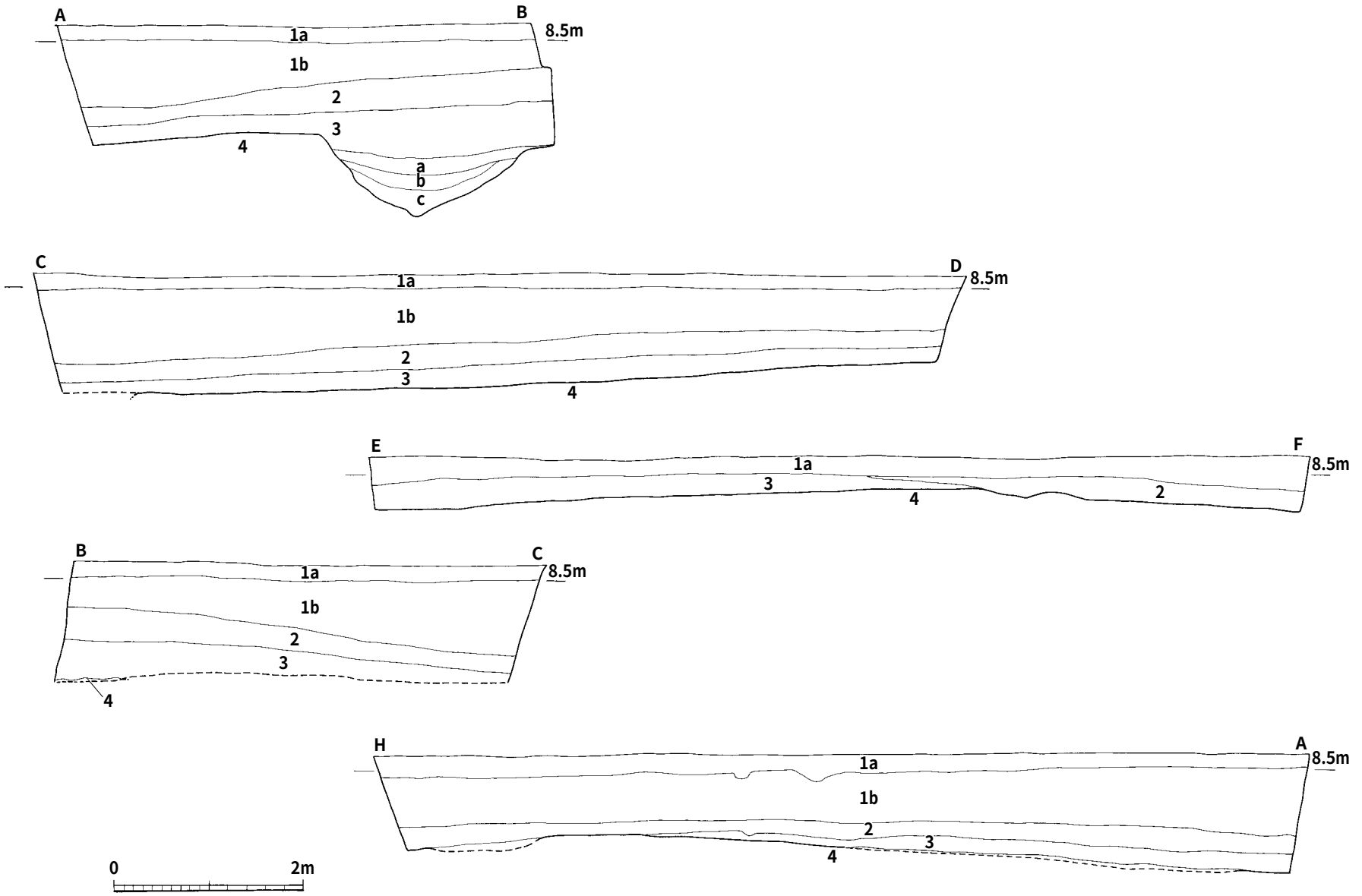
溝の幅は約３ｍで，遺構検出面からの深さは最深部で約1.1ｍを測る。溝の方向は主に南北方向であるが，調査区の南側隅で西側に極端に屈曲する。旧地形を考えると，北西に傾斜する面に斜行して延びる方向であり，深さは北に若干傾斜している。溝の断面については，形成段階での形状はＵ字形を呈しており，地山を掘り抜くようにして形成されている。ただ，溝の上面にいくにつれて大きく開き，西壁はほぼ直線的である。

層位は主に７層に分層される（第35図）。ａ層は暗褐色の硬くしまりのある粘土層であり，基本層序の３層下層とつながる層位と考えられる。ｂ層は黒褐色の粘質土層で，粘質土ではあるもののしまりがあまりなく炭化物が混在している。また，弥生時代後期の土器がわずかに出土するが，摩滅が多く器形や部位などは不明なものがほとんどである。ｃ層は褐色および暗褐色混在土であり，下層に行くにつれて粘性が強くなる。ｄ層は薄く斜めに堆積する明青灰色土であり，地山層とほぼ同色である。平成15年度の調査ではこの層位までの掘り下げにとどまっており，この時点での層位の断面を見ると，幅広のＶ字形を呈している。ｅ層は暗褐色の粘質土であり，しまりがない土質で部分的に地山土が混在する。下層に近いところからは，弥生時代中期末の袋状口縁壺の胴部などの遺物と石棺の部材などが出土している。ｆ層は明青灰色土であり，しまりがないことから地山からの風化土と思われる。ｇ層は明青灰色粘質土の地山層であり，溝はこの層を掘り抜いてつくられている。

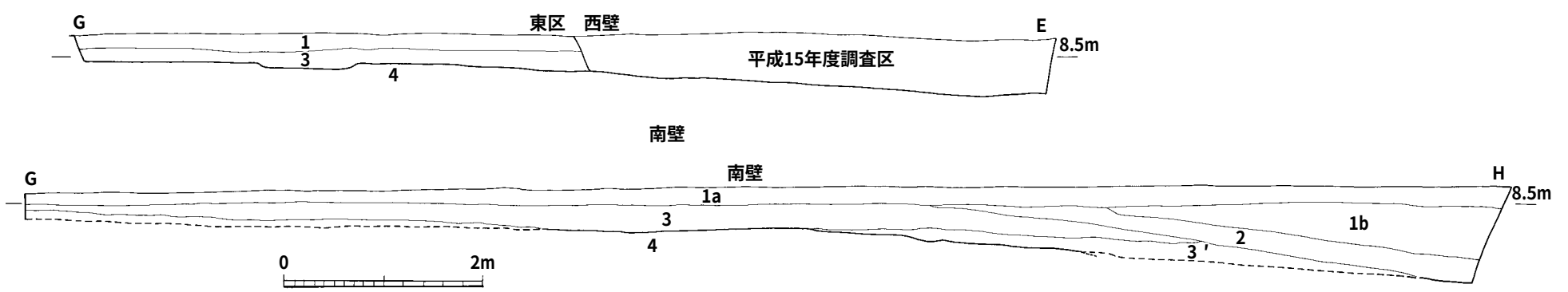
この溝の形状であるが，断面の形状と土層の堆積状況から判断すれば，溝の掘り直しがあったことが想定できる。最初に構築された溝は地山を丸く掘り抜きＵ字形を呈し，北側の低地部に向けて傾斜している。含まれる土器の年代から察すると弥生時代中期末以前につくられたものだろうか。その後，ｅ層が堆積した後に再度Ｖ字形の溝が掘削される。溝の西壁の直線的に開く部分はこのときに削られたものではないだろうか。これは西壁上の傾斜部にｄ層の地山土の風化層があることからも想像できる。掘り直しが行われた時期については定かではないが，最終的に埋没した時期は上層にある遺物の年代である弥生時代後期前半が考えられる。すなわち，この溝は非常に短期間に利用された溝であることが推測される。また，機能については，土層中にラミナ状の堆積は観察されないため，水利施設としては考えにくい。石棺材などが入り込んだ状態で出土していることから，墓域に付随する遺構であることは定かであり，石田大原墓域と大川墓域の区画を意識してつくられたとも考えられる。



第35図　溝土層図（1/40）



第36図　石田大原地区土層図①（調査区北壁・西壁）（1/60）



第37図　石田大原地区土層図②（調査区中央部・南壁）（1/60）

②柱穴（ピット状遺構）

調査区全域に約90あまりのピット状遺構が検出された。遺構の埋土としては，黒褐色・褐色・黄褐色に大きく分類され，径も50㎝程度から10㎝程度までと様々である。またさらに大きいピット状の遺構をいくつか見ることができたが，一部半裁したところ立ち上がりのプランが観察できず，明確な遺構とは考えにくい。埋土の色調としては，黒褐色が弥生時代後期以降，褐色が弥生時代中期ごろ，黄褐色は近世以降と考えられるが，遺物が全く出土しておらず，遺構の並びなども確認することができないため一概ではない。特に黒褐色の柱穴については，調査区の中央部に小ピットとして集中しており，不明な部分が多い。また，１・２層から中近世の陶磁器がわずかながら出土しており，遺構の時期としては，弥生時代というよりも中近世の時期と考えた方が自然であろう。

③不定形土壙

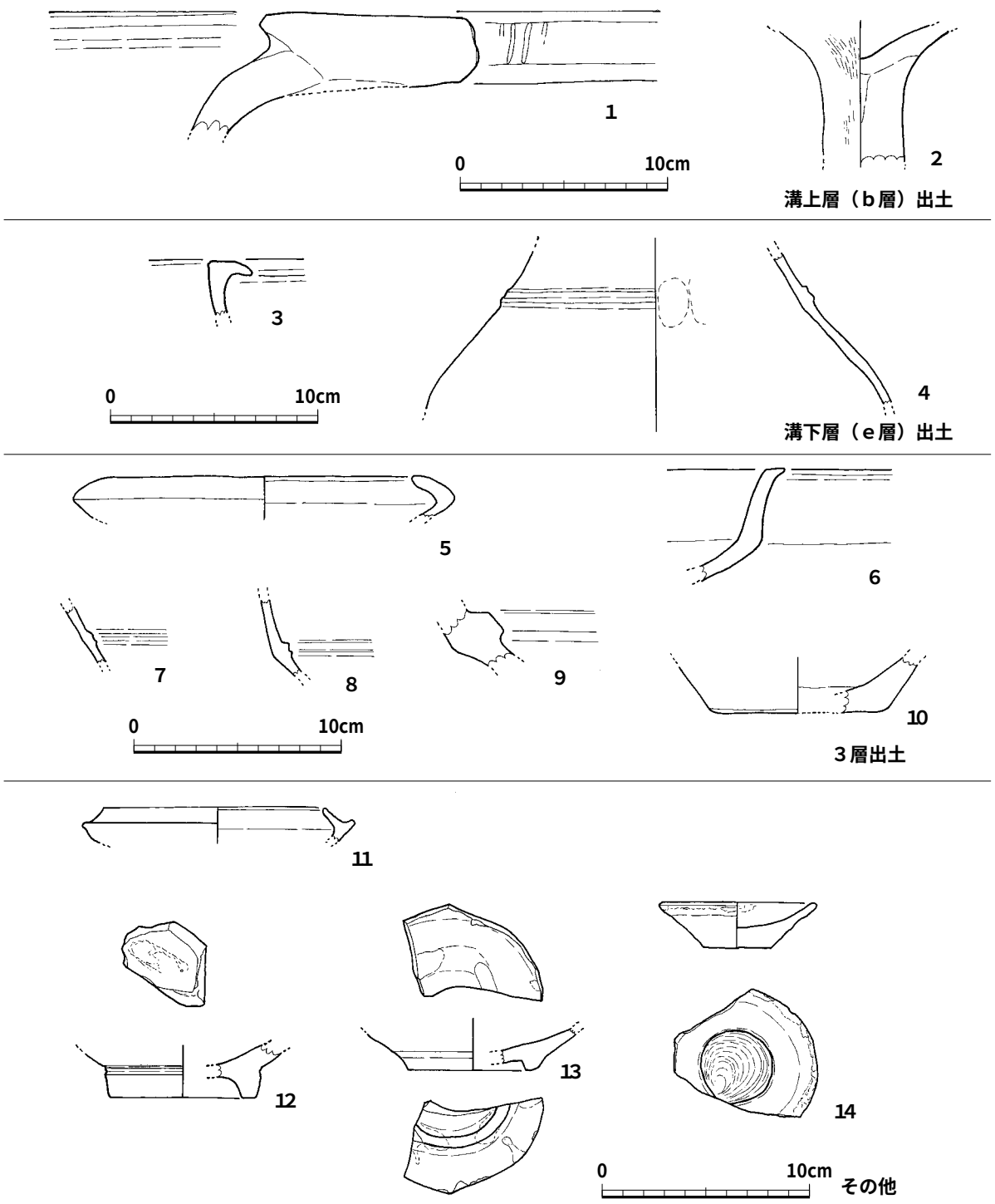
調査区のほぼ中央部に確認されたプランであり，耕作土を剥ぎ，３層の掘り下げを行った直後の比較的浅いところで検出された。南北約4.5m，東西約４mで，褐色と黒褐色の埋土が部分的に混じり合う色調である。但し，遺構のプランは非常に不明確であり西側にかけては途中で確認できないほどであった。土壙の中からは石鏃が２点出土したが，そのほかの遺物はほとんど見られず，時期は特定できない。遺構の形状やプランの不明確さなどから考えると木根などによる攪乱層か，もしくは明確なプランを持たないキャンプサイト的な遺構と考えられよう。

⑶ **遺物**（第38～40図）

遺物は土器444点，石器31点，青銅器１点，鉄製品１点，陶磁器19点，合計496点出土している。ほとんどの遺物が摩滅しており，器形や部位などは確定できなかった。また，鉄製品が１点出土しているが，旧耕作土からの出土であり，形状が不明であることから図化していない。また，古代から中近世の陶磁器については，特色のある遺物について図化している。

1～**10**までが弥生土器である。**1**・**2**は溝の上層（ｂ層）からの出土である。**1**は大型壺の口縁部であり，口唇部に浅い刻み目が施されている。内外面ともに風化が著しく一部剥落しており，器面の調整は確認できない。色調は黄橙色（7.5YR8/5）で，胎土には石英・長石・赤色土粒が観察される。甕棺の一部であろう。**2**は高坏の脚部であり，ほぼ中心で半裁している。全面に風化があるものの，外面の坏部から脚部への屈曲部分にかけて粗いハケ目痕が観察される。半裁していることから，坏部と脚部の成形方法が確認される。脚部はシボリにより円筒の形状をつくり，その上に坏を貼り付けてつないでいる。色調は外面が橙色（2.5YR6/6），内面が明褐色（2.5YR5/8）で，胎土には石英・長石・白色土粒が含まれる。時期は**1**が弥生時代中期前半ごろ，**2**が後期前半ごろと思われるが，遺構の時期を確定にできるほどの残り具合ではなく，若干の時期幅は考慮する必要があろう。

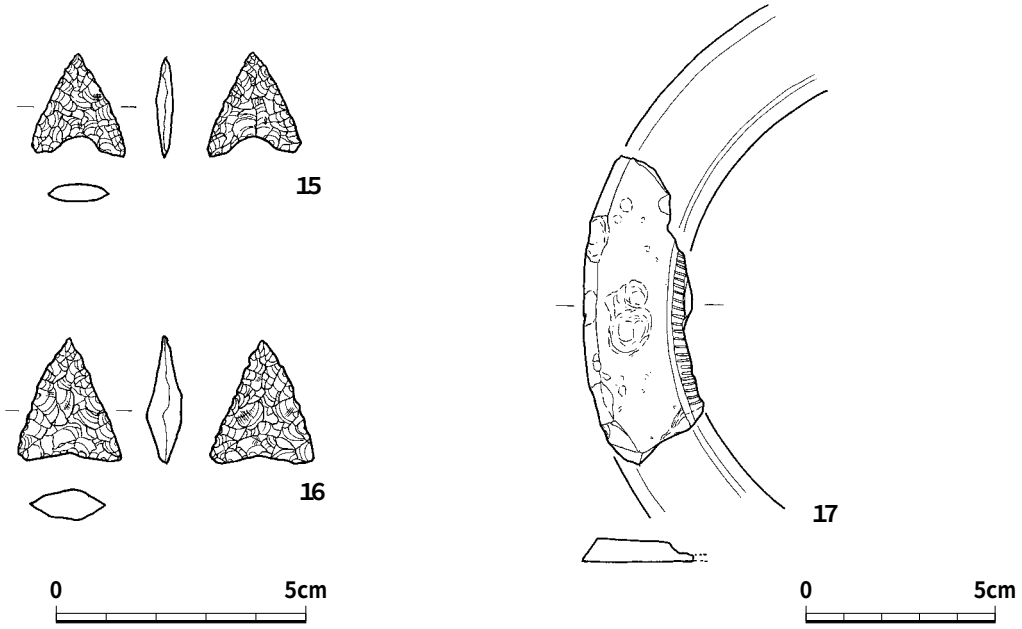
3・**4**は溝の下層（ｅ層）からの出土である。**3**は甕形土器の口縁部であり，口唇部の外側への張りだしが短く下に垂れ下がっている。口縁内外ともに横ナデの成形痕が観察され，比較的良好な焼成である。色調は内外ともに橙色（外7.5YR7/6，内5YR7/6）で，胎土は石英・長石が含まれる。**4**は



第38図　出土遺物①（1/3）

袋状口縁壺の肩部であり，浅いM字突帯を有する。内外面共に風化が顕著だが，一部に丹塗りが確認される。器壁は約５㎜で非常に薄く，突帯の内側部分には浅い指圧痕が見られる。色調は外面が橙色（5YR6/6），内面はにぶい黄橙色（10YR6/3）で，胎土に石英・長石の細粒と赤色土粒が観察される。**3**・**4**ともに弥生時代中期末に比定でき，溝の掘削時期の根拠となっている。

5～**10**は３層の下層から出土した土器を一括した。**5**は複合口縁壺の口縁部であり，袋状から複合口縁へ移行する過渡的な形状である。色調は橙色（外5YR6/6，内7.5YR6/6），石英・長石・赤色土



第39図　出土遺物②（2/3，1/2）

第40図　鏡復元図（1/2）〔平成15年度出土鏡と合成復元〕

粒を混入する。**6**は高坏の口縁部である。内外面共に風化が著しく，調整の痕跡は観察できない。形状として坏部はやや丸味があり，口縁にかけて「く」の字形に屈曲し口縁に至る。口縁は外反し，端部はさらに外へつまみ出され，上端は平坦に仕上げられている。色調は橙色（5YR6/6），胎土には粗い石英・長石が含まれる。**7**・**8**は低いM字突帯を有する袋状口縁壺肩部片，**9**は幅広のコの字突帯を有する大型壺の肩部片である。色調は**7**～**9**ともに橙色（**7**が7.5YR6/6，**8**が5YR6/6，**9**が5YR7/6）で，**7**は石英の細粒と赤色土粒，**8**は石英と赤色土粒・白色土粒，**9**は石英・長石・金雲母が観察される。**10**は壺の底部か。約９㎝の径を測り，内外面共にナデの痕跡を残す。色調は橙色（5YR6/6），石英・長石・金雲母を含む。**5**は後期前葉，**6**・**9**は後期中葉，**7**・**8**は中期末，**10**は後期前中葉ごろか。

11～**15**は古墳時代から近世にかけての特色のある遺物を図化した。調査区全体に柱穴（ピット状遺構）が広がるが，このような継続した時代の遺物が含まれることから，生活の場として遺構が形成されていたとも考えられる。**11**は須恵器の坏身の受け部であり，口径が約13㎝と推定される。受け部は長く内側に内向し，坏の深さが浅い形態である。陶邑Ⅱ形式第４ないし第５段階に比定でき，６世紀末から７世紀にかけての所産といえる。**13**は白濁（灰白5Y7/2）の釉薬がかかる白磁碗で，内外器面に貫入が見られる。高台は幅広の削りだし高台で，見込みには胎土目が残る。高台の付け根部分には２条の沈線があり，その挟まれた部分は山型の高まりをもつ。17世紀代高麗茶碗か。**13**は平戸系唐津焼の陶器皿である。灰赤色（10R5/2）の素地にやや濁りのある透明釉で施釉し，見込みに胎土目を残す。高台は回転ロクロによる削りだし成形の呉笥底で，16世紀末ごろか。**14**は内面施釉の小皿であり，左回転ロクロによる糸切底である。素焼きの皿に内面のみ灰赤色（7.5R4/2）の釉薬が施されている。口唇の内外にススの付着があることから灯明皿であろう。

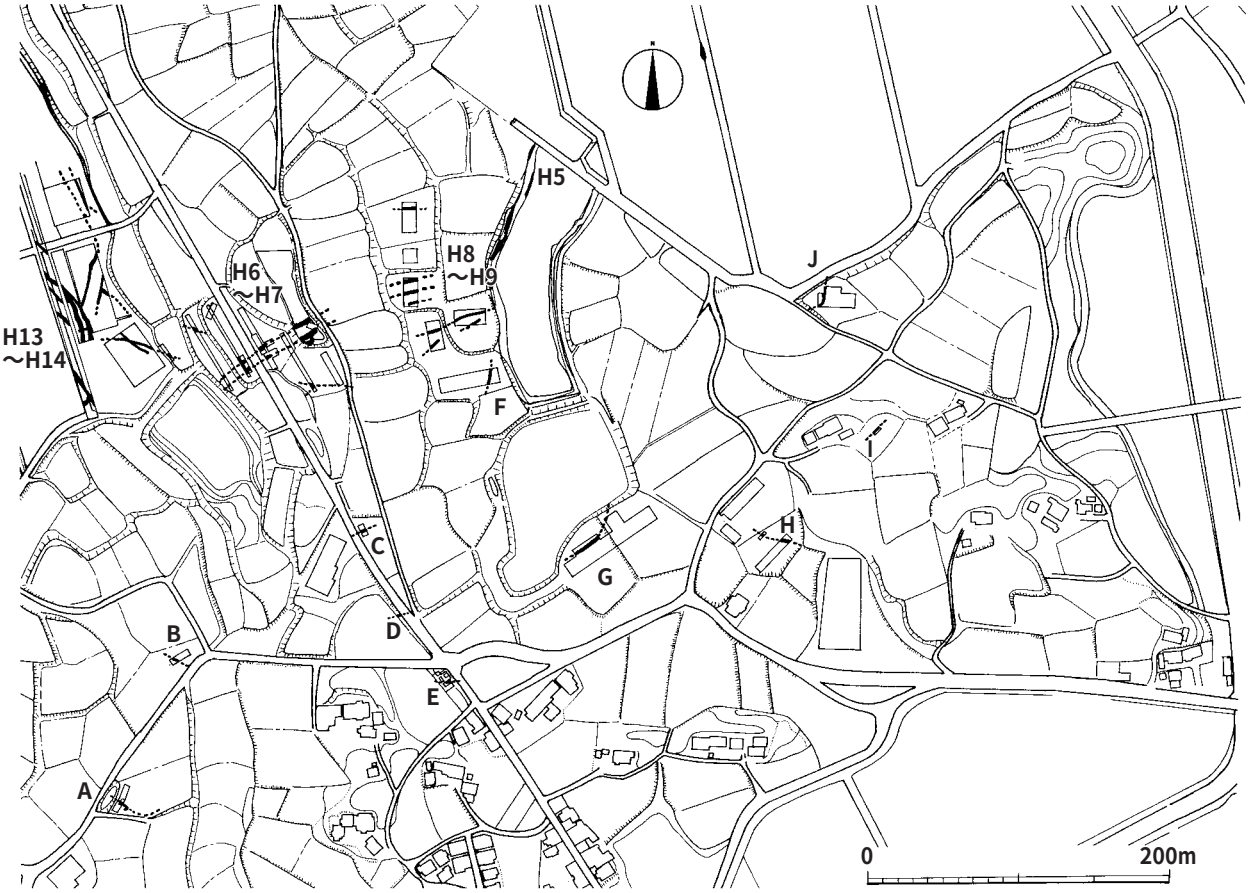
15・**16**は打製石鏃である。いずれも調査区中央の不明土壙からの出土である。両面共に細かい剥離調整が施され，長さに比べ幅が広く，脚の抉り部分が浅い形態である。**15**は長さ2.0㎝，幅1.9㎝，厚さ0.35㎝，**16**は長さ2.4㎝，幅2.0㎝，厚さ0.7㎝で，いずれも漆黒色の黒曜石が使用されている。

17は青銅鏡の鏡縁であり，内側に櫛目文を見ることができる。推定復元径約18.5㎝，最大厚約0.6㎝で，内外面共に漆黒色の光沢のある表面であり，錆化は比較的進んでいない。また，櫛目文の間に赤色顔料の付着が見られる。１層整地層（１ｂ）から出土しており，客土中の黒褐色土ブロック中に包蔵されていたものである。

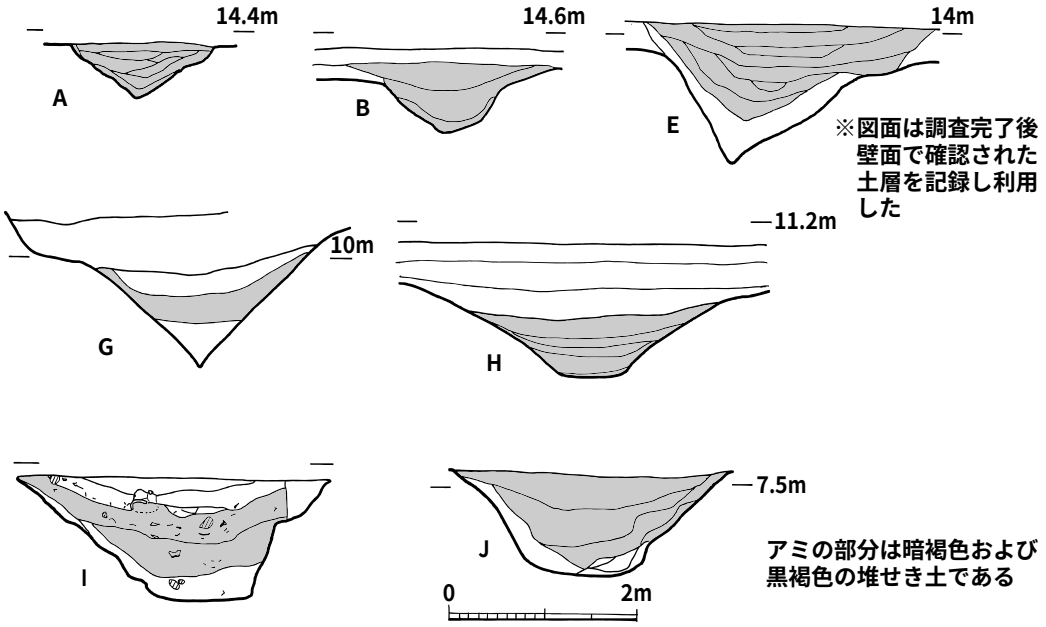
平成15年度に出土した青銅鏡と比較してみたところ，鏡縁の内側（外区の外側）に櫛目文，圏帯の径，鏡の表面の質・色調など共通している部分が多く同一個体と判断し，図面上で復元を行った（第40図）。鏡の特徴としては，四葉座の紐座で，その周辺に平頂素圏帯，中区は半円形の内行花文，更に櫛目文が入り，外区は斜格雷文帯と櫛目文である（註）。外区の斜格雷文帯には３重の渦文があり，その間の斜格雷文は４～５本の線で，簡略化がすすみ平行線化している。銘は四葉座の間に「長？」「宜」，内行花文の間に「如」が見られる。また，接合関係は不明であるが，小片で「山」が読みとれ，素圏帯の外側にあることから内行花文の間の銘と判断した。四葉座の銘は「長宜子孫」の可能性が非常に強い。また，「宜」と「如」は同じ位置にあり，文字の間に円文が入ることから４文字が予想され，「□如□□」となることが考えられる。類例として「生如山石」という銘を入れた例があり，そうすると「山」の銘も理解できる。

この鏡の出土状況は整地層からの出土であり，現位置に埋没していたことは断定できない。鏡が包蔵されていた客土中の黒褐色土ブロックは遺物包含層であり，鏡の腐食もそれほど進んでいなかったため，この包含層にパックされた状態で現在の調査区へ流れ込んだものであろう。調査区の東側の高台部には大川墓域があり，ここからの流れ込みが最も有力と考える。

（註）鏡の図文や名称については「古鏡」樋口隆康 新潮社 1980を参考にした。



第41図　丘陵南側環濠など検出位置図（1/5,000）



第42図　丘陵南側環濠など土層図（1/80）

記号	地区	遺構名	幅(m)	深さ(m)	形状	報告書
A	苣ノ木	溝(溝状遺構)	2.0	0.75	V字	長崎県文化財調査報告書第37集（1978）
						石田町文化財保護協会調査報告書第２集(1995)
B	池田大原	１号溝	2.0	0.8	V字	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集(1999)
C	原	溝	2.5	?	?	長崎県文化財調査報告書第130集（1996）
D	原					露頭，未報告
E	原ノ久保	溝状遺構	1.5	0.3	V字	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第32集(2006)
F	原	１号溝	2.0	0.2～0.3	非常に浅い	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集(1999)
G	石田大原	溝	4.0	2.0	V字	石田町文化財調査報告書第５集（2002）
H	大川	濠	3.3	1.0	逆台形	原の辻遺跡調査事務所調査報告書第22集(2006)
I	大川	溝状遺構	3.3	1.4	逆台形	長崎県文化財調査報告書第31集（1979）
J	石田大原	溝状遺構(溝)	3.0	1.1	U字・V字	石田町文化財調査報告書第８集（2004）
						本報告

第９表　丘陵南側検出環濠など一覧表（平成19年３月作成）

⑷ 小結　－丘陵南側の環濠などの検出状況について－

平成18年度の石田大原地区の調査では，溝の時期・性格とその周辺の状況が確認された。

その結果，溝は当初，地山を掘り下げてU字形につくられたが，その後埋没し，掘り直しが行われて幅広のV字形を呈する形態となったことが考えられる。石棺材や甕棺片，祭祀土器などが埋土に含まれることから墓域と関連した溝には間違いないだろう。また，溝の周辺には墓地は隣接していないことも明確となった。溝が最初に掘削された時期は，弥生時代中期末以前，再度掘り直されて埋没した時期が後期前半から中葉ごろと推測され，極めて短期間に利用された遺構といえる。

丘陵南側地域は，今まで幾度となく調査が行われているが，私有地が多く十分な調査が行われていない。狭い範囲のトレンチ調査の中で環濠や溝が散在的に確認されているが，そのつながりについては未知的な要素が強いようである。第41図は丘陵南側地域の環濠などの検出場所を地図に落としたものである。今後の調査計画の参考になればと思い集約してみた。

平成13～14年度の県道および国庫補助事業による八反地区の調査，平成６～９年度の原地区の範囲確認調査，平成５年度の原池周辺の調査等により，祭儀場跡近辺とその西側低地部の状況は明らかとなっている。ただ，その南側にのびる環濠がいくつか見られ，更に外側をめぐる濠が存在することは間違いがない。

Aは現在までのところ最も外側をめぐる溝（濠）と考えられ，断面は幅広のV字形である。この溝は南側で大きく東に向くことから，**E**とのつながりが予想される。ただ**E**の遺構は地山まで掘り込む鋭角なV字であり，明確な違いはある。また，**B**につながる溝としては**D**・**G**が予想され，**D**は未調査であるが，**G**とは幅広のV字であり，層位の堆積が均一的であるという点で共通するようである。**C**は床面まで掘り下げていないことから断面の形態は分からないが，方向としては**F**に向く。**F**は深さ20㎝程度の溝であるため環濠とまでは言い切れない。**H**と**I**については近距離であるが方向が異なる。ただ，断面が逆台形という点では共通点があり，湾曲しつながる可能性も考えられる。**J**はV字の時期の形態としては幅広という点で**G**と似る。つまり，池田大原地区から**B**－**D**－**G**－**J**とつながる環濠が予想されよう。

今年度の末におこなった深江池の西側の台地部での県道工事に係る調査区では，２条の溝が確認されており新たな成果が得られつつある。丘陵南側の環濠確認調査は原の辻遺跡の南の生活域を探る上で重要な調査と考える。綿密な計画を元に，地元の地権者の方々のご協力を得ながら調査を継続していければと考えている。

【参考・引用文献】

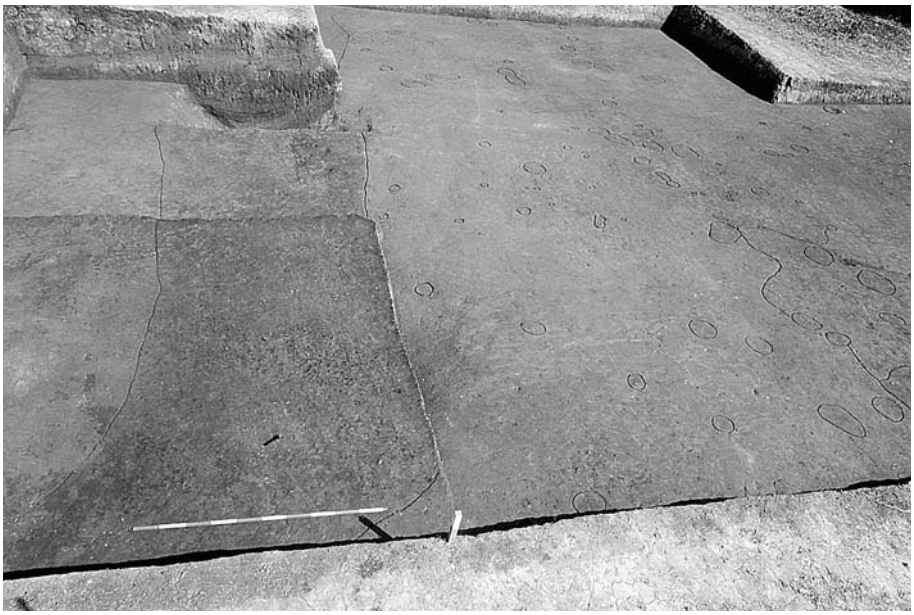
福田一志ほか「原の辻遺跡総集編Ⅰ」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会 2005
松見裕二「特別史跡原の辻遺跡」壱岐市文化財調査報告書第２集 長崎県壱岐市教育委員会 2005
宮崎貴夫「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集 長崎県教育委員会 1999
藤田和裕「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書第31集 長崎県教育委員会 1977
河合雄吉「原の辻遺跡」石田町文化財調査報告書第８集 長崎県石田町教育委員会 2004

石田大原地区調査区遠景

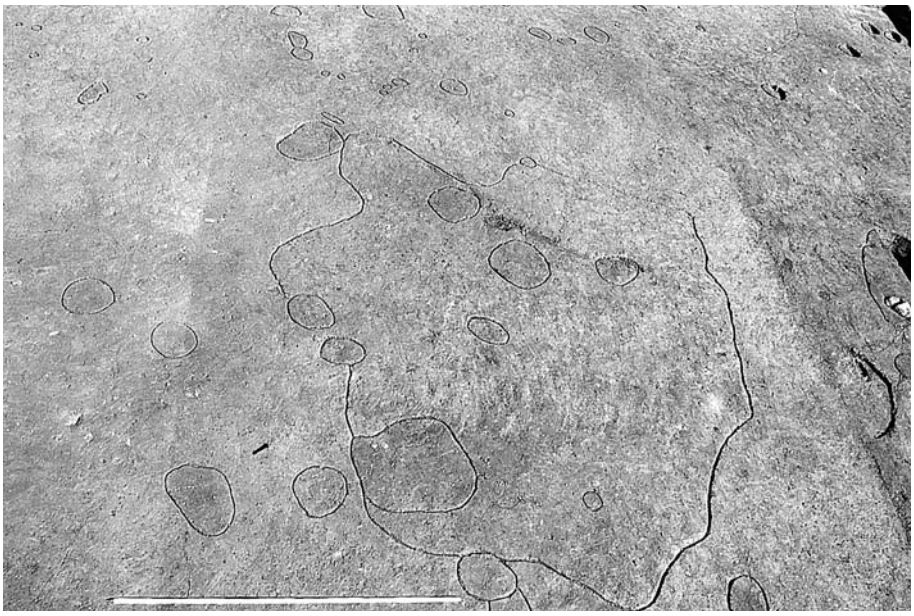
北壁土層堆積状況①

北壁土層堆積状況②

図版５



遺構検出状況
〔溝・柱穴など〕

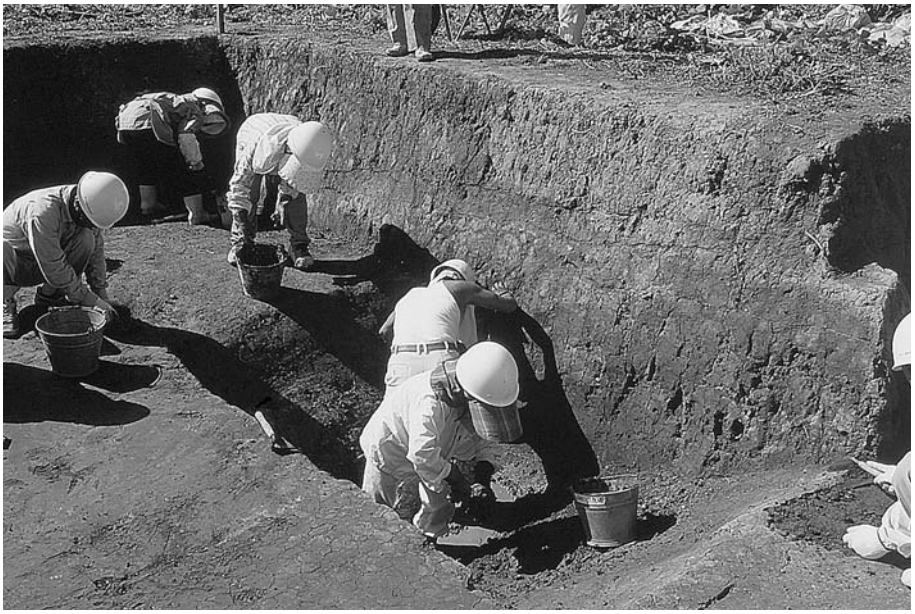


不定形土坑検出状況

溝土層堆積状況

鏡出土状況

内行花文鏡（平成15年度出土鏡と合成）



調査風景

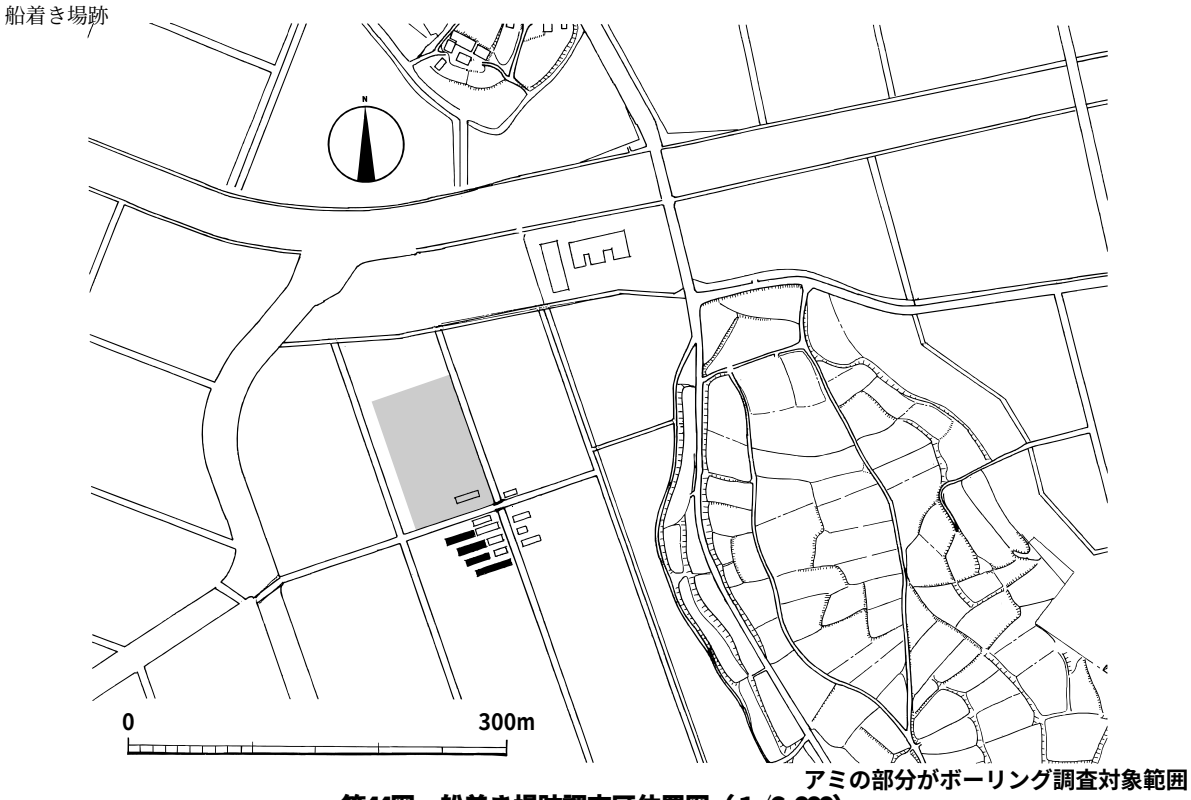
３．船着き場跡（不條地区）の調査

⑴　調査概要

船着き場跡は，原の辻丘陵部西側の低地部に位置し，標高約6.5mの圃場の中に立地している（第43図）。遺跡の北側を東西方向に流れる幡鉾川からは約220m南側にあり，西側を流れる池田川からは約200m東側に位置する。現在は旧地形がほとんど確認できないが，古くから「深江田原」とよばれる広大な水田地帯であり，水利的には非常に恵まれた地域と言える。それを裏付けるかのごとく，調査区の土層には，弥生時代以降，連綿と続く水田層が確認され，現代にまで至っている。

船着き場跡の調査は，平成８年度の幡鉾川流域総合整備計画に伴う農道および排水路工事に係る緊急発掘調査に端を発する（西1998）。調査は東西にのびる農道幅5.0m，南北にのびる水路幅1.5mの調査区が設定され，農道部分から２ヶ所の堤防状の石組遺構（東突堤・西突堤），水路部分から２ヶ所の斜面に築かれた石組遺構（北石組・南石組）が検出された（第45図）。当時，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長工楽善通先生に現地での指導をうけ，この遺構が「敷葉・敷粗朶工法」という高度な土木技術を駆使し構築されていることが明らかとなり，「船着き場跡」と位

〔外枠が遺跡範囲　アミが特別史跡指定範囲〕（平成18年４月現在）
第43図　船着き場跡位置図（１/10,000）



第44図　船着き場跡調査区位置図（1/6,000）

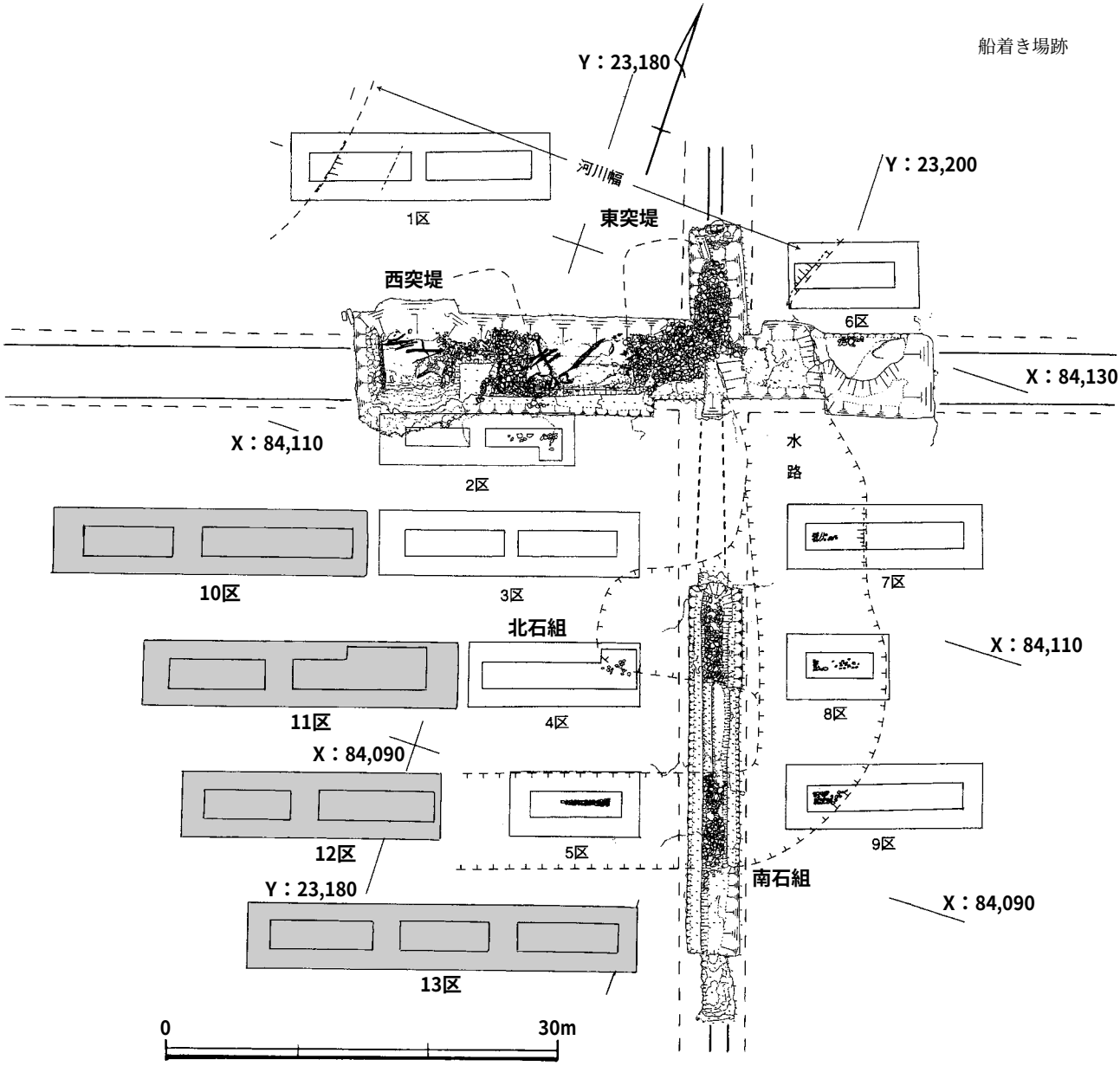
置づけられた。その後，この遺構は，日本最古の船着き場跡として日本全国はもとより，東アジア地域の研究者からも注目されるようになり，原の辻遺跡の最も重要な遺構の一つとして周知されている。

平成17年度，原の辻遺跡の本格的な史跡整備が着手され，（仮称）一支国博物館・埋蔵文化財センター構想が具体化していく中で，原の辻遺跡の主要な遺構である「船着き場跡」に再び眼が向けられるようになり，その全体像の解明のために調査をおこなうこととなった（福田・寺田 2006）。ただ前述したごとく，周辺は県内２番目広さをもつ水田地帯であり，総合整備に伴う圃場整備が完了した直後であることなどから調査の開始は容易ではなかったものの，地元関係者の方々のご理解，ご協力をいただきながら，調査を再開することとなった。

平成17年度の調査は，平成８年度に確認された石組遺構の周辺の４枚の圃場に９ヶ所の調査区（１区から９区までのトレンチ）を設定しおこなわれた。調査区がすべて東西向きに設置されているのは，調査区間に暗渠が埋設されているためである。また上層は，圃場整備工事の際に遺構の保護のために約１ｍのかさ上げが行われており，基本的に幅５ｍの調査区を設定したものの遺構が確認される高さまではかなり深くなることが予想され，現耕作土と造成土は重機による掘り下げを行い，更にその中に調査区を設定し，人力で掘り下げを実施した（第45図）。

その結果，１区と６区に約35mの船着き場がつくられた河川の幅が確認され，２区に西突堤の石組の一部が検出された。また，７区から８区にかけて水路が確認され，９区から南石組まで続く石敷の水路とつながることが予想されたため，船着き場が島状の地形になることが明らかとなった。３区では浅い土壙状の落ち込みが土層より確認され，中から赤色顔料が塗布された鋳造鉄斧が出土している。

平成18年度は船着き場の東側を中心に調査区を設定し，船着き場跡の形状と西側を流れる河川の状



第45図　船着き場跡調査区位置図（1/500）〔アミが平成18年度調査区〕

況を確認することを目的として，昨年度の調査区にあわせて４ヶ所の横長の調査区を設定（10区から13区のトレンチ）し，掘り下げを実施した。また，幡鉾川から船着き場に続く河川の流路を探るために，船着き場の北側圃場部を対象にボーリング調査を実施した。（第44図）

今年度の調査では，11区と13区で石組遺構が検出され，10区と11区に西側を流れる河川跡，12区と13区に南西側に新たな河川跡が確認された。

調査は，早期米の収穫が終了した平成18年９月26日から開始し，現状復旧とボーリング調査まで含めて12月16日に終了した。今年度の調査面積は約490㎡である。

【参考文献】

長崎県教育委員会「原の辻遺跡・鶴田遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第４集 1998
長崎県教育委員会「原の辻遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第33集 2006

⑵ 層　序

今年度の調査区は，すべて河川の堆積層が確認されており，各調査区とのつながりは確認できる。細分するとかなりの層位に分層できるが，基本層序として大きく11の層位でまとめておきたい。なお（　）内の色調は土色帳に基づく色名であり，目視による観察と若干異なる場合もあることから明示した。あわせて平成17年度の層位との関連もまとめておく。前述したように上層は現耕作土と造成土であり重機による掘削を行った。図面はその下の層位からの記録であり，現地表面からではない。

Ⅰ層　明灰色粘質土（灰色 N6/1），鉄分を多く含み白い斑点状の粘土の文様が確認される。

Ⅱ層　暗灰色粘質土（上層灰色 N4/，下層青灰色5B5/1），上層には鉄分が多く含まれ，下層は掘削した直後は灰色だが，しばらくすると浅黄色に変色する。中世の溝はこの層からの落ち込みであり，最下層には砂質を含み，獣歯などが出土している。ほぼ平坦な堆積で水田層と思われる。

Ⅲ層　灰白色粘質土（青灰色5B5/1），硬くしまりのある粘質土で，下層では黒みを帯びてⅣ層に至る。

Ⅳ層　暗灰色粘質土（暗灰色 N3/1），硬くしまりのある粘質土で様々な色調の粘土が混在する層である。Ⅴ層の堆積土を造成し水田化するために持ち込まれた層と考えられ，Ⅴ層との境はかなりうねりが観察される。Ⅰ層からⅣ層までが平成17年度**3層**である。

Ⅴ層　黒灰色腐植混じり粘質土（灰色7.5Y5/1），締まりのない腐植土層で，上層は褐色でラミナは見られないが，下層に行くにつれてラミナが顕著になり植物遺体が幾層にも堆積する。また間層に炭化物層や木質が見られ，流れというよりも澱みに堆積した層という感がある。この層は原の辻遺跡の低地部のほぼ全域に確認されており，弥生時代終末期から古墳時代前期に堆積した層と考えられ，遺構検出の鍵層となっている。平成17年度**4層**である。

Ⅵ層　明灰色腐植混じり粘質土（灰色7.5Y6/1），限られた範囲でのみ確認される層であるが，Ⅶ層とほぼ同色であるが層の中にラミナ状の堆積がみられ，Ⅶ層が浸食され堆積した層と考える。

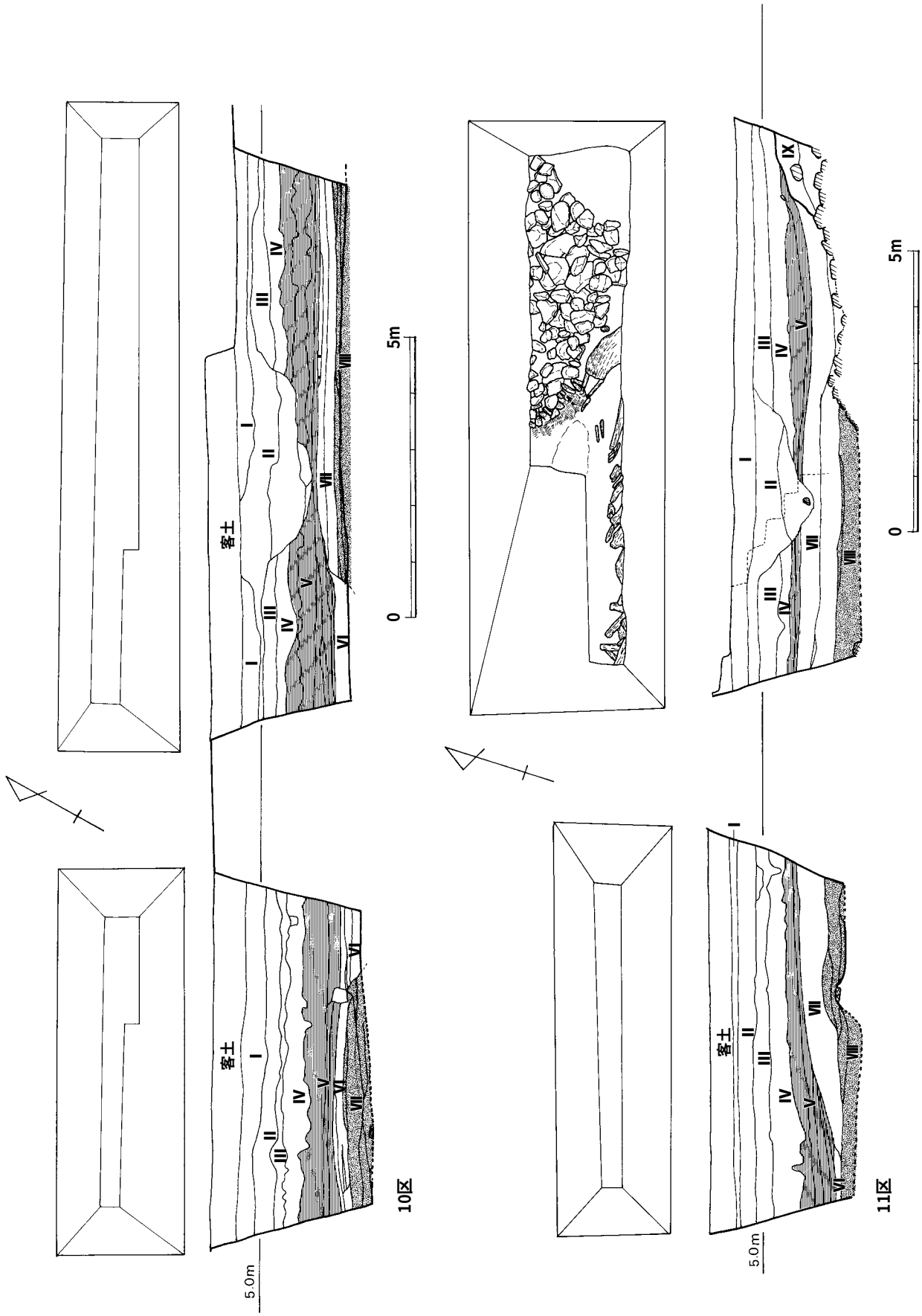
Ⅶ層　明灰色粘質土（灰色 N6/），きめの細かい粘土層で，上面はほとんど平坦な面をつくり出しており，特に船着き場の西側に厚く堆積している。下層はやや青みを帯びて砂質を含んでいる。船着き場跡の石組の上に堆積していることから，船着き場が廃絶した後に堆積した層と考える。平成17年度**5層**である。

Ⅷ層　青灰色砂層（オリーブ灰2.5GY5/1），河川の河床部に堆積する層で，厚い部分では粘土や腐植を間に含む。船着き場が存在した頃の河川の堆積層であり，10区や11区の西側の調査区では弥生土器が出土している。平成17年度**7層**である。

Ⅸ層　明灰色粘質土（灰白5Y6/1），13区に確認された船着き場跡の裾部の盛り土であり，上面はやや黄色味があり，下層は軟質の灰白色や青灰色の粘土が混在して堆積する。

Ⅹ層　黄灰色粘質土（にぶい黄2.5Y6/3），かたくしまりのある粘土で，鉄分の影響で黄色味がある。船着き場がつくられた弥生時代中期の遺構検出面である。Ⅷ～Ⅹ層まではほぼ同時期と考える。

Ⅺ層　青灰色粘質土（青灰色10BG6/1），弥生時代中期以前の地山層であり，13区の西側の調査区で確認された。Ⅹ層との間に漆黒色腐植土層を挟み，中期以前の河川の存在が明らかとなった。



第46図　10区・11区平面図・土層図（1/100）

⑶ 各調査区の状況

今年度調査を実施したのは10区から13区であり，10区から12区までは西側と東側，13区は西側・中央・東側と更に調査区を設定している。

①10区（第46図上）

10区は船着き場跡の西側に位置し，３区の西側延長上に設定した。ここは船着き場が取りつけられた河川と船着き場本体との境が予想された調査区である。調査区は全体が24m×５mで，西側が７m×2.5m，東側が11.5m×2.5mである。

成果としては，東西両調査区に船着き場がつくられた河川跡が確認され，船着き場跡の西側の縁辺部は確認できなかった。河川の層位を観察すると，Ⅴ層（上のアミかけ部分）の堆積が非常に厚く，その下にはⅦ層の明灰色の粘土層がほぼ平坦に堆積している。また，その下にはⅧ層の砂の堆積があった（下のアミかけ部分）。この砂層の中に弥生土器や自然木などがわずかに含まれており，船着き場が築造され，使われた時期を示すものと考える。最下層の下，標高約3.2mでは岩盤が確認されており，弥生時代の河床面がこの深さまで至っていたことがわかる。

Ⅶ層の堆積については，ほとんど平坦で，その上面に杭状の木質が一部確認されていることから，人為的な造成が考えられるが，肉眼での観察では限度があり，科学分析の成果を期待したい。東側調査区のほぼ中央にⅡ層からの落ち込みが確認され，岸に杭が残ることから溝と考えられる。その床には牛馬と思われる獣歯や土師器，緑釉陶器が出土している。また，東西両調査区にまたがる位置にⅤ層下に河川跡が確認されている。

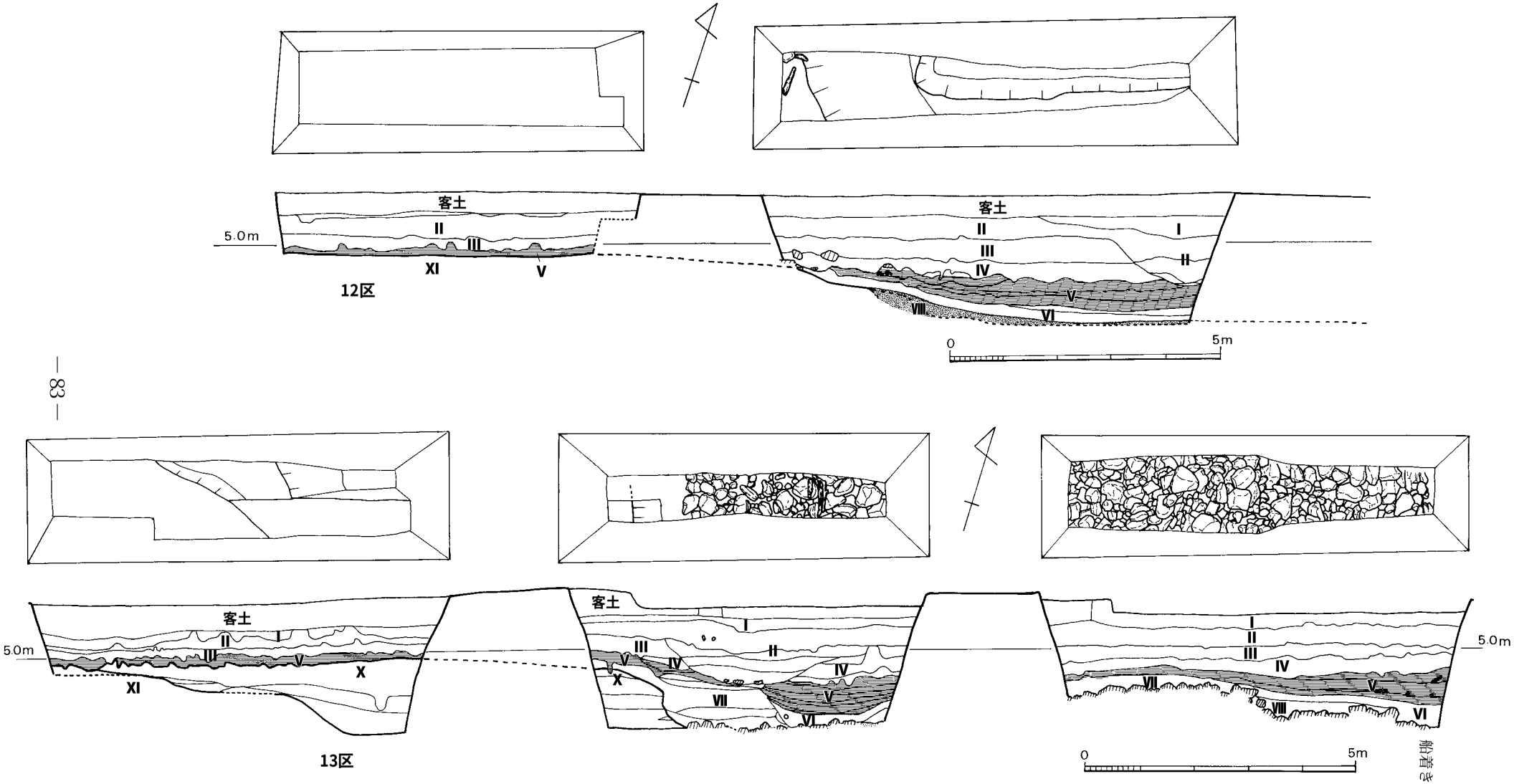
河川内の基本層序の設定は東側調査区の層位を基準とした。

②11区（第46図下）

11区は船着き場跡の西側に位置し，４区の西側延長上に設定した。10区同様に船着き場西側の河川と船着き場の西端が予想された調査区である。調査区は全体が24m×５mで，西側が７m×2.5m，東側が10.5m×3.5mである。

東側調査区から，船着き場西側部分の河川と接する位置に石組遺構が確認された。石組は西から東に徐々に高くなる状況であり，東側の最も高い部分で標高約4.1m，川に接するところで約3.3mを測る。範囲は調査区の北側で約５m，南側で約１mの範囲で築かれており，平面形は半円形を呈している。石組西側の河川と接する部分は石積みが倒壊しないように杭で押さえられており，杭自体も揺らがないように横木を据え，樹皮やワラ状の草束を巻いて固定している。石組の間の粘土層を一部掘り下げたが敷葉・敷粗朶の状況を見ることはできなかった。石組に利用されている礫は径50㎝ほどの人頭大の角のとれた玄武岩が主であり，一部花崗岩の円礫も含まれている。石組の西側の部分は石の積み上げがあるものの，天場に近づくにつれ斜面を石で覆った状況であり，極めて限られた範囲に築かれたものと推測される。また，天場の部分には盛り土による造成が行われており（Ⅸ層），船着き場の天場の高さは標高約4.8mである。

東側調査区の西側から西側調査区にかけては河川跡が確認され，石組遺構に近い部分には木材などが多数出土している。木材の出土状況をみると南東から北西向きの流路が推測され，これは石組の西



第47図　12区・13区平面図・土層図（1/100）

側側縁部の向きと一致する。河川の堆積状況は10区とほぼ同様であり，Ⅶ層の明灰色粘質土は厚く堆積し石組の上にまでおよんでいる。すなわちこのⅦ層は船着き場が廃絶した後に堆積した層と考えられ，船着き場廃絶の時期を探る上で鍵となる層である。また，東側調査区にⅡ層からの溝の落ち込みと西側調査区のⅤ層下に河川跡が，10区と同じく確認されている。

③**12区**（第47図上）

12区は船着き場跡の南西にあたる調査区で，５区の西側延長部分に設定した。ここは５区で確認された南石組（南側の石敷きの水路）の西側が予想される調査区であった。調査区は全体が20m×５m，西側が７m×2.5m，東側は９m×2.5mである。

調査の結果，東側調査区の西側部分に東側に傾斜する河川の落ち込みが検出され，西側調査区には平場が確認された。船着き場跡から12区で確認された川岸との幅を推定した場合，河幅が約12mであり，船着き場跡の西側の河川にくらべ狭く，別の河川であることが予想される。河床には青灰色の砂が厚く堆積しており（Ⅷ層），礫はほとんど確認できなかった。また，東側調査区の北東側に黒灰色腐植土（Ⅴ層）が深く堆積しており，澱み状の窪みを形成している。

西側調査区の平場は標高約4.8mであり，上に黒灰色の粘土層が薄く堆積し，下層にかけての踏み込み跡が確認されている。また，東側調査区の東隅にⅡ層からの落ち込みが見られた。

④**13区**（第47図下）

13区は船着き場跡の南側に位置し，平成17年の成果では南石組の南側に広がる平場が予想された調査区であった。調査区は全体が30m×５m，西側が８m×2.5m，中央が７m×2.5m，東側が８m×2.5mである。

調査の結果，東側と中央調査区に人頭大の礫の堆積があり，東側調査区の礫に階段状の石積みが見られたことから石組遺構と位置づけた。東に向かい３段の段差を形成しており，石組の最も高い部分は約4.4m，中段が約3.9m，下段が約3.6mで，中段から上段にかけてはほぼ真っ直ぐに石積みが行われている。上段は人頭大の礫を無造作に積み上げ，中段は上面を平坦にそろえたような状況である。下段については礫と礫の間に若干隙間があり，間に砂や小礫が挟まれることから河床面ではいだろうか。礫は主に玄武岩が使用され，一部花崗岩の円礫が見られる。石組遺構の上にはⅦ層明灰色粘質土の堆積があり，遺構の時期としては船着き場跡とほぼ同時期に構築されたものと推測する。

東側調査区で確認された礫は西側へ傾き，中央調査区でも見られる。礫の高さは約3.6mであり，東側調査区の下段部とほぼ同じ高さである。礫の在り方も礫の間に隙間があり砂や小礫が挟まれるなどと共通しており，同じく河床面と思われる。また中央調査区の西側には河川の立ち上がりが見られた。河床に近い部分は抉れており，水の流れがあったことを窺わせる。礫はこの立ち上がりの際まで広がっており，この河川に伴うものと断定できる。つまり，東側調査区に検出された石組遺構は河川のほぼ中央に築かれた遺構であり，場合によっては水没していたことも考えられる。丁度この石組の北側は南石組（石敷きの水路）と船着き場の南西側を流れる河川との間にあたることから，水路に水を送るための導水施設か，河の水の流れを和らげるための堰などの機能が考えられている。遺構はさらに南側まで続くことが予想され，継続的な調査が必要となった。

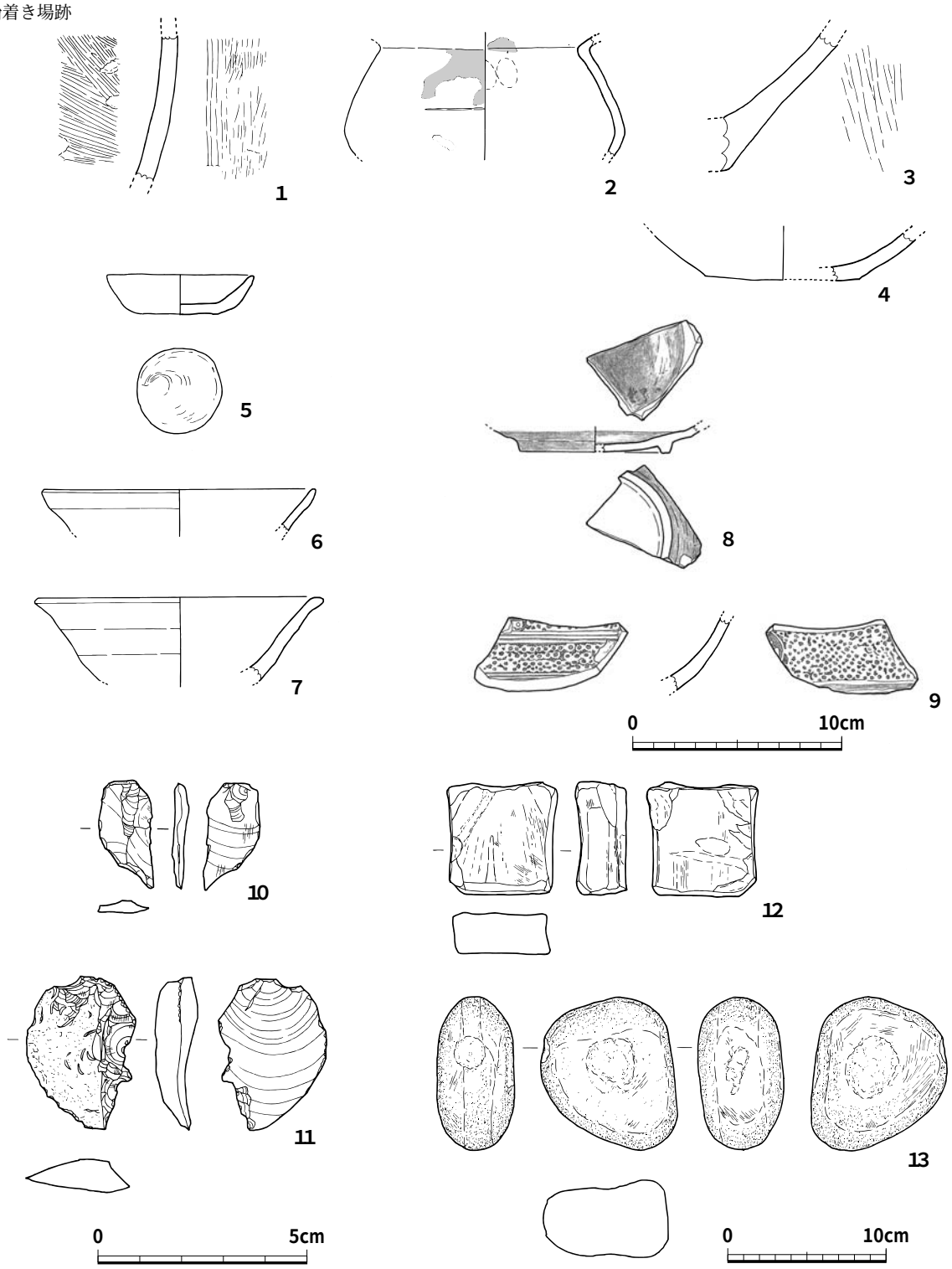
西側調査区は弥生時代の平場の部分であり，標高約4.8mで，中央調査区の河川の立ち上がりにつながっている。また，下層から東へ傾斜する弥生時代以前の河川の立ち上がりが確認された。これは中央調査区の西側へつながっており，Ⅹ層とⅪ層の間に漆黒色の腐植土層の堆積が確認されている。この地域は以前から科学分析・年代測定などで縄文時代の土層が確認されており，それに伴う河川の可能性もある。

⑷ **出土遺物**（第48図）

平成18年度の船着き場跡から遺物した遺物は総点数30点であり，土器・陶磁器が20点，石器が５点，獣骨・獣歯が５点である。船着き場跡の時期を確定するためには非常に少なく，遺物からの検証は非常に厳しいと思われるが，時期や部位がわかるものに限り報告する。また，古代から中世にかけての遺物も溝の中から出土しており，溝の時期が推定されることから合わせて図化した。

1～**4**までが船着き場跡周辺出土の弥生土器である。**1**は甕の胴部であり，内外共に刷毛目調整痕が顕著であり，外面は縦方向の粗い刷毛目，内面は短い斜め方向の刷毛目が観察される。５点の同一個体が出土しているがいずれも胴部であり，時期は限定できない。ただ，内面に明瞭な刷毛目が見られることから後期の様相が強い。11区西側調査区Ⅷ層の河川跡河床面からの出土である。焼成は極めて良好であり，色調は内外面共ににぶい黄橙色（10YR7/2）で，石英・長石を胎土に含む。**2**は無頸壺の胴部である。10区東側調査区Ⅷ層からの出土である。口唇部と底部が欠損するが，器面外側に丹塗りの痕跡が残る。内面の口縁下に浅い指圧痕が見られる。色調は外面が灰オリーブ（5Y6/2），内面が灰黄褐色（10YR6/2）で，胎土に石英・長石・角閃石・金雲母の細粒が含まれる。**3**は壺底部で，10区東側調査区Ⅷ層からの出土である。底部から胴部にかけては若干内湾しながら立ち上がり大きく開く形態で，外面にヘラ状の工具によるナデ調整が観察できる。内面はナデ調整で部分的に剥落している。色調は外面灰オリーブ（5Y4/2），灰（10Y5/1）で，胎土に石英・長石と，角閃石をわずかに含む。**4**も壺底部で，底径12.3㎝が推定される。11区東側調査区Ⅶ層明灰色粘質土層下層から出土した。内外面共にナデ調整が施され，外側は一部風化が見られる。底部から胴部にかけては丸く膨らみを持ちながら立ち上がる形態である。色調は灰黄褐色（10YR6/2）で，胎土に石英・長石・角閃石を含む。

5～**9**は，古代から中世にかけての出土遺物である。**5**は土師器の小皿であり，口径７㎝，底径3.８㎝，器高1.9㎝を測り，径にくらべ器高が高い形態である。胴部は丸く，口唇は内向し端部は丸くおさめられている。底部には左回転ロクロによる糸切り痕を残している。14世紀後半ごろと思われる（註１）。色調は内外共に橙色（5YR6/8）で，胎土は石英・長石・赤色土粒を多く含む。13区Ⅱ層出土。**6**は土師器碗か坏の口縁部で，口径が約13㎝と推定できる。ほぼ直線的に開口し，口縁部がやや玉縁状に厚みを持ち，その下には浅い稜線が観察される。器面には内外面共に回転横ナデの痕跡がある。色調はにぶい橙（7.5YR6/4）で，胎土は極めて細かい砂粒を含む。10区東側調査区Ⅱ層溝下層から出土した。**7**は土師器碗の口縁部と思われる。推定の口径が約13.7㎝である。底部から口縁部にかけてはやや膨らみを持ちながら立ち上がり，口唇で外側に大きく開く形態であり，器壁は厚く，外面にはロクロ成形による稜線が２条確認される。全体的に摩滅しているが，焼成は良く，色調は内外共に



第48図　船着き場跡および周辺出土遺物（1/3，2/3，1/4）

にぶい黄橙色（10YR6/4）で，胎土には石英・赤色土粒ほか砂粒が混在する。10区東側調査区Ⅱ層溝下層から出土した。**8**は緑釉陶器であり，碗か皿の底部である。底径は約7.1㎝。低い削りだし高台であり，高台の断面は直立するコの字形で，胴部にかけては丸く張りだす形態が予想される。釉薬は灰色（N4/）を呈し，見込みには蛇の目状の釉剥ぎと一部に釉だまりがあり，畳付と高台内面は無釉である。非常に良好な焼成で，胎土の色調は灰色（5Y6/1）で，微細な砂粒が含まれる。遺物の時期（註２）としては，削り出しの輪高台の時期と考えると９世紀後半ごろのものか。10区東側調査区Ⅱ

層溝下層から出土した。**9**は三島手の粉青沙器象嵌花文碗である。外面は胴部中央に円文とその両側に菊花形の印花，その下には圏文があり，一方内面は４条の圏文帯で中位と見込み付近の区画を行い，その間には菊花形の印花が隙間なく施されている。印花の文様の中には白土が充填され，その上からは透明の釉薬が薄く施されている。文様の形態としては，慶尚南道タイプであり（註３），1420～1440年代と考えられる。この年代は，原の辻遺跡の北西側に位置する志佐氏の居城である覩城で朝鮮貿易を盛んに行っていた時期と重なり，幡鉾川を利用した交易の中で紛れ込んだものと考えられる。12区東側調査区Ⅰ層からの出土である。

10・**11**は加工痕のある剥片である。**10**は暗灰色黒曜石を素材とするもので，縦長剥片を途中から斜めに裁断し，その割れ口を調整剥離している。ナイフ形石器もしくは台形石器の未製品か。長さ3.4㎝，幅1.7㎝，厚さ0.5㎝を測る。**11**は漆黒色黒曜石を利用した剥片で，原石は表皮面に爪形痕のある円礫であることから松浦市牟田産と推測される。調整剥離により直線的な刃部を形成しようとしているが，中途で終了しており製品としては機能しない。長さ4.8㎝，幅3.4㎝，厚さ1.3㎝を測る。10・11共に10区東側調査区Ⅷ層からの出土である。**12**は砥石であり，13区Ⅴ層から出土した。石材は砂岩で，下半部を欠損している。断面はほぼ長方形で，両面と片側側辺に研磨痕が見られる。現存長7.3㎝，幅7.0㎝，厚さ2.6㎝，重さ240ｇである。**13**は玄武岩製の敲石であり，11区東側調査区Ⅱ層溝下層から出土した。平面形は角のとれた三角形をし，両面に殴打による凹みと研磨痕があり，両側辺に殴打痕と研磨痕が残る。長さ9.6㎝，幅8.5㎝，厚さ5.4㎝，重量615ｇを測る。

（註１）『概説 中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会編 真陽社 1995）の「Ⅲ 土器・陶磁器　１．土師器 Ⅲ」（伊野近冨）の口径・器高推移図を参考に推測した。

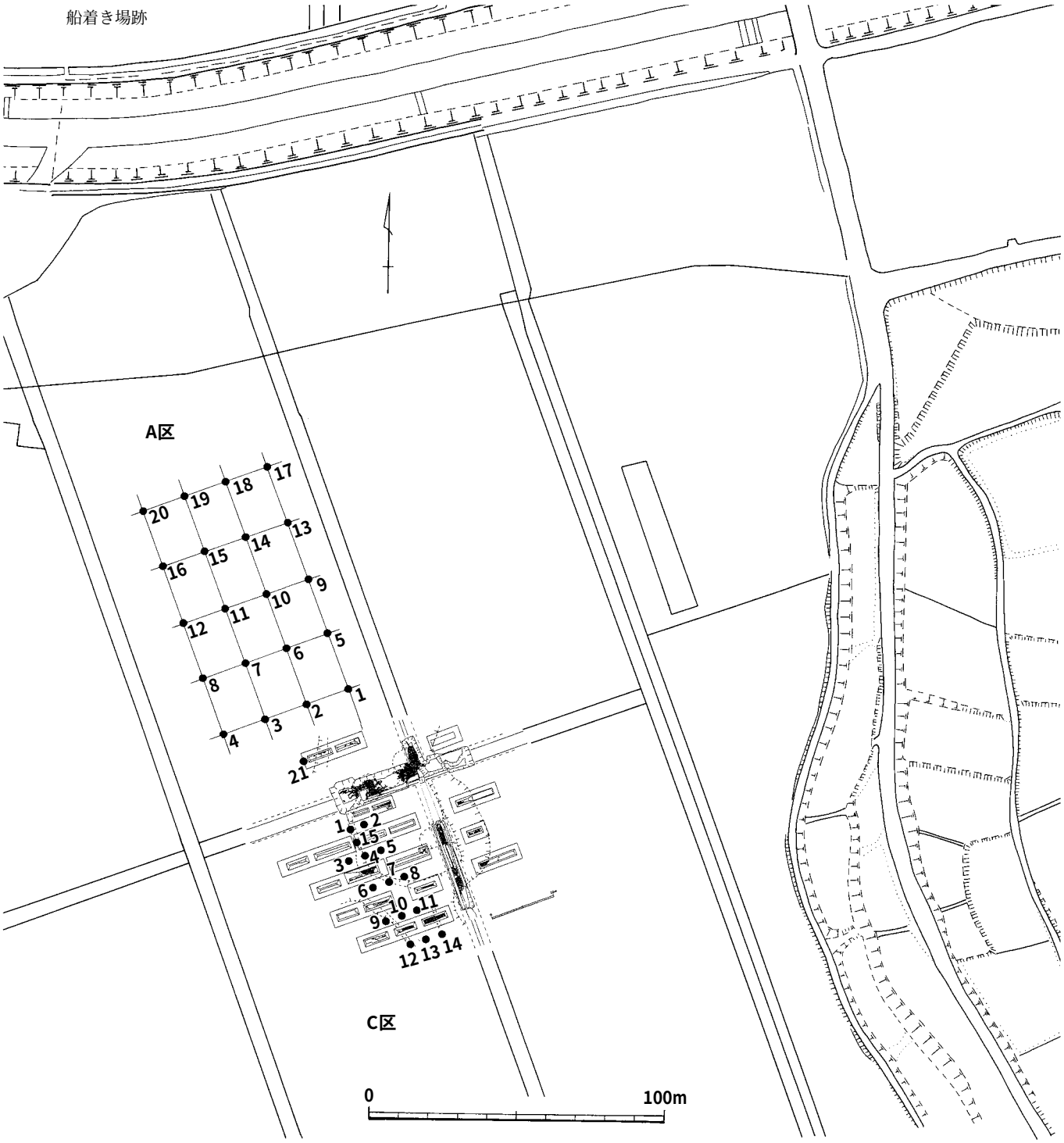
（註２）註１と同じ文献の「Ⅱ 土器・陶磁器　３ 緑釉陶器」（高橋照彦）の編年を参考にした。

（註３）「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案－生産地編年を視野として－」（森本朝子・片山まび『博多研究会』８号）の編年を参考にした。

⑸ **ボーリング調査**（第49図）

原の辻遺跡周辺のボーリング調査については平成16年度から継続して実施しており，平成18年度は船着き場跡周辺とその南側圃場部のボーリング調査を実施した。今年度の調査の目的は，船着き場がつくられた河川の流路の確認と，船着き場跡の形状を裏づけるための補完調査である。調査期間は平成18年12月５日から15日の10日間であり，船着き場跡北側圃場部（Ａ区）が21ヶ所，船着き場跡周辺（Ｃ区）が15ヶ所，計36ヶ所に実施した。調査は径４㎝の管を３ｍ以上打ち込んで円柱状のコアを採取し層位を観察する方法であり，耕作土と圃場整備の造成土を除きそれ以下の層位を対象にした。詳細な報告は次年度以降の報告書の中で掲載したいと考えるが，調査に立ち会って得た情報をもとに報告したい。なお調査区の呼称はＡ区の１区をＡ－１，Ｃ区の１区をＣ－１とし，順に番号を付している。

Ａ区は現在圃場整備後の平坦な水田が広がっており，旧地形の形状は全く見ることができない。平成17年度の船着き場跡の調査で１区を設定し，船着き場がつくられた幅約35ｍの河川が北東側の方向に流れを取ることが確認されており，ボーリング調査ではその追跡を行った。調査区は基本的に１区の南東調査杭から南に20ｍの間隔で５列，その軸から西に15ｍ間隔に４列に設定した。また，Ａ－21



第49図　平成18年度船着き場跡周辺ボーリング調査位置図（1/2,000）

区はA区の基本層序を知るために設定した。その結果，すべての調査区で弥生時代の河川跡は確認されず，弥生時代以前の腐植土の堆積が確認された。唯一A－1に河川跡がかかることが推測されたが，古代から中世の遺物を伴う溝の堆積層が深くまで確認されたため，河川の確定はできなかった。また，岩盤が標高約3mにあり，ほぼ平坦な面を形成しているようである。

C区は船着き場跡のトレンチ調査の補完調査を目的として，船着き場跡西側や南側の石組の有無の確認を中心に調査区を設定し，A区と同じく標高約3mの地点の岩盤を目安として調査を実施した。

まず，２区と３・10区の間（Ｃ－１・２）であるが，石組の存在は確認できなかった。追認するために10区と２区の中間点に調査区（Ｃ－15）を設定したが，礫はあたらなかった。３・10区と４・11区の間Ｃ－３・４・５では，Ｃ－４で標高約４ｍ前後の地点で礫にあたり，突き抜けて岩盤に至った。その両側からは礫は確認されていない。Ｃ－６からＣ－11までは全く礫があたらなかった。13区の南側では，Ｃ－12で比較的浅い位置に，またＣ－13で川床に近い位置に礫があり，Ａ－14では下層に砂の堆積が確認されている。総じて考えると，石組は極めて限られた範囲にのみ存在し，船着き場跡の西側縁辺部では11区の東側調査区周辺と５区から13区東側でしか確認されていない。

⑹ 小　　結

①船着き場跡の形態について（第50図）

平成18年度の調査では，船着き場跡の西側と南側を中心に調査を実施し，その状況が明らかになった。平成８年と平成17年の調査成果をあわせて，船着き場跡の形態についてまとめてみたい。

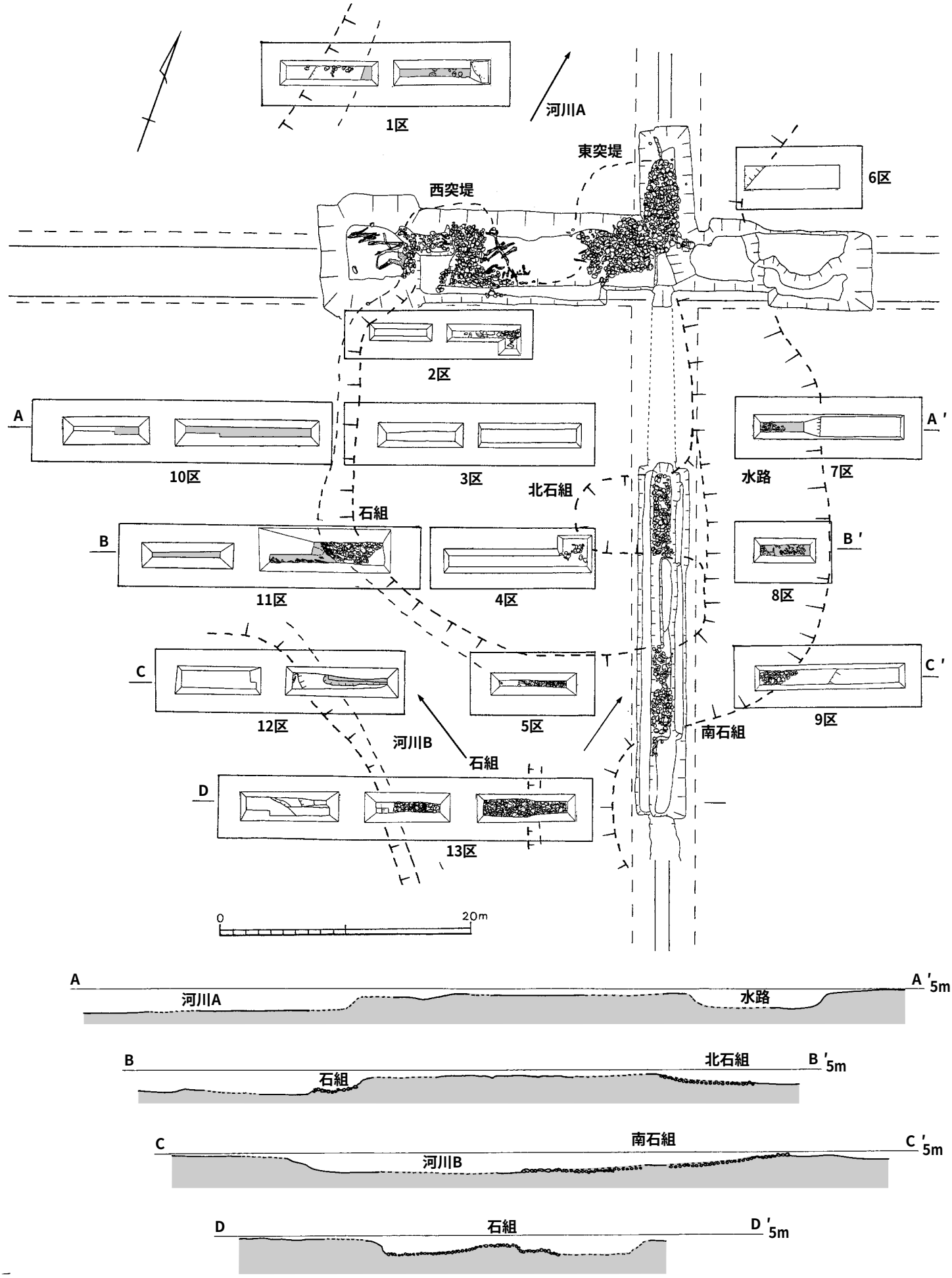
まず，船着き場がつくられた地形だが，昨年確認された船着き場跡の北西側に位置する幅約35ｍの河川（河川Ａ）と，今年確認された南西側に位置する幅約12ｍの河川（河川Ｂ）により形成された三角形の地形を利用してつくられたことが予想される。東側の陸地につながる部分は水路を造成することで島状の地形をつくり出している。

遺構については，平成８年度に確認された東突堤・西突堤をはじめ，昨年追認された北石組・南石組は明らかである。また今年度は，西側縁辺部に石組遺構（11区）が検出され，南側にも船着き場跡に付随した石組遺構（13区）があることがわかった。11区の石組遺構は，河川と接する部分に石の倒壊を防ぐため，杭と横木と樹皮・草束などでしっかりと固定しており，高度な土木技術を見ることができた。また南側の石組遺構については機能は不明であるが，船着き場の周辺においても礫石を利用した大規模な遺構があることを推測させる。

当初は，11区で確認した石組遺構が西突堤につながるものであり，船着き場周辺部すべてに石組がめぐると想定していた。ところが，10区の調査区を東側に拡張し３区との距離をなるべく詰め，且つボーリング調査でその中間地点に管の打ち込みを実施したが，全く礫石は確認されなかった。つまり西側の石組遺構は11区周辺の限られた範囲に築かれたものであり，西側縁辺に広がるものではないことが判明した。石積みの平面の形態が丸みを帯びていることや船着き場のほぼ中央部にあたることを考えると北石組と左右対称的な遺構であることが推測できる。

13区に確認された石組遺構は，南石組とのつながりが非常に深いが，南石組の最深部と13区の石組の最頂部はほぼ同じ高さであり，河川の中に水没することが予想される。11区の石組遺構ほどに精巧なつくりではないことから，簡易的な施設で，導水もしくは堰などの水利施設と考えている。更に南側の部分は次年度に調査予定であり，その成果を待ちたい。

船着き場跡の規模は，南北が突堤から南石組（石敷きの水路）までの長さ約40ｍ，東西の幅は西側の石組遺構から北石組までの約30ｍである。船着き場跡の天場が標高約4.8ｍ，河川および水路の河床部の高さが約3.5ｍである。船着き場周辺での水侵部分では南西側の南石組の床部がもっとも浅く，



第50図　船着き場跡推定図（1/400）

水路の傾斜面に石敷きを伴うことから，この部分が水の浸食から護るべき施設であると考える。また，水路と河川に挟まれた船着き場跡の中では丘陵部から最も入りやすい場所であり，船着き場の導入路の可能性は非常に強い。

最後に船着き場跡の時期である。平成８年度の調査で突堤部から弥生時代中期前葉（註１）の土器が出土しており，構築年代をその時期に求めている。昨年度の調査では船着き場西側水路の河床部から同じく中期前葉の土器が出土している。今年度出土した弥生土器は，すべて船着き場跡西側の河川（河川Ａ）河床部からの出土である。その中で時期のわかる出土遺物として無頸壺（第48図２）があるが，弥生時代中期末から後期初頭にあたり，河川がこの時期まで存在したことは明らかである。船着き場築造の時期については，今年度検出された西側石組遺構の杭材の一部からウィグルマッチングによる年代測定を実施しており，近いうちに実年代が判明する予定である。詳細は次回の報告書に掲載したいと思っている。

②船着き場の終焉とその後の地形の変化（第51図・第52図）

船着き場跡の廃絶の時期については，弥生時代後期初頭という説が有力である（註２）。今年度の調査ではこれを検証できるほどの成果は得られなかった。ただ，船着き場の西側河川の変遷については各調査区の層位の検証から明らかになった部分もあるため，若干触れてみたい。

第51図は，Ⅶ層明灰色粘質土の堆積が確認された範囲である。11区や５区・13区では石組遺構の上に堆積していたことから，船着き場廃絶後の堆積層と言える。特に10区から11区にかけては広範囲に広がり，平坦面を造り出していることから意図的な造成とも考えられる。また，弥生時代の河川Ａ・Ｂの幅を蛇行しながら流れる流路が確認される。この流路はⅤ層の黒灰色腐植土を含む層であり，Ⅶ層の上層で弥生時代終末から古墳時代前期の層である。つまり，このⅦ層の堆積した年代が明らかとなれば船着き場跡の終焉の時期を探る手かがりとなる。

第52図は，中世の溝の流路である。河床面は弥生時代の河川から70～80㎝上がっているが，当時の河川幅の内側を通るようにつくられている。13区までは南から北へ真っ直ぐであるが，12区から10区にかけては西側に屈折し直線的に延びている。弥生時代の河川の名残を見ることができる。

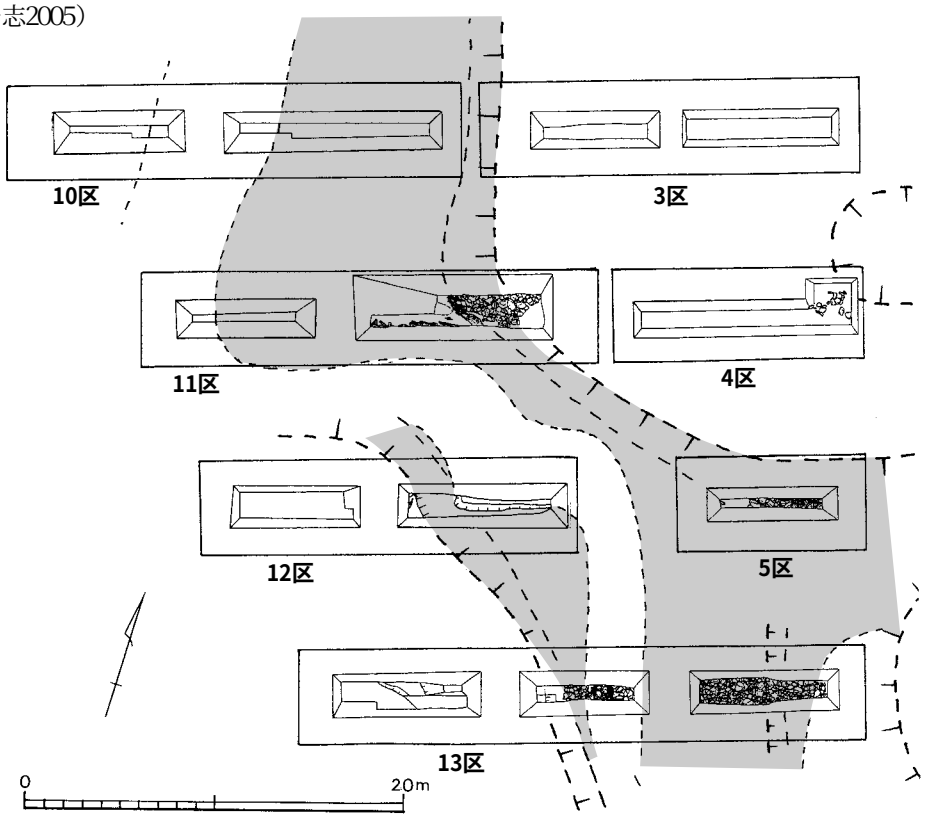
③船着き場跡調査の今後の課題

今年度の調査で船着き場跡の形状については推定できた。ただ船着き場跡がつくられた河川の規模や流路については不確定な部分が多い。また，今年度，南側で船着き場跡に関連する石組遺構が検出されたことにより，更に広がることが予想される。丘陵と船着き場跡を結ぶ平場部分の調査とあわせて継続した調査が必要である。

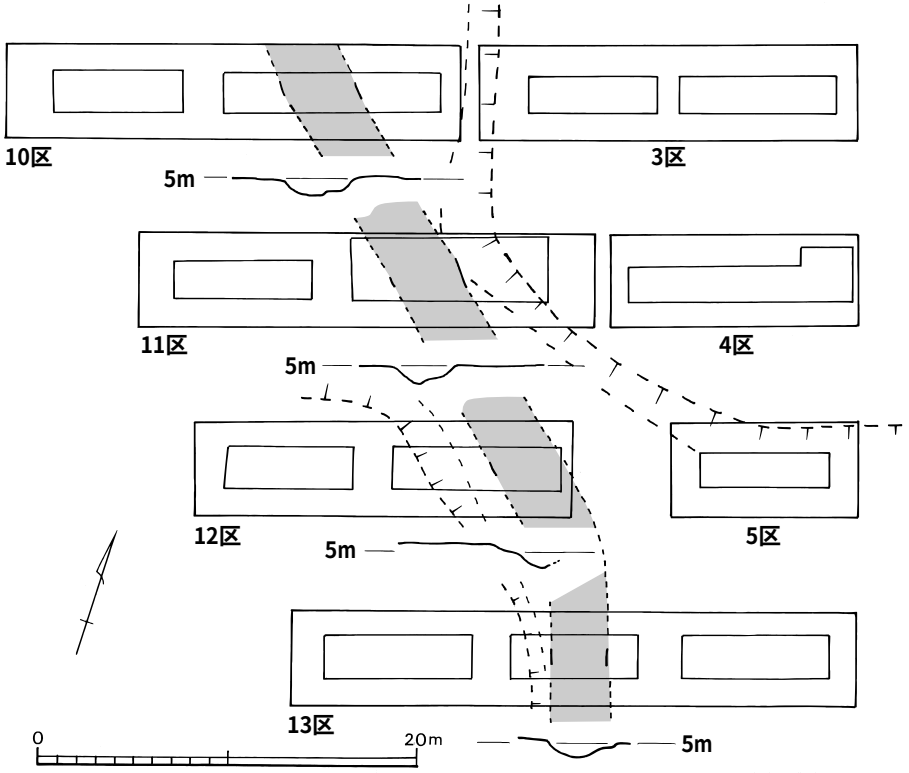
（註１）土器の年代については，『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』「Ⅴ 遺物 １ 土器」（宮崎貴夫）の土器編年を参考にした。編年では中期Ⅱ期（中期前葉古段階）～Ⅲ期（中期前葉新段階）にあたる。

（註２）船着き場跡の下限の時期については，宮崎貴夫氏が「壱岐原の辻遺跡の弥生時代船着き場」『九州考古学会・嶺南考古学会第３回合同考古学大会 環濠集落と農耕社会の形成』（1998）や「原の辻遺跡の歴史的契機について」『西海考古 第４号』（2001）の中で述べられている。その根拠として，船着き場跡がある西側低地部では弥生時代後期初頭で人々の生活の痕跡が希薄になることから，この時期が原の辻遺跡の大きな転換期であり，新たな場所への移設が想定されている。移設場所とし

ては丘陵東側の低地部が考えられており，東側環濠に直行する角度で通路状遺構が延びており，その時期が後期前葉から終末期といわれている。(『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』「Ⅳ 遺構 1．環濠」福田一志2005)



第51図 Ⅶ層（明灰色粘土層）堆積状況（1/400）



第52図 中世溝（Ⅱ層）検出状況（1/400）

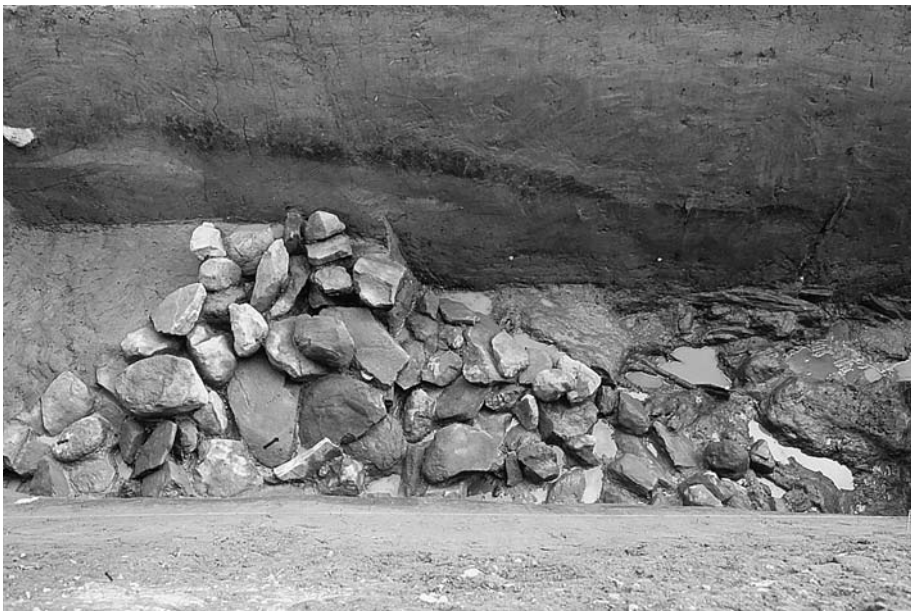
船着き場跡から
丘陵を望む

10区東　完掘状況
（南西から）

10区東　明灰色粘質土
（Ⅶ層）堆積状況
（西から）

図版８

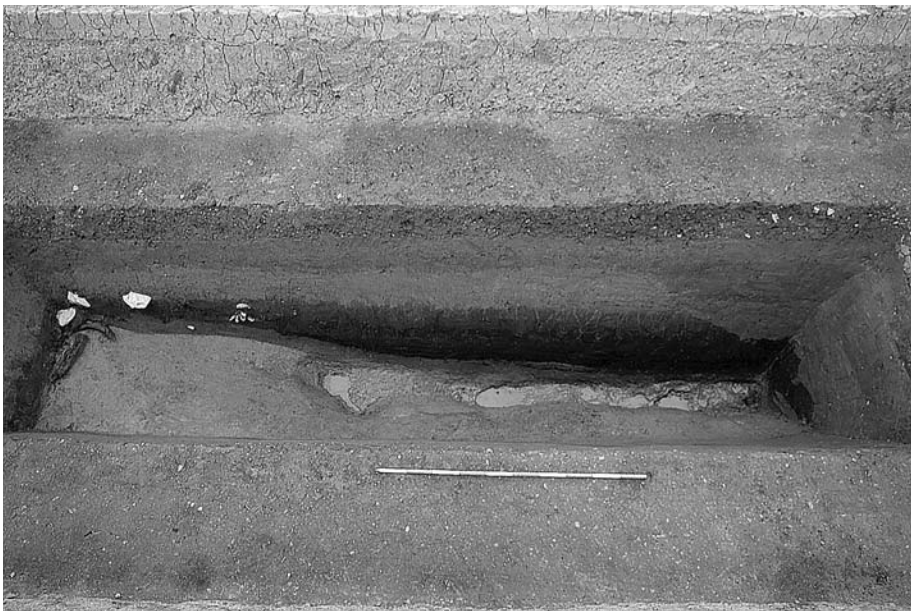
10区西　完掘状況
（南から）



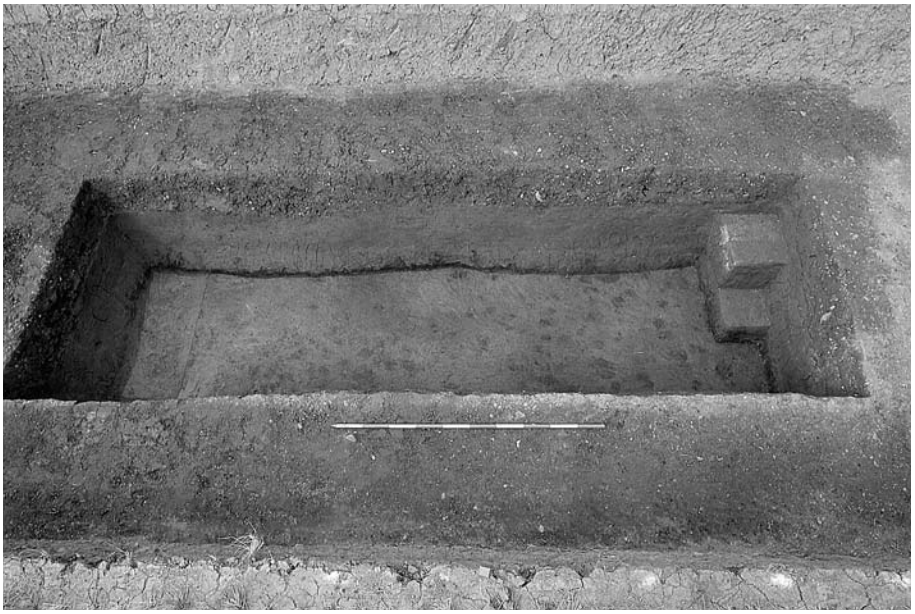
11区東　石組検出状況
（北から）

11区東　中世溝土層
検出状況（北壁）

11区西　完掘状況
（南から）



12区東　完掘状況
（南から）



12区西　完掘状況
（南から）

図版10

13区東　石組検出状況
（南から）

13区中　河川内礫
出土状況（南から）

13区西　弥生時代以前の
河川跡検出状況（北壁）

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・孔智賢・鈴木茂

１．はじめに

長崎県壱岐市原の辻遺跡の石田高原地区の遺構より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。試料の採取は鈴木，試料の調整は山形，瀬谷，Lomtatidze, Jorjoliani が，測定は小林，丹生，伊藤が行い，本文は孔，伊藤が作成した。

２．試料と方法

測定試料の情報，調整データは表１のとおりである。

試料は５点で，石田高原地区のＢ～Ｅ区の溝である SD１～４から採取された炭化材と生材である。試料 No.１（PLD-6825）は，SD１のｂ層から出土した炭化材であるが，材の部位は不明である。試料 No.２（PLD-6826）は，SD２の③層から出土した生材であるが，材の部位は不明である。試料 No.３（PLD-6827）は，SD３の⑤層から出土した炭化材であるが，材の部位は不明である。試料 No. 4（PLD-6828）は，SD４遺構上部にあるの道路状遺構の１層出土の生材で，根の可能性がある部位を測定した。No.５（PLD-6829）は，SD４の10層出土の生材で，材の部位は不明である。試料が採取された遺構で出土した土器の年代範囲は弥生時代中期～古墳時代初頭である。

表１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6825	位置：Ｄ区 北壁 遺構：SD１ 試料 No.１ その他：試料Ｃ	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム１N，塩酸1.2N）	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6826	位置：E区北 北壁1 遺構：SD２ 試料 No.２ 層位：下部	試料の種類：生試料・材 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム１N，塩酸1.2N）	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6827	位置：Ｂ区 北壁 遺構：SD３ 試料 No.３	試料の種類：炭化物・材 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム１N，塩酸1.2N）	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6828	位置：Ｃ区 南壁 遺構：道路状遺構 試料 No.４	試料の種類：生試料･材（根） 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム１N，塩酸1.2N）	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6829	位置：Ｃ区 南壁 遺構：SD４ 試料 No.５	試料の種類：生試料・材 試料の性状：不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム１N，塩酸1.2N）	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

試料は調整後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

３．結　　果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行った^{14}C 年代，^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲，暦年較正に用いた年代値を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C 年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差, 標準偏差等に基づいて算出され, 試料の^{14}C 年代がその^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±１σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±１σ)
			１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲	
PLD-6825	−30.59±0.14	1860±15	80AD(9.1%)110AD 120AD(43.5%)180AD 190AD(15.6%)220AD	80AD(95.4%)220AD	1862±16
PLD-6826	−27.53±0.13	2100±20	170BC(68.2%) 90BC	180BC(95.4%) 50BC	2098±18
PLD-6827	−29.67±0.15	2350±20	405BC(68.2%)390BC	485BC(1.9%)465BC 415BC(93.5%)380BC	2349±18
PLD-6828	−29.18±0.15	2075±15	115BC(68.2%) 45BC	170BC(95.4%) 40BC	2074±17
PLD-6829	−26.49±0.15	2290±15	395BC(68.2%)370BC	400BC(88.1%)350BC 280BC(7.3%)250BC	2289±17

暦年較正

暦年較正とは，大気中の^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal 3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

４．考　　察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち，その確率の最も高い年代範囲に着目すると，それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

SD１から出土した炭化材（PLD-6825）の暦年較正年代は，１σ（68.2%）確率で120-180 calAD（43.5%）の年代範囲が最も確率が高く，２σ（95.4%）確率で80-220 calAD（95.4%）であった。この年代は弥生時代後期前葉～後葉の年代範囲に含まれる。

同様にSD２から出土した生材（PLD-6826）は，２σ確率で180-50 calBC（95.4%）の年代範囲で，弥生時代中期中葉～後葉に含まれる。

SD３は2002年発掘調査されたSD５と同一の溝である。SD５では弥生時代中期～弥生時代終末の土器が出土したが，SD３では遺物が出土しなかった。SD３から出土した炭化材（PLD-6827）は，２σ確率で415-380 calBC（93.5%）の年代範囲で，弥生時代前期後葉に含まれる。

SD４から出土した生材（PLD-6829）は，２σ確率で400-350 calBC（88.1%）の年代範囲で，弥生時代中期前葉の年代範囲に含まれる。

SD４遺構の上部にある道路状遺構の礫群から出土した生材（PLD-6828）は，170-40 calBC（95.4%）の年代範囲で，弥生時代中期前葉～後葉の年代範囲が得られた。

【参考文献】

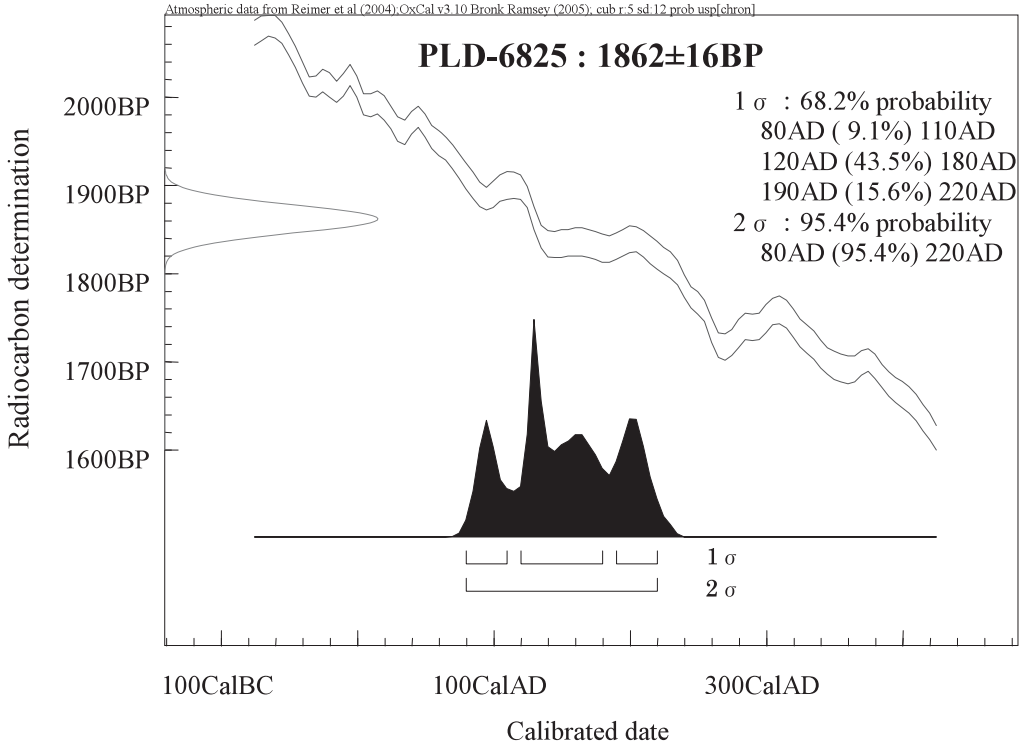
Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.

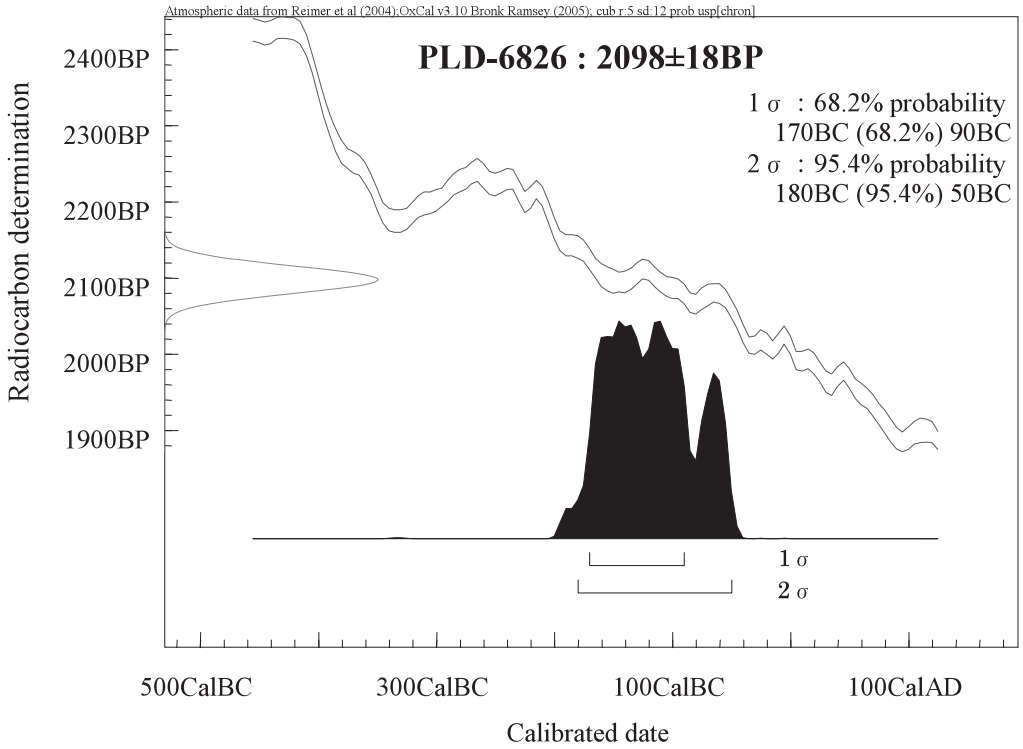
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

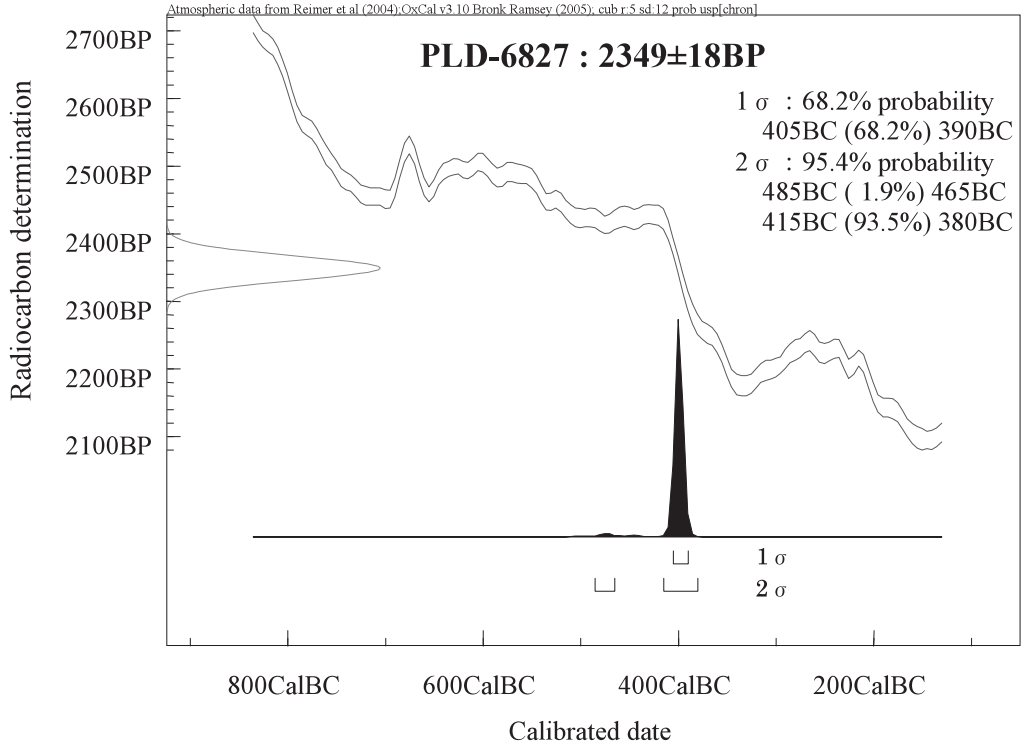
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C 年代，3-20.

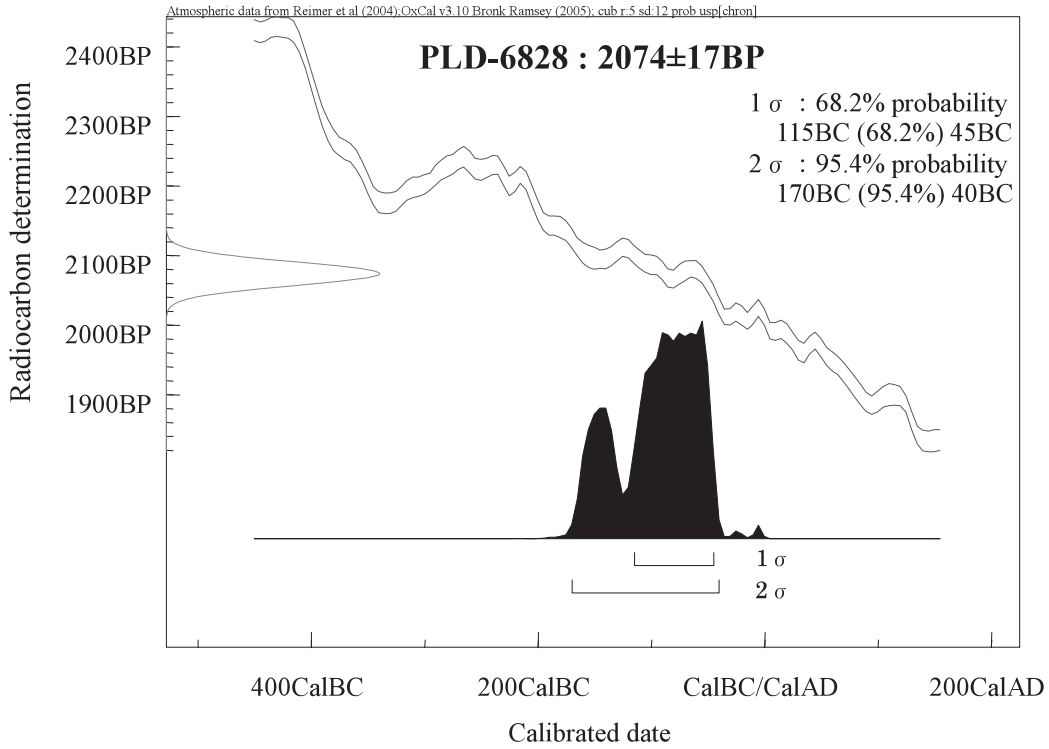
長崎県教育委員会（2005）原の辻遺跡　総集編Ⅰ．平成16年度までの調査成果．原の辻遺跡調査研究事業調査報告書　第30集.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-6825 : 1862±16BP
1 σ : 68.2% probability
80AD (9.1%) 110AD
120AD (43.5%) 180AD
190AD (15.6%) 220AD
2 σ : 95.4% probability
80AD (95.4%) 220AD
Radiocarbon determination
2000BP
1900BP
1800BP
1700BP
1600BP
1 σ
2 σ
100CalBC
100CalAD
300CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-6826 : 2098±18BP
1 σ : 68.2% probability
170BC (68.2%) 90BC
2 σ : 95.4% probability
180BC (95.4%) 50BC
Radiocarbon determination
2400BP
2300BP
2200BP
2100BP
2000BP
1900BP
1 σ
2 σ
500CalBC
300CalBC
100CalBC
100CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-6827 : 2349±18BP
1 σ : 68.2% probability
405BC (68.2%) 390BC
2 σ : 95.4% probability
485BC (1.9%) 465BC
415BC (93.5%) 380BC
Radiocarbon determination
2700BP
2600BP
2500BP
2400BP
2300BP
2200BP
2100BP
1 σ
2 σ
800CalBC
600CalBC
400CalBC
200CalBC
Calibrated date


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-6828 : 2074±17BP
1 σ : 68.2% probability
115BC (68.2%) 45BC
2 σ : 95.4% probability
170BC (95.4%) 40BC
Radiocarbon determination
2400BP
2300BP
2200BP
2100BP
2000BP
1900BP
1 σ
2 σ
400CalBC
200CalBC
CalBC/CalAD
200CalAD
Calibrated date

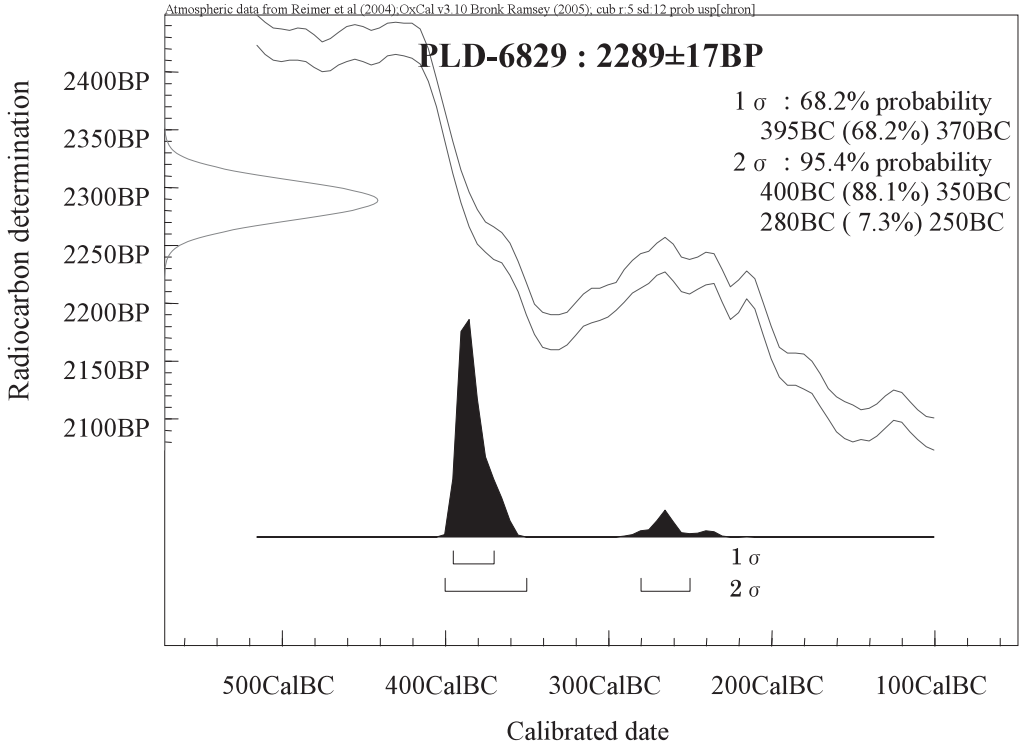

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-6829 : 2289±17BP
1 σ : 68.2% probability
395BC (68.2%) 370BC
2 σ : 95.4% probability
400BC (88.1%) 350BC
280BC (7.3%) 250BC
Radiocarbon determination
2400BP
2350BP
2300BP
2250BP
2200BP
2150BP
2100BP
1 σ
2 σ
500CalBC
400CalBC
300CalBC
200CalBC
100CalBC
Calibrated date

図 1　暦年較正結果

原の辻遺跡の花粉化石群集

新山　雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

原の辻遺跡周辺の古植生を復元する目的で，道路状遺構および溝の覆土について花粉化石群集を検討した。

２．試料と方法

花粉化石群集の検討は，Ｃ区南壁より採取された合計２試料（試料Ｂ，Ｅ）について行った。本地点は，９つの土層に層位区分されており，上位より江戸時代のⅢａ層，古墳時代～古代のⅢｂ層，道路状遺構の１層，SD４（溝）の２・５・９・10・14の各土層，地山のⅨ層である。試料は，最上位のⅢａ層を除く各土層より採取されたが（試料Ａ～Ｈ），このうち，分析したのは道路状遺構の１層下部より採取された試料ＢおよびSD４覆土下部の10層上部より採取された試料Ｅである。試料Ｂは，黒褐色粘土で根状の褐鉄鉱が認められる。試料Ｅは，灰褐色粘土で褐鉄鉱が認められる。なお，試料Ｂが採取された１層上部の生材と試料Ｅが採取された10層上部の生材は，放射性炭素年代測定（AMS法）が行われた。その結果，１層上部の生材は，１σ歴年代範囲においてcal BC 115-45年（68.2%），２σ歴年代範囲においてcal BC 170-40年（95.4%）と測定され，弥生時代中期中葉～後葉の年代であった。また，10層上部の生材は，１σ歴年代範囲においてcal BC 395-370年（68.2%），２σ歴年代範囲においてcal BC 400-350年（88.1%）と測定され，弥生時代中期前葉の年代であった。

花粉化石の抽出は，試料約２ｇを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離，傾斜法による粗粒砂除去，フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解，アセトリシス処理（氷酢酸による脱水，濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお，フッ化水素酸処理後，重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は，残渣を蒸留水で適量に希釈し，十分に攪拌した後マイクロピペットで取り，グリセリンで封入した。検鏡は，プレパラート１～２枚の全面を走査し，その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして，各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし，草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし，クワ科，マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが，区別が困難なため，ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお，複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

３．花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は，樹木花粉19，草本花粉12，形態分類で示したシダ植物胞子２であ

る。いずれの試料も花粉化石の産出個数は，あまり豊富ではなく，保存状態もあまり良好ではないものが目立った。特に，試料Ｂは，樹木花粉の産出個数が少なく，花粉化石分布図として示すことは控えた。以下に，各試料の花粉化石群集を記載する。

試料Ｂ（１層下部；道路状遺構覆土）：樹木花粉で比較的多産したのは，クリ属とシイノキ属に次いでマツ属（不明；複維管束亜属と単維管束亜属を識別できなかったもの）である。他に，マキ属，クマシデ属－アサダ属，ハンノキ属，コナラ亜属，アカガシ亜属，エノキ属－ムクノキ属，サンショウ属，グミ属が僅かに産出した。草本花粉は，アブラナ科，イネ科，ヨモギ属の順に多産し，クワ科，アカザ科－ヒユ科，マメ科，セリ科，タンポポ亜科が僅かに産出した。なお，プレパラート中には，寄生虫卵が散見され，鞭虫卵かと思われるものが９個確認された。

試料Ｅ（10層上部；SD４覆土下部）：樹木花粉の占める割合は40%弱であり，シイノキ属が50%弱で最も高率である。次いで，クリ属が20%強であり，マツ属（不明）・エノキ属－ムクノキ属も約５%で若干目立つ。他に，スギ属，ハンノキ属，コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属，サンショウ属，ツタ属が２～３%程度で出現し，マキ属，トウヒ属，カバノキ属，アカガシ亜属，グミ属，エゴノキ属，イボタノキ属，テイカカヅラ属が１%未満で出現する。草本花粉は，イネ科が約24%で最も高率であり，次いでクワ科が約10%である。他に，オナモミ属，ヨモギ属，アカザ科－ヒユ科が５%前後で比較的目立ち，ガマ属，ギシギシ属，アブラナ科，セリ科，他のキク亜科が概ね１%以下で出現する。なお，本試料も寄生虫卵が散見され，鞭虫卵と思われるものが12個確認された。

４．考　　察

［SD４下部（10層上部）；試料Ｅ］

シイノキ属が卓越する照葉樹林が成立しており，落葉広葉樹のクリ属も主要素であった。他に，マツ属をはじめとしたスギ属，マキ属などの針葉樹，エノキ属－ムクノキ属をはじめとしたハンノキ属，コナラ亜属，ニレ属－ケヤキ属，サンショウ属，グミ属，エゴノキ属，イボタノキ属などの広葉樹が混じっており，ツタ属，テイカカヅラ属などの蔓植物が絡み付いていたと考えられる。SD４の10層堆積期は，ガマ属が生育するような水位の低い湿地ないし水溜り状であったと推定される。しかし，花粉化石の産出個数や保存状態がさほど良好ではないことから，余り安定した滞水環境ではなく，時にやや乾燥気味になるようなこともあった可能性が考えられる。SD４内ないしその周辺には，イネ科が卓越し，幾分乾き気味の場所にはクワ科，オナモミ属，ヨモギ属，アカザ科－ヒユ科をはじめ，ギシギシ属などが繁茂していた。一年生草本のオナモミ属，アカザ科－ヒユ科などの繁茂は，SD４周辺に居住域や耕作地などの人の攪乱を受ける場が存在していたことを示唆している。また，SD４内も鞭虫卵などの寄生虫卵と思われるものがやや目立って検出されたことから，糞尿が流れ込んで汚染されるなど，人の生活の影響を強く受けた富栄養化した溝であった可能性が考えられる。

［道路状遺構（１層下部）；試料Ｂ］

比較的多産するのがクリ属，シイノキ属，マツ属であり，試料Ｅと同様な分類群が産出することか

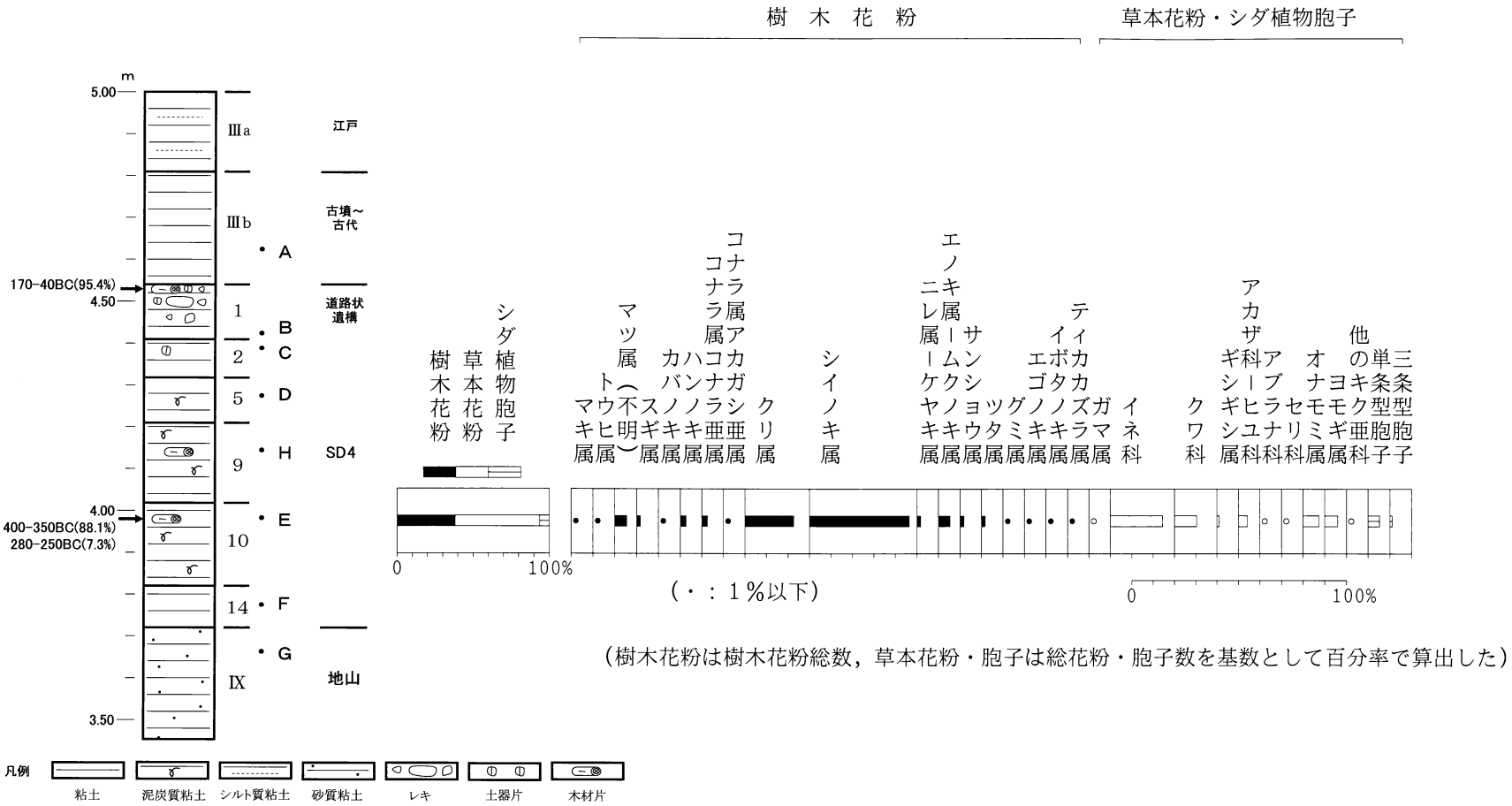
ら，周辺植生に余り大きな変化は見られなかった可能性が考えられる。道路状遺構には，アブラナ科，イネ科，ヨモギ属などをはじめ，アカザ科－ヒユ科，タンポポ亜科などが生育していたと考えられる。この道路状遺構は，多数の土器片や礫などを含んで構築されており，人が強く関わった遺構である。これら草本類は，雑草として生育していたかもしれないが，やや多産し，有用植物を多く含むアブラナ科など，一部の分類群がこの道路状遺構脇で栽培されるような耕作地が存在していた可能性も考えられる。

５．おわりに

弥生時代中期前葉の SD４下部（10層上部）と弥生時代中期中葉～後葉の道路状遺構（１層下部）の覆土について花粉化石群集を検討した。その結果，弥生時代中期前葉には，シイノキ属が卓越する照葉樹林が成立しており，落葉広葉樹のクリ属が主要素であったと考えられた。SD４の10層堆積期は，ガマ属が生育するような水位の低い湿地ないし水溜り状であった。SD４内やその周辺は，人の影響を強く受けており，イネ科，クワ科，オナモミ属，ヨモギ属，アカザ科－ヒユ科などが繁茂していた。

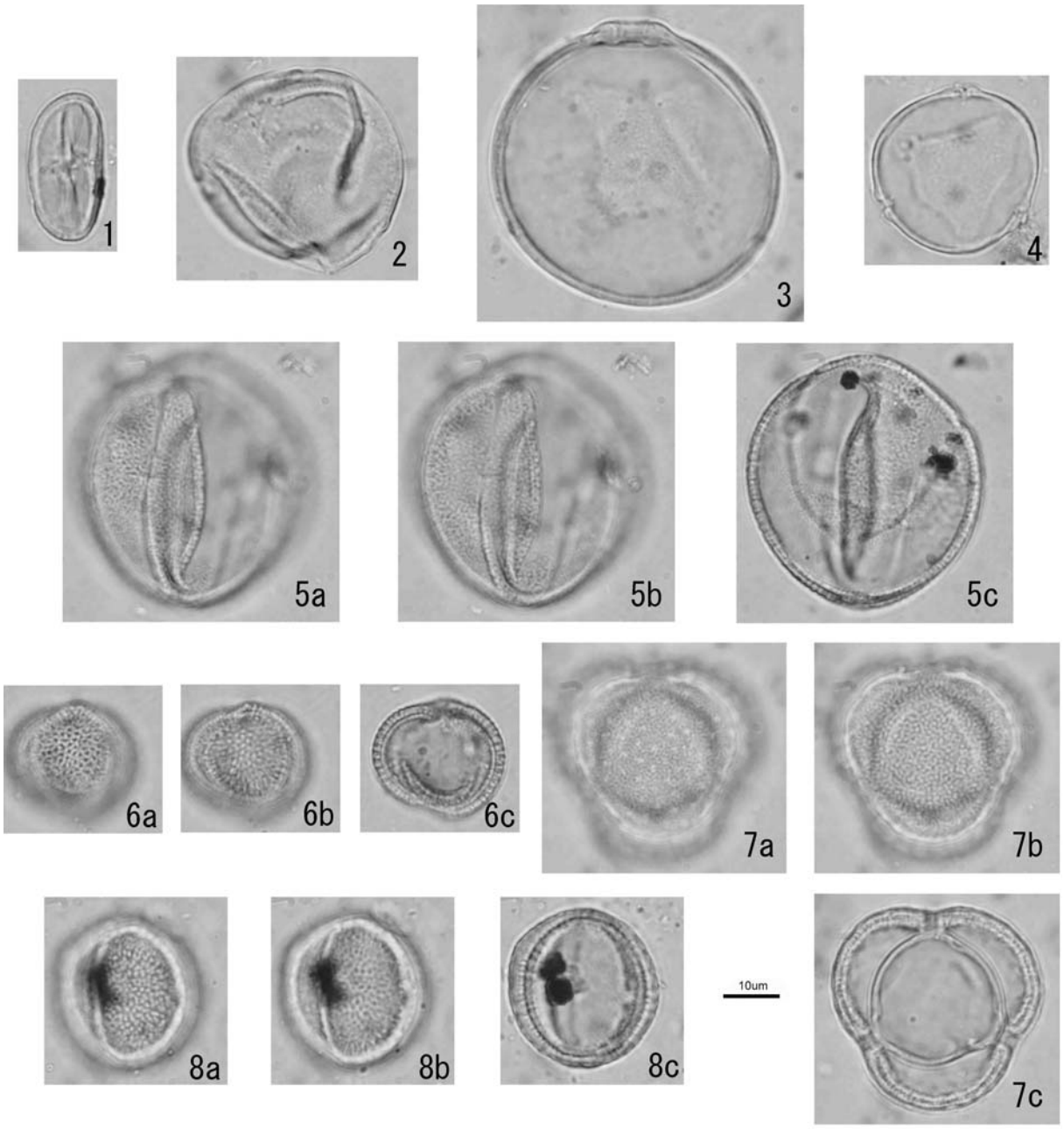
弥生時代中期中葉～後葉の周辺植生は，中期前葉と余り大きな変化はなかった可能性が考えられた。道路状遺構には，アブラナ科，イネ科，ヨモギ属などが生育しており，アブラナ科などは道路状遺構脇で栽培されていた可能性も考えられた。

和名	学名	B	E
樹木			
マキ属	*Podocarpus*	1	1
トウヒ属	*Picea*	-	1
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	7	6
スギ属	*Cryptomeria*	-	2
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	1	-
カバノキ属	*Betula*	-	1
ハンノキ属	*Alnus*	1	3
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	2	3
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	3	1
クリ属	*Castanea*	11	25
シイノキ属	*Castanopsis*	11	51
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	2
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	2	6
サンショウ属	*Zanthoxylom*	1	2
ツタ属	*Parthenocissus*	-	2
グミ属	*Elaeagnus*	2	1
エゴノキ属	*Styrax*	-	1
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	1
ティカカズラ属	*Trachelospermum*	-	1
草木			
ガマ属	*Typha*	-1	
イネ科	Gramineae	17	70
クワ科	Moraceae	2	30
ギシギシ属	*Rumex*	-	3
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	6	12
アブラナ科	Cruciferae	21	1
マメ科	Leguminosae	1	-
セリ科	Umbelliferae	3	2
オナモミ属	*Xantim*	-	21
ヨモギ属	*Artemisia*	12	17
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	-
シダ植物			
単条型胞子	Monolete spore	10	15
三条型胞子	Trilete spore	1	3
樹木花粉	Arboreal pollen	42	110
草本花粉	Nonarboreal pollen	64	159
シダ植物胞子	Spores	11	18
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	117	287
不明花粉	Unknown pollen	12	14



（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

図１　試料Ｅの花粉化石分布図



図版１　産出した花粉化石

１．シイノキ属，試料Ｅ，PAL. MN　2423
２．エノキ属－ムクノキ属，試料Ｅ，PAL. MN　2428
３．イネ科，試料Ｅ，PAL. MN　2425
４．クワ科，試料Ｅ，PAL. MN　2427
５．ギシギシ属，試料Ｅ，PAL. MN　2429
６．アブラナ科，試料Ｂ，PAL. MN　2430
７．オナモミ属，試料Ｅ，PAL. MN　2424
８．ヨモギ属，試料Ｅ，PAL. MN　2426

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡調査報告書
巻次	
シリーズ名	第36集
編著者名	川畑敏則・寺田正剛・溝上貴稔
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地１　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2007年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
原の辻遺跡（はるつじ）	長崎県壱岐市（ながさきけんいきし） 芦辺町（あしべちょう）・石田町（いしだちょう）	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	2006.6.1 ～ 2006.12.26	2,110m^2	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落・墓地	弥生時代 古墳時代	溝・土坑・道路状遺構・船着き場跡	弥生土器・土師器・敲石・石鎌・扁平片刃石斧・鉄斧・銅鏃・銅鏡・ガラス小玉	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第36集

原の辻遺跡

2007．3．26

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂